

平成17年度  
神戸市埋蔵文化財年報



2008

神戸市教育委員会

平成17年度  
神戸市埋蔵文化財年報

2 0 0 8

神戸市教育委員会



fig.1 端谷城跡第5次調査甲出土状況（東から）



fig.4 塩田北山東古墳第1主体部出土遺物



fig.5  
生田遺跡第4次調査  
出土縄文土器



fig.6  
生田遺跡第4次調査  
出土石鏃

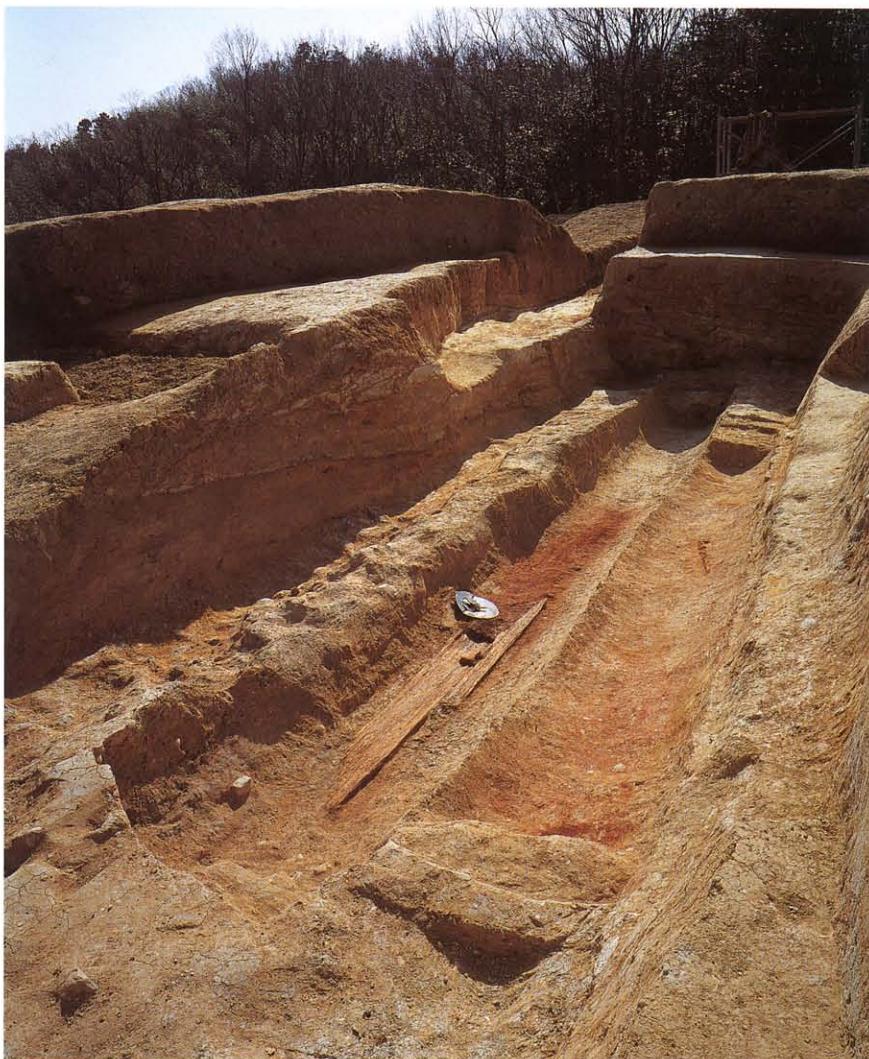


fig.2  
塩田北山東古墳  
第1・2主体部遺物出土状況  
(東から)

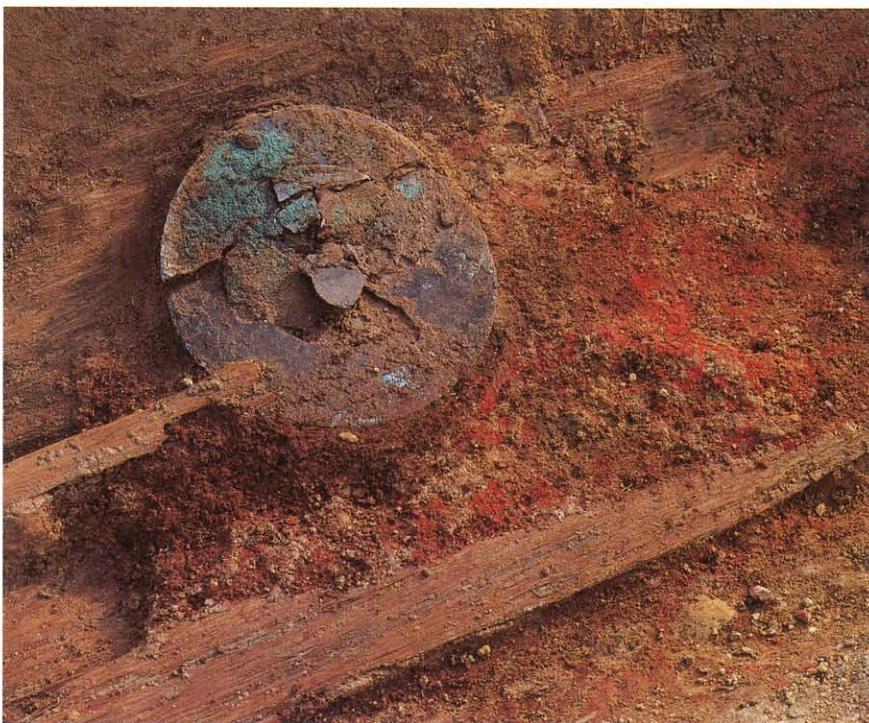


fig.3  
塩田北山東古墳  
第1主体部青銅鏡出土状況  
(北から)

# 序

昭和40年、古代の技術の粋を集めた前方後円墳の姿を復元すべく、史跡五色塚古墳に発掘調査の鍬が入れられました。日本で初めて復元された大型前方後円墳は、歴史の教科書にも広く掲載されてきましたが、発掘調査報告書は40年の歳月を経て、ようやく『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』として刊行することができました。調査終了後多くの時間を要しましたが、過去の歴史を将来につなぐため、現代の私たちが可能な限りの記録を報告書として残していくことが重要であると思っております。

本年報に掲載いたしました発掘調査の概要は、平成17年度に神戸市教育委員会が実施した調査の成果を、限られた紙面の中ではありますが、市民の皆様に還元すべく作成いたしました。この冊子から、地下に刻まれた郷土の歴史に興味を抱き、埋蔵文化財への理解を深めていただくことができれば幸いです。

最後に、発掘調査および本年報を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

神戸市教育委員会

# 例 言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成17年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関する発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

## 調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

檀 上 重 光 前 神戸女子短期大学教授  
工 楽 善 通 大阪府立狭山池博物館館長  
和 田 晴 吾 立命館大学文学部教授

## 教育委員会事務局

教 育 長	小川 雄三
社 会 教 育 部 長	高橋英比古
参事(文化財課長事務取扱)	桑原 泰豊
主幹(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	渡辺 伸行
事 務 担 当 学 芸 員	山本 雅和 佐伯 二郎 橋詰 清孝 井尻 格
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文 化 財 課 主 査	菅本 宏明 安田 滋
事 務 担 当 学 芸 員	東 喜代秀 内藤 俊哉
調 査 担 当 学 芸 員	谷 正俊 須藤 宏 山口 英正 浅谷 誠吾 藤井 太郎 関野 豊 阿部 功 中村 大介 中谷 正 平田 朋子 中居さやか
主幹(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	丸山 潔 富山 直人 川上 厚志 西岡 誠司

## (財)神戸市体育協会

会 長	家治川 豊
副会長(専務理事事務取扱)	矢野栄一郎
常 務 理 事	野浪 建作
総 務 課 長	横閑 勇
総務課主査(兼務)	菅本 宏明
調 査 担 当 学 芸 員	黒田 恭正 斎木 巍 阿部 敬生

2. 本書に記載した調査地点位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成17年度事業の概要1～6については山本雅和が、7については丸山 潔が執筆した。また、平成17年神戸市埋蔵文化財調査地點図と調査地点位置図については丸山が作成した。編集については、千種 浩の指導のもとに佐伯二郎、浅谷誠吾、川上厚志、中村大介が行った。
4. 挿図写真の撮影、遺構図のトレースは、各調査担当者が行った。
5. 卷頭カラー1は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏、2・3は丸山が、4～6は牛嶋氏の指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影を行った。
6. 表紙写真は端谷城跡第5次調査（本文100頁）出土の恵比寿文鬼板で、裏表紙写真は生田遺跡第4次調査（本文40頁）出土の土偶である。撮影は牛嶋氏の指導の下、杉本氏（西大寺フォト）が行った。
7. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

# 目 次

序  
例言

I.	平成17年度 事業の概要 .....	1
	平成17年度 埋蔵文化財発掘調査一覧 .....	10
	平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図 .....	13
II.	平成17年度の発掘調査	
1.	森 北 町 遺 跡 第23次調査 .....	17
2.	扁 保 曽 塚 古 墳 第 2 - b 次 調 査 .....	19
3.	岡 本 北 遺 跡 第 6 次 調 査 .....	21
4.	本 山 中 野 遺 跡 第 2 次 調 査 .....	23
5.	住 吉 宮 町 遺 跡 第40次調査 .....	25
6.	御 影 山 手 遺 跡 第 2 次 調 査 .....	28
7.	日 暮 遺 跡 第28次調査 .....	31
8.	二 宮 東 遺 跡 第 2 次 調 査 .....	34
9.	雲 井 遺 跡 第20次調査 .....	36
	第21次調査 .....	38
	第23次調査 .....	39
10.	生 田 遺 跡 第 4 次 調 査 .....	40
11.	花 隈 城 跡 第 2 次 調 査 .....	46
12.	下 山 手 北 遺 跡 第 2 次 調 査 .....	48
13.	祇 園 遺 跡 第13次調査 .....	53
14.	楠 ・ 荒 田 町 遺 跡 .....	56
	第34次調査 .....	57
	第36次調査 .....	58
	第37次調査 .....	60
15.	兵 庫 津 遺 跡 第39次調査 .....	64
16.	兵 庫 津 遺 跡 (兵 庫 城 跡 規 勃 確 認 調 査) .....	67
17.	八 幡 神 社 古 墳 群 第 1 次 調 査 .....	70
18.	中 遺 跡 第30次調査 .....	74
	第31次調査 .....	76
19.	御 蔵 遺 跡 第57次調査 .....	77
20.	二 葉 町 遺 跡 第19次調査 .....	80
21.	戎 町 遺 跡 第61・62次調査 .....	84
	第63次調査 .....	86
22.	行 幸 町 遺 跡 第 6 次 調 査 .....	88
	第 7 次 調 査 .....	90
23.	新 方 遺 跡 第45次調査 .....	92
24.	出 合 遺 跡 第34次調査 .....	94
25.	端 谷 城 跡 第 5 次 調 査 .....	100
III.	平成17年度の保存科学調査・作業の概要 .....	105

# 挿 図 目 次

- fig. 1 端谷城跡第5次調査甲出土状況（東から）  
 fig. 2 塩田北山東古墳第1・2主体部遺物出土状況（東から）  
 fig. 3 塩田北山東古墳第1主体部青銅鏡出土状況（北から）  
 fig. 4 塩田北山東古墳第1主体部出土遺物  
 fig. 5 生田遺跡第4次調査出土縄文土器  
 fig. 6 生田遺跡第4次調査出土石鏃  
 fig. 7 端谷城跡 現地説明会風景〔写真〕 ..... 4  
 fig. 8 端谷城跡 現地説明会風景〔写真〕 ..... 4  
 fig. 9 御影山手遺跡 現地説明会風景〔写真〕 ..... 4  
 fig.10 生田遺跡 現地説明会風景〔写真〕 ..... 4  
 fig.11 煉瓦下水道移設工事〔写真〕 ..... 5  
 fig.12 移設の完了した煉瓦下水道モニュメント〔写真〕 ..... 5  
 fig.13 親子で体験考古学講座  
 　「赤米づくりに挑戦しよう」の草取り〔写真〕 ..... 9  
 fig.14 親子で体験考古学講座  
 　「古代編みで携帯ストラップをつくろう」〔写真〕 ..... 9  
 fig.15 文化体験プログラム支援事業  
 　「みんなで堅穴住居を復元」〔写真〕 ..... 9  
 fig.16 文化体験プログラム支援事業  
 　「一泊二日で古代人の生活体験」〔写真〕 ..... 9  
 fig.17 企画展示「平家一門の都・福原京」 ..... 9  
 fig.18 企画展示「遺跡に見る神戸の自然災害」 ..... 9  
 fig.19 平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図 ..... 13  
 fig.20 調査地点位置図(1)・(2) ..... 14  
 fig.21 調査地点位置図(3)・(4) ..... 15  
 fig.22 調査地点位置図(5)・(6) ..... 16  
 fig.23 調査地点位置図 ..... 17  
 fig.24 遺構面平面図 ..... 18  
 fig.25 調査区全景〔写真〕 ..... 18  
 fig.26 調査地点位置図 ..... 19  
 fig.27 調査区全景〔写真〕 ..... 20  
 fig.28 遺構面平面図 ..... 20  
 fig.29 調査地点位置図 ..... 21  
 fig.30 遺構面平面図 ..... 22  
 fig.31 調査地点位置図 ..... 23  
 fig.32 出土遺物実測図 ..... 24  
 fig.33 調査地点位置図 ..... 25  
 fig.34 第1遺構面平面図 ..... 26  
 fig.35 第2遺構面平面図 ..... 27  
 fig.36 調査地点位置図 ..... 28  
 fig.37 遺構面平面図 ..... 29  
 fig.38 遺物出土状況図 ..... 30  
 fig.39 調査区全景1〔写真〕 ..... 30  
 fig.40 調査区全景2〔写真〕 ..... 30

- fig.41 調査地位位置図 ..... 31  
 fig.42 遺構面平面図・断面図 ..... 32  
 fig.43 調査区全景〔写真〕 ..... 33  
 fig.44 調査地位位置図 ..... 34  
 fig.45 遺構面平面図・断面図 ..... 35  
 fig.46 S D 1 0 1 〔写真〕 ..... 35  
 fig.47 調査地位位置図 ..... 36  
 fig.48 第1遺構面平面図 ..... 37  
 fig.49 調査区全景〔写真〕 ..... 37  
 fig.50 遺構面平面図 ..... 38  
 fig.51 調査区全景〔写真〕 ..... 38  
 fig.52 調査区全景〔写真〕 ..... 39  
 fig.53 遺構面平面図 ..... 39  
 fig.54 調査地位位置図 ..... 40  
 fig.55 調査区配置図 ..... 40  
 fig.56 縄文時代後期遺構面(下層1) ..... 43  
 fig.57 縄文時代後期遺構面(下層2) ..... 44  
 fig.58 調査区全景〔写真〕 ..... 45  
 fig.59 調査地位位置図 ..... 46  
 fig.60 堀状遺構復元図 ..... 47  
 fig.61 調査地位位置図 ..... 48  
 fig.62 遺構面平面図(第1・2次調査合成) ..... 49  
 fig.63 S B 2 2 出土の遺物 ..... 50  
 fig.64 S B 2 4 出土の遺物 ..... 51  
 fig.65 調査区全景〔写真〕 ..... 52  
 fig.66 調査地位位置図 ..... 53  
 fig.67 第2遺構面平面図 ..... 54  
 fig.68 出土遺物実測図 ..... 54  
 fig.69 第3トレント第2遺構面〔写真〕 ..... 55  
 fig.70 第2・3トレント第2遺構面〔写真〕 ..... 55  
 fig.71 調査地位位置図 ..... 56  
 fig.72 遺構面平面図・断面図 ..... 57  
 fig.73 遺構面平面図・断面図 ..... 59  
 fig.74 調査区全景〔写真〕 ..... 59  
 fig.75 S E 2 0 2 断ち割り状況〔写真〕 ..... 62  
 fig.76 井戸平面図・断面図 ..... 62  
 fig.77 第1遺構面平面図 ..... 63  
 fig.78 第2遺構面平面図 ..... 63  
 fig.79 第3遺構面平面図 ..... 63  
 fig.80 調査地位位置図 ..... 64  
 fig.81 遺構面平面図 ..... 65  
 fig.82 調査区全景〔写真〕 ..... 66  
 fig.83 遺構面平面図・断面図 ..... 68  
 fig.84 試掘坑遺構面平面図・断面図 ..... 69

fig.85	兵庫城復元図	69
fig.86	近世町屋遺構面〔写真〕	69
fig.87	石列検出状況〔写真〕	69
fig.88	調査地位置図	70
fig.89	八幡神社古墳群	70
fig.90	墳丘平面図	71
fig.91	第1主体部平面図・断面図	72
fig.92	塩田北山東古墳遠景〔写真〕	72
fig.93	第1主体部遺物出土〔写真〕	72
fig.94	八幡神社古墳群8号墳墳丘〔写真〕	73
fig.95	八幡神社古墳群8号墳石室〔写真〕	73
fig.96	調査地位置図	74
fig.97	調査区全景〔写真〕	75
fig.98	遺構面平面図	75
fig.99	遺構面平面図	76
fig.100	調査地位置図	77
fig.101	調査区全景〔写真〕	78
fig.102	遺物出土状況〔写真〕	78
fig.103	遺構面平面図	79
fig.104	調査地位置図	80
fig.105	19次-1調査区全景〔写真〕	82
fig.106	19次-2調査区全景〔写真〕	82
fig.107	遺構面平面図	83
fig.108	調査地位置図	84
fig.109	第61次調査遺構面平面図・断面図	85
fig.110	第62次調査遺構面平面図・断面図	85
fig.111	調査区全景〔写真〕	87
fig.112	第63次調査遺構面平面図・断面図	87
fig.113	調査地位置図	88
fig.114	遺構面平面図	89

fig.115	調査区全景〔写真〕	89
fig.116	遺構面平面図・断面図	91
fig.117	調査区全景〔写真〕	91
fig.118	調査地位置図	92
fig.119	土層断面図	93
fig.120	第1~4遺構面平面図	93
fig.121	調査区全景〔写真〕	93
fig.122	調査地位置図	94
fig.123	第1トレンチ北半部 遺構面平面図・断面図	95
fig.124	第1トレンチ全景〔写真〕	95
fig.125	第5トレンチ2区〔写真〕	96
fig.126	第5トレンチ4区 第1遺構面平面図	97
fig.127	第5トレンチ5区 第1遺構面平面図	98
fig.128	第5トレンチ6区 第2遺構面平面図	99
fig.129	調査地位置図	100
fig.130	遺構面平面図	102
fig.131	甲出土状況平面図	103
fig.132	端谷城跡全体図	104
fig.133	森北町遺跡出土「蘇民将来札」	105
fig.134	赤外線カメラ画像	105
fig.135	兵庫津遺跡出土特殊銭貨	106
fig.136	X線透過画像	106
fig.137	外縁マクロ写真	106
fig.138	孔内部顕微鏡写真	106
fig.139	端谷城甲出土状況1	107
fig.140	端谷城甲出土状況2	107
fig.141	取り上げ作業(ガーゼ貼付)	107
fig.142	取り上げ作業(エポキシ樹脂)	107

## 表 目 次

表1	文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1
表2	発掘調査面積	1
表3	発掘調査面積別件数	1
表4	現場公開一覧	4
表5	平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧1	10
表6	平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧2	11

表7	平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧3	12
表8	古墳時代掘立柱建物	41
表9	平成17年度出土金属製品	108
表10	平成17年度出土木製品	108
表11	平成17年度自然科学分析委託	108

# I. 平成17年度 事業の概要

## 1. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、開発面積の大小に関わらず、文化財保護法に基づく届出・通知（文化財保護法第93条・第94条）が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を指示している。

平成11年度以降は、建築確認申請に伴う事前届出制度（『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』）における事前届出書の閲覧を実施し、埋蔵文化財発掘届出書の提出および土木工事等についての文化財の取り扱いの指導を徹底してきた。

平成17年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、711件（前年度738件）であり、昨年度と比較して約4%の減となっている。このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が686件で、96%を占め、住宅関連によるものが75%を占める。

また、開発行為事前審査願（135件）、試掘調査依頼（231件）ともに件数では昨年度に比して微減傾向が認められる。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（文化財保護法第93・94条関係）	711件
i	民間の事業に伴う発掘届（93条）	686件
ii	公共の事業に伴う発掘通知（94条）	24件
iii	発掘届・発見通知（92条）	1件
2	発掘調査の報告（99条）	68件
3	開発行為事前審査等各種申請	135件
4	試掘調査（依頼件数）	231件
5	発掘調査（大規模確認調査も含む）	71件
i	民間事業に伴う発掘調査	48件
ii	公共事業に伴う発掘調査	20件
iii	圃場整備事業に伴う発掘調査	3件
6	工事立会	68件
7	整理作業（復興調査整理作業を含む）	6件

表2 発掘調査面積（単位：m<sup>2</sup>）

	民間関連事業	公共関連事業	合計
調査面積	14,543	7,077	21,620
延べ面積	17,752	10,477	28,229

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	調査面積	件数
100m <sup>2</sup> 以下	33	1,001～2,000m <sup>2</sup>	4
101～300m <sup>2</sup>	22	2,001～5,000m <sup>2</sup>	1
301～500m <sup>2</sup>	6	5,001m <sup>2</sup> 以上	0
501～1,000m <sup>2</sup>	5	合 計	71

ホームページ運用 平成16年12月より配信を開始している開発と埋蔵文化財保護との調整を目的とするホームページ「神戸市の埋蔵文化財」では、市内における遺跡の分布状況（遺跡分布図）とともに、事業者が開発事業計画策定に関する情報を発信してきた。

このホームページの運用により、窓口・電話等の包蔵地に関する問い合わせ件数の減少が期待されたが、年間を通じてこれまでとは大きな変化は認められず、むしろ開発件数と連動しているようである。

2. 刊行物一覧 平成17年度に刊行した埋蔵文化財関係の刊行物は下記のとおりの12冊である。

『平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報』	頒価 1,600円
『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』	頒価 5,000円
『吉田南遺跡 第17・18次調査発掘調査報告書』	頒価 2,000円
『大橋町遺跡 第1次－1～6調査 発掘調査報告書』	頒価 800円
『雲井遺跡 第20次調査 発掘調査報告書』	頒価 400円
『御影山手遺跡 第2次発掘調査概報』	頒価 400円
『兵庫津遺跡－第35次発掘調査概要－』	頒価 200円
『兵庫津遺跡 第36次発掘調査概要報告書』	頒価 900円
『舞子砲台跡－第1～4次発掘調査報告書－』	頒価 1,400円
『神戸市埋蔵文化財分布図』	頒価 600円
企画展図録『西求女塚古墳と青銅鏡』	頒価 600円
企画展図録『西神ニュータウン内の遺跡』	頒価 300円

3. 発掘調査事業 平成17年度に実施した発掘調査事業は80件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、370,847千円であった。これらの内訳は、

開発事業に伴う本発掘調査	74件	341,108千円
遺跡整備等に伴う事前調査（報告書作成）	2件	5,997千円
遺跡の保存目的の範囲確認調査	4件	17,995千円
試掘・確認調査	231件	5,747千円 である。

国庫補助事業 文化財保護法の規程と国の補助事業の採択基準により採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を実施している。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費87,000千円であった。

このうち、長らく懸案となっていた国史跡五色塚古墳の発掘調査報告ならびに史跡整備報告書の作成（3,666千円）や舞子砲台跡国史跡指定に向けた発掘調査報告書の作成（1,363千円）などの事業を実施している。

また、保存目的の調査として、端谷城跡、淡河城跡、池谷城跡、大輪田泊・福原京関連（祇園遺跡・兵庫城跡）の5遺跡で実施した。いずれも当市において重要かつ将来の史跡指定を目指す遺跡であり、その保護・保存に関する資料を得るために複数年の計画で確認調査を実施している。

市内発掘調査 発掘調査件数は昨年度（68件）と比較すると、引き続き微増傾向にある。全般的な傾向からみると、景気の回復の兆しを受けて、中小規模の民間開発の活発化が影響してきているものと考えられる。

発掘調査面積は21,620m<sup>2</sup>（延べ28,229m<sup>2</sup>）で、このうち民間関連事業によるものが14,543m<sup>2</sup>（延べ17,752m<sup>2</sup>）と6割強を占めている。面積別でみると、300m<sup>2</sup>以下の件数が3／4を占めており、小規模の面積の調査が増加している傾向が指摘できる。

震災復興土地区画整理事業地内の区画街路に伴う調査は完結してきており、個人住宅・共同住宅等に伴う調査が引き続き実施されている。森南町遺跡（1件）、中遺跡（3件）、

日下部遺跡（1件）、御藏遺跡（2件）、水笠遺跡（1件）、戎町遺跡（4件）などがあり、さまざまな成果が上がった。なかでも、戎町遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓の周溝が確認され、供獻土器が発見された。これらの鷹取東地区土地区画整理事業の調査成果の公開として、千歳地区センターでの戎町遺跡展を8月5日～14日の10日間開催し、延べ151人の来場者があった。

また、市街地再開発事業に伴う調査は、昨年度から引き続き、二葉町遺跡の調査が実施され、奈良時代後半～平安時代の水溜遺構や平安末～鎌倉時代の掘立柱建物などが確認された。

民間再開発事業としての中山手地区市街地再開発事業に伴う生田遺跡の調査では、縄文時代後期の土坑・集石遺構、弥生時代後期の土坑、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の井戸、中世の井戸・柵列など多くの遺構・遺物が発見された。特に、縄文時代後期の遺構・遺物の発見は兵庫県下最大級の集落跡を窺わせる重要な発見となった。

さらに、市内の各地では個人住宅を含む民間開発事業に伴い、さまざまな遺跡の発掘調査を実施している。

本山中野遺跡第2次調査では、明確な遺構は確認できなかったものの、奈良～平安時代の土師器・須恵器・墨書き土器・緑釉陶器・瓦などが多量に出土し、官衙的な施設が近接する可能性が指摘できる。

御影山手遺跡第2次調査では、古墳時代後期の方墳3基と、奈良～平安時代以前の掘立柱建物6棟、溝4条などの遺構が確認され、豊富な遺跡内容が明らかとなった。

共同住宅建設に先立つ花隈城向城跡第1次調査では、飛鳥～奈良時代の流路が確認され、木製品とともに多量の土師器・須恵器が発見された。当該期の一括資料として興味深いものである。

調査面積は小規模であったが、花隈城跡第2次調査では、自然地形を利用した平安時代～近世初めの落ち込みが確認された。この落ち込みは絵図との対比から花隈城跡の外堀と推定できるもので、実態が明確でない花隈城跡の一部が解明された。

墓地造成に伴う調査で発見された塩田北山東古墳は全長35mの小型の前方後円墳である。4基の埋葬施設が確認され、後円部の第1主体の粘土槨からは三角縁三神一仏四獸鏡・ガラス玉・管玉等などが発見され、旧有馬郡域の古墳時代前期を再検討すべき資料となつた。あわせて調査を実施した八幡神社古墳群8号墳は古墳時代後期の直径12mの円墳で、無袖の横穴式石室を埋葬施設とし、墳丘には外護列石が巡っている。

下山手北遺跡第2次調査では、第1次調査地の南側に隣接する箇所で、飛鳥時代の掘立柱建物6棟、平安時代初期の掘立柱建物1基が確認され、当地域の有力者の居宅の存在が窺われる。

旧長楽小学校の校舎改築に伴う長田野田遺跡の調査では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物をはじめ、溝・土坑などの集落遺構が濃密に発見された。

平成16年度から継続して重要遺跡の範囲確認調査を実施した端谷城跡第5次調査では、本丸の瓦葺土蔵状の埠列建物内から13領の甲（胴丸）が発見され、戦国時代の破城の実態が解明された。

**芦屋市への支援** 平成12年度より実施している芦屋市山手幹線街路事業に伴う発掘調査では、月若遺跡第83地点遺跡の調査を実施し、弥生時代後期後半の竪穴住居や溝、古墳～鎌倉時代の掘立柱建物などの遺構を確認した。遺物では柱穴から法隆寺式軒瓦が出土したことが特筆でき、芦屋廃寺遺跡との関連を窺わせる資料となった。

**公開事業** また、例年北区道場町で開催される文化祭（11月2日～3日）では、「日下部の遺跡」と題して日下部遺跡の資料を中心に展示を実施し、約1,000名の見学者があった。

表4 現場公開一覧

	内 容	開 催 日	現地公開等
1	西区 端谷城跡 多量の甲冑・戦国期の破城	平成17年6月23日 <記者発表>	平成17年6月26日現地公開 見学者 約350名
2	東灘区 御影山手遺跡 第2次調査 古墳時代後期の古墳3基 奈良～平安時代の掘立柱建物	平成17年9月3日	現地見学会 見学者 約150名
3	西区 端谷城跡 甲冑の実態判明	平成18年2月10日 <記者資料提供>	
4	中央区 生田遺跡 縄文後期の県下最大級の集落 土偶の発見	平成18年2月23日 <記者発表>	現地見学会 平成18年2月26日(日) 見学者 180名



fig.7 端谷城跡 現地説明会風景



fig.8 端谷城跡 現地説明会風景



fig.9 御影山手遺跡 現地説明会風景



fig.10 生田遺跡 現地説明会風景

その他

芦屋市域で話題となった徳川大阪城東六甲採石場に関連して、兵庫県教育委員会文化財室が主となり、徳川大阪城採石場調査研究検討会が立ち上げられ、埋蔵文化財の保護行政に資する検討を行うこととなった。現地分布調査を中心に精力的な活動が行われ、将来的には神戸市域での分布状況調査を含め、今後の取り扱いの指針が示されるものと考えられる。

#### 4. 近代遺跡・近代化遺産の調査

平成15年度から兵庫県内に所在する、近代的手法で造られた建造物で、概ね江戸時代末期から昭和20年までに竣工した、産業・交通・土木等に関わる物件について、文化財としての保護施策・保存措置を検討するために近代化遺産の総合調査が実施してきた。今年度は「近代化遺産（建造物等）総合調査事業 実施要綱（兵庫県）」に基づき、神戸市内でも鉄道・道路・港湾施設に関する近代遺跡・近代化遺産の悉皆調査を実施し、成果をまとめた。この結果、保護すべき対象として、市内には668件の物件の存在が明らかとなっている。

近代遺跡の取り扱いでは、神戸臨港鉄道関連の煉瓦造架道橋台と煉瓦造下水道跡について、平成16年度に発掘調査を実施し、継続的な保存協議を行ってきた。協議の結果、建設局が施工する「HATゆめ公園」に、煉瓦下水道跡の切り取り移設保存が図られ、煉瓦造架道橋台の一部についてはモニュメントとして活用されることになった。



fig.11 煉瓦下水道移設工事



fig.12 移設の完了した煉瓦下水道モニュメント

また、六甲山系グリーンベルト整備事業に先立って、住吉川上流域水車群の五輪場の水車確認調査も実施した。滝壺・暗渠などの施設が確認できたが、保存目的の調査であったため、遺物の出土はなかった。石積みなどの特徴は少なくとも近代までは遡るものと考えられ、今後の調査によって水車群による生産構造が明らかにできるものと考えられる。

#### 5. 史跡名勝天然記念物

##### 国史跡の追加指定申請

国史跡五色塚（千壺）古墳 小壺古墳の周濠の外側に周溝が巡ることは、これまでの範囲確認調査で明らかとなっていた。発掘調査報告書の刊行を期に、この外側の周溝部分に

ついても国史跡への追加指定申請を行うべく、関係機関とも調整を行い、現地測量等も実施した。1月25日には神戸市長名で文化庁長官あて申請の手続きを実施した。国史跡の追加申請面積は8,884.71m<sup>2</sup>である。

#### 国重要文化財の指定

平成17年3月18日付け文化審議会から答申を受けた西求女塚古墳の出土資料は、平成17年6月9日付け官報号外第126号 文部科学省告示第87号で重要文化財の指定を受けた（総点数492点）。

#### 兵庫県西求女塚古墳出土品

一、銅鏡	十二面
一、鉄製品	二百三十点
一、碧玉紡錘車形石製品	一点
一、土師器	十四点
附 織物残欠	二点
土師器残欠	百七十九点
堅穴式石室石材	五十四点

また、11月2日付け文化庁美術学芸課長より重要文化財指定書の交付も受けた。

一方で、灘区との区局連携事業として、10月30日には灘区民ホールで国史跡指定・国重要文化財指定記念として西求女塚古墳講演会を開催した。『古代瀬戸内海航路の華・灘の西求女塚古墳』と題して水野正好先生に記念講演いただき、約200名の参加があった。

#### 国名勝登録

平成17年4月1日の文化財保護法の一部改正により、記念物についても所有者の自主的な保護に期待する登録制度の導入を受け、国登録名勝として相楽園（中央区）、再度公園及び再度山永久植生保存地（北区）について7月29日付け文部科学大臣あて意見を進達していたが、11月18日に文化審議会から登録名勝としての答申を受けた。また、1月26日付け官報号外第16号 文部科学省告示第16号により、文化財登録原簿に登録された旨文化庁次長通知を受けた。北海道函館市の函館公園とともに、国内で最初に登録記念物（名勝地）となった都市公園となった。

#### 県指定天然記念物

兵庫県指定文化財の灘区の神前の大クスについては、兵庫県の補助事業で、3年次計画のうち初年度の保存修理事業として枝の折損防止ブランコ支柱の構築と剪定作業を行った。

また、区局連携事業として、7月30日・親子で学ぼう 天然記念物「神前の大クス」・と題して、六甲小学校多目的ホールでシンポジウムとコンサートを共催し、「大クスとむかしの灘」と題した講演会を実施し、天然記念物の地元住民への周知・普及啓発を行った。さらに、都文化会館では11月11日～13日に「神前の大クス展」も実施した。

#### 市指定天然記念物

市指定文化財の鷺の森のケヤキについても、神戸市文化財保護条例に基づく補助事業として、3年次計画の初年度の保存修理事業として剪定作業と腐朽部の治療を実施した。

## 6. 地域連携事業

淡河町自治協議会・神戸大学文学部地域連携センターとの地域連携の取り組みの中から、平成16年度に淡河歳田神社で発見され、神戸市指定有形文化財の指定を受けた羽柴秀吉制札及び関連文書に関連して事業が推進された。共催した淡河町歴史セミナーでは、8月6日仁木宏先生「淡河市場・城下町と秀吉の楽市制札」、3月11日 永田實「農村歌舞伎舞台」の講演があり、各30名の参加があった。

また、有馬ひょうたんまつり（7月7日～9月21日）において制札の展示と講演会（9月10日）を開催し、約120名の見学者があった。

## 7. 普及啓発

市内遺跡の発掘調査によって出土した遺物や各種記録は、すべて埋蔵文化財センターに於いて保管されており、それらを活かした普及・啓発活動の拠点となっている。今年度実施したこれらの活動は、企画展示の開催、講演会の開催、考古学講座の開催、学校を中心とした出張講座・展示等である。平成17年度の入館者は32,150名で前年比3.5%の増加であった。

### 企画展示

今年度は以下の5回の企画展示を開催した。昭和50年代から不定期に実施してきた「地下に眠る神戸の歴史展 XⅡ」（4月9日～6月5日）を、春季企画展として開催した。今回は、出土品の材質にテーマを絞り、土・木・石・金属等の材質と遺物の関連について、小学生にも理解しやすい展示を目指した。会期中の入館者数は15,355名であった。

夏季企画展は、近年注目されている福原京（祇園遺跡、楠・荒田町遺跡）をテーマに、「平家一門の都・福原京」を開催した（7月23日～9月4日）。福原京跡と推定されている両遺跡出土品を中心に展示したが、掘立柱建物の調査風景と建物を復元し、夏休みの自由学習に役立つよう配慮した。期間中には「鎧・十二单を着てみよう」と題し、小野市立好古館・明石市立文化博物館の協力を得て、復元鎧と十二单を着用し、記念写真を撮影する催しを実施した。4日間の開催で185名の参加者があった。また、講談師旭堂南半球氏による「源平合戦を聞く」会を催し、講演会とはまた異なった市民の参加（88名）を得ることができた。会期中の総入館者数は3,358名であった。

秋季企画展は、西求女塚古墳の国史跡指定および出土品の国重要文化財指定を記念して、「西求女塚と青銅鏡」を開催した。この企画展は、西求女塚古墳出土の青銅鏡と神戸市内出土の弥生時代から古墳時代の青銅鏡を一堂に展示するものであった。古くに出土し東京国立博物館に収蔵されている東求女塚古墳・ヘボソ塚古墳・得能山古墳・十善寺古墳出土鏡も里帰りし、市民のみならず青銅鏡研究者にも好評を得た。会期中には、大手前大学の樋本誠一教授に「六甲山南麓の前期古墳」をご講演していただき、会場満席の152名の参加を得た。また、西求女塚古墳の地元である灘区の灘文化センターで、大阪府文化財センター長の水野正好氏に「古代瀬戸内海航路の華－灘の西求女塚古墳」をご講演いただいた。会期中の総入館者数は3,499名であった。

埋蔵文化財センターの効率化－費用対効果が求められており、それに応ずるべく臨時企画展を二回開催した。

その一つは、阪神・淡路大震災発生十年を迎えたことから「遺跡に見る神戸の自然災害」を開催した（1月11日～2月5日）。発掘調査によって、過去に発生した洪水・地震・火山灰の降下などが確認されているが、それらを主として土層転写や写真パネルの展示によって、理解し易い展示をした。なお、大阪において開催中の世界考古学会議一行の見学もあった。会期中の総入館者数は1,356名であった。

臨時企画展示の二つめは、埋蔵文化財センターが位置する西神ニュータウン内の遺跡にスポットをあてたもので、「西神ニュータウン内の遺跡」展である（2月15日～3月21日）。ニュータウン建設に伴い、およそ25年間にわたって発掘調査を実施してきたが、それらを紹介する展示はこれまでなく、今回は31遺跡の出土品を紹介するとともに、ニュータウン建設の変遷を航空写真パネルで展示した。会期中の総入館者数は2,089名であった。

#### 講 座

学校週休2日制に伴い、平成6年度から開催している「親子で体験考古学講座」は、テーマを変えながらも人気講座の一つである。特に夏休み期間中に開催する土器や勾玉を作る講座は、毎回150名前後の参加者がある。今年度から「古代編みで携帯ストラップをつくろう」を加えた。計14回実施し、619名の参加者があった。

#### 出張講座

小学校を対象に実施したものは、授業の進捗に合わせた5月に集中する。各学校に出かけ、土器・勾玉・貫頭衣などの歴史を学び、またそれを作成するものである。25小学校で開催し、2,022名が受講した。

公民館や展示施設などと共に開催する出張講座も開催した。これは土器・勾玉・石庖丁を作成するもので、7か所8回開催し、275名の参加者があった。

#### 出張展示

小学校を対象に、学校が所在する地域の考古遺物を展示するもので、6小学校で開催した。展示に際しては、6年生を中心に展示解説を行い計691名の聴講があった。

なお、さんちか花時計ギャラリーおよび西神中央駅のプレンティー広場において、埋蔵文化財センターの周知を図るための展示を実施した。

#### 作品展

昨年度から神戸市小学校教育研究会社会科部との連携事業として、夏季休暇中の自由課題の作品から埋蔵文化財センター賞を選定し、埋蔵文化財センターにおいて展示する「埋蔵文化財センター賞受賞作品展」を開催した（9月21日～10月2日）。遺跡・考古学等に関連する作品から計40作品を選定し、展示了。会期中は、作品作成者の小学生とその家族でぎわった。

#### 大歳山

11月の文化財保護強調月間に、昭和49年度から実施している大歳山遺跡の復元堅穴住居公開の発展した催しで、現在は「おおとし山まつり」として定着している。大歳山遺跡公園において、周辺住民を対象に土器・勾玉・土器製塩などを行うもので、385名の参加があった。この事業の開催にあたっては、垂水区まちづくり推進課と舞子ふれあいの町作り協議会の協力を得ている。



fig13 親子で体験考古学講座  
「赤米づくりに挑戦しよう」の草取り



fig14 親子で体験考古学講座  
「古代編みで携帯ストラップをつくろう」



fig15 文化体験プログラム支援事業  
「みんなで竪穴住居を復元」



fig16 文化体験プログラム支援事業  
「一泊二日で古代人の生活体験」



fig17 企画展示  
「平家一門の都・福原京」



fig18 企画展示  
「遺跡に見る神戸の自然災害」

表5 平成17年度 埋蔵文化財発掘調査一覧 1

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延擇削面積	調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	森北町遺跡 第23次調査	東灘区森北町3丁目 21番	神戸市教育委員会	中居さやか	610m <sup>2</sup>	17.09.06～ 17.09.29	弥生時代中期の土坑・流路、中世の井戸・溝・ピットなどの遺構を確認。中世の井戸からは呪符木簡出土。	共同住宅
2	森北町遺跡 第24次調査	東灘区森北町4丁目 12番2			610m <sup>2</sup>			
3	森北町遺跡 第25次調査	東灘区森北町1丁目	神戸市教育委員会	山口英正	30m <sup>2</sup>	17.09.20～ 17.09.26	建物基礎部分について調査。古墳時代前期の溝・柱穴を確認。	個人住宅 〔国庫補助事業〕
4	森北町遺跡 第26次調査	東灘区森北町4-13の 一部(A棟)			105m <sup>2</sup>	17.09.20～ 17.10.04		
5	森南町遺跡 第4次調査	東灘区森南町2丁目	神戸市教育委員会	須藤宏	20m <sup>2</sup>	17.11.07～ 17.11.17	中世の柱穴・土坑・溝・ピット・石列を確認。遺構密度は低い。	道路
6	110m <sup>2</sup>	17.11.07～ 17.11.17			20m <sup>2</sup>	17.11.17～ 17.11.17		
7	扁保曾塚古墳 第2-b次調査	東灘区岡本1丁目 111-14	神戸市教育委員会	中谷正	40m <sup>2</sup>	17.06.14～ 17.06.21	(4-1) 平安時代末の土坑 (4-2) 弥生時代の流路	区画整理
8	岡本北遺跡 第6次調査	東灘区西岡本4丁目 6番3・6番4			110m <sup>2</sup>	17.06.17～ 17.06.28		
9	本山中野遺跡 第2次調査	東灘区本山南町7丁目 13番1、13-2、17-1、 17-2、17-3	神戸市教育委員会	須藤宏	42m <sup>2</sup>	18.02.23～ 18.03.06	建物基礎工事部分の影響範囲について調査。 扁保曾塚古墳の周濠の可能性の高い溝状の落ち込みを確認。大 量の土師器出土。	個人住宅 〔国庫補助事業〕
10	住吉宮町遺跡 第40次調査	東灘区住吉宮町6丁目 13番1、13番3			42m <sup>2</sup>	17.11.18～ 17.12.01		
11	住吉宮町遺跡 第41次調査	東灘区住吉宮町7丁目 23番	神戸市教育委員会	中居さやか	200m <sup>2</sup>	17.10.05～ 17.11.21	古墳時代後期の豊穴住居、掘立柱建物、落ち込み、ピットを確 認。また、近世の花崗岩探掘址も確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
12	郡家遺跡 第78次調査	東灘区御影中町2丁目 1258-1、1259番地			400m <sup>2</sup>	18.01.10～ 18.01.13		
13	御影山手遺跡 第2次調査	東灘区御影山手2丁目 89-1 他3筆 (89-4, 89-5, 91-2)	神戸市教育委員会	閑野豊	15m <sup>2</sup>	17.05.10～ 17.09.28	古墳時代後期の豊穴住居、掘立柱建物、落ち込みなどを確認。	共同住宅
14	瀧ノ奥遺跡 第3次調査	灘区高羽字瀧ノ奥 5-3			1200m <sup>2</sup>	1200m <sup>2</sup>		
15	日暮遺跡 第3次調査	灘区篠原南町6丁目 59番3、60番2	神戸市教育委員会	閑野豊	15m <sup>2</sup>	18.02.08～ 18.02.15	平安時代以降のピットを確認。遺物包含層から奈良～平安の遺 物出土。	個人住宅 〔国庫補助事業〕
16	日暮遺跡 第24次調査	中央区八雲通1-321、 322			50m <sup>2</sup>	18.05.09～ 17.05.13		
17	日暮遺跡 第25次調査	中央区日暮通1丁目 367-2	神戸市教育委員会	中谷正	13m <sup>2</sup>	17.06.02～ 17.06.06	平安時代の溝・ピットを確認。	店舗・工場付住 宅〔国庫補助事業〕
18	日暮遺跡 第26次調査	中央区日暮通1丁目 401番1、2			13m <sup>2</sup>	17.06.23～ 17.06.30		
19	日暮遺跡 第27次調査	中央区八雲通2丁目 319番地	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	30m <sup>2</sup>	17.12.14～ 17.12.26	平安後期～庄内期の不整形な落ち込み、ピットを確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
20	日暮遺跡 第28次調査	中央区筒井町3丁目 582番1			30m <sup>2</sup>	18.01.18～ 18.02.06		
21	日暮遺跡 第29次調査	中央区筒井町3丁目 381-2	神戸市教育委員会	山口英正	220m <sup>2</sup>	室町・近世の柱穴・溝・土坑・落ち込み等を確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕	
22	二宮東遺跡 第2次調査	中央区琴ノ緒町3丁目 311番			220m <sup>2</sup>	18.02.06		
23	雲井遺跡 第20次調査	中央区琴ノ緒町3丁目 451番地	神戸市教育委員会	山口英正	103m <sup>2</sup>	17.06.02～ 17.06.24	古墳時代後期の南北方向の流路とピットを確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
24	雲井遺跡 第21次調査	中央区琴ノ緒町3丁目 345番			115m <sup>2</sup>	17.06.22～ 17.07.06		
25	雲井遺跡 第22次調査	中央区琴ノ緒町5丁目 347番、348番	神戸市教育委員会	阿部功・ 浅谷誠吾	249m <sup>2</sup>	17.10.03～ 17.10.26	調査区南側に弥生前期の溝・土坑・ピットを集中してして確認。 下層では縄文中期末～後期にかけての流路を確認。	店舗
26	雲井遺跡 第23次調査	中央区琴ノ緒町1丁目 347番、348番			500m <sup>2</sup>	17.12.06～ 17.12.16		
27	生田遺跡 第4次調査	中央区中山手通3丁 目、下山手通3丁目	神戸市教育委員会	丹治康明・ 中谷正・ 中居さやか	160m <sup>2</sup>	17.12.26～ 18.03.31	縄文後期の土坑・ピット・土器溜り、弥生中期の方形周溝墓・ 豊穴住居・集石遺構、弥生後期の土坑・古墳後期の掘立柱建物・ 豊穴住居・溝・土坑、平安の井戸、中世の欄列・井戸・土坑 2/26現地説明会開催	民間市街地再開 発
28	花隈城向城跡 第1次調査	中央区中山手通2丁目 24番1			160m <sup>2</sup>	18.03.17～ 18.04.17		
29	花隈城跡 第2次調査	中央区花隈町21-14、 21-15	神戸市教育委員会	中谷正	10m <sup>2</sup>	17.07.06～ 17.07.15	飛鳥～奈良の木製品を含む多量の遺物を含む流路ほかピット・ 落ち込みを確認。(平成18年度へ継続事業)	共同住宅
30	花隈城跡 第2次調査	中央区花隈町21-14、 21-15			10m <sup>2</sup>	17.07.06～ 17.07.15		

表6 平成17年度 埋蔵文化財発掘調査一覧 2

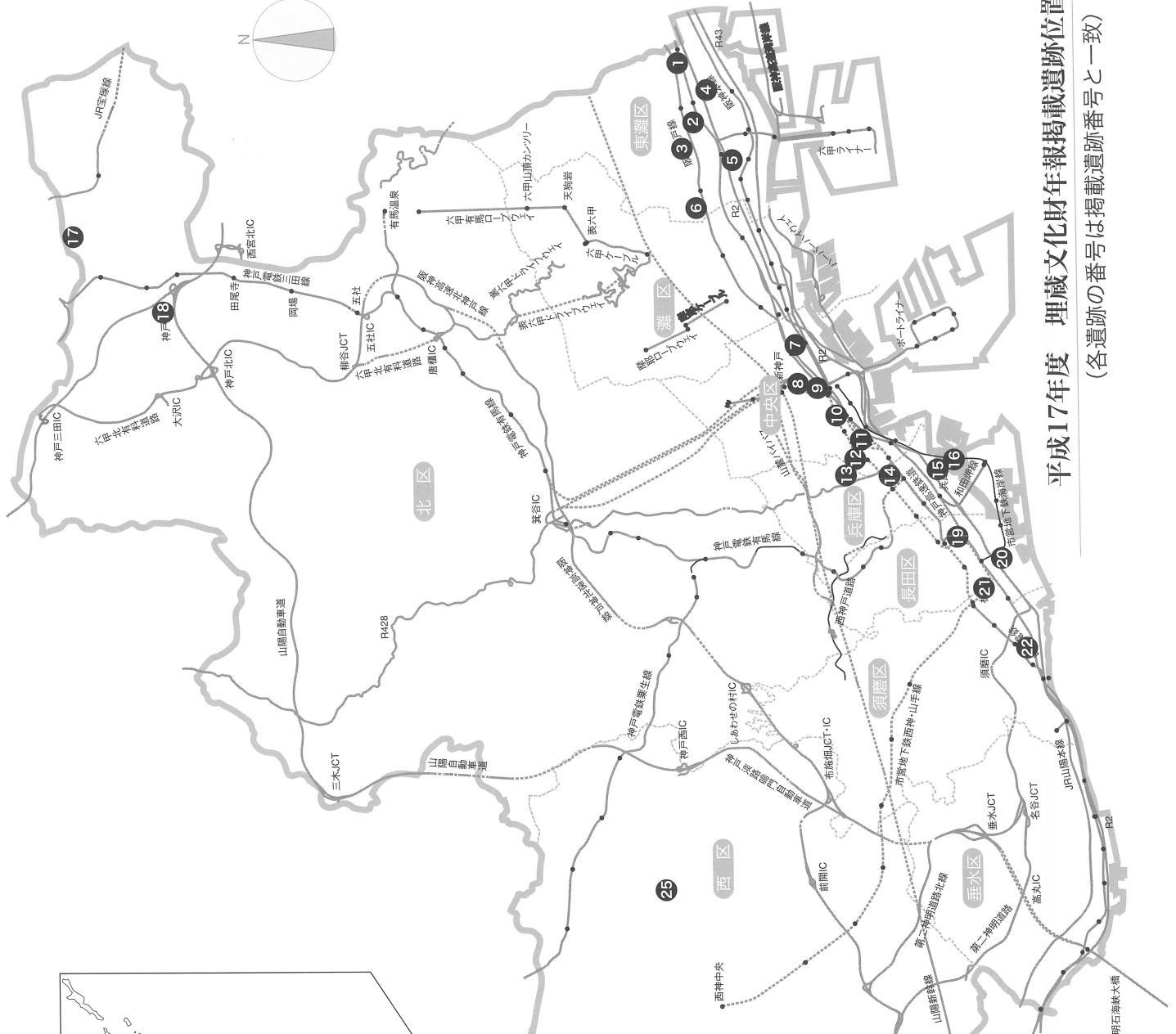
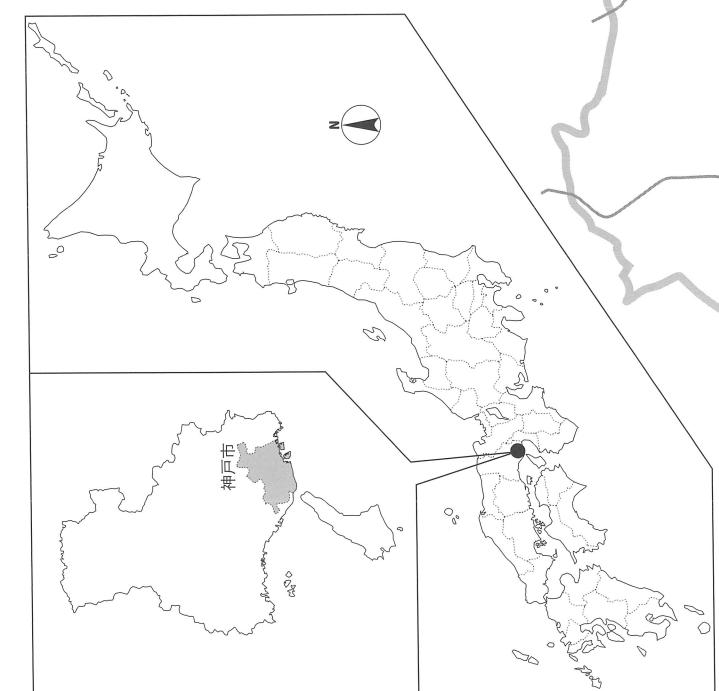
No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延掘削面積	調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
28	花隈城跡 第3次調査	中央区花隈町3番2	神戸市教育委員会	山口英正	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	18,03,16～ 18,03,31	16世紀後半の瓦と土器がまとめて出土した流路は柱穴・溝等を確認。(平成18年度へ継続事業)	共同住宅
29	下山手北遺跡 第2次調査	中央区下山手通7丁目 17番1号	神戸市教育委員会	須藤宏	1200m <sup>2</sup> 1200m <sup>2</sup>	17,09,15～ 17,11,11	飛鳥時代前に及ぶる2時期の掘立柱建物群を確認。	介護老人保健施設
30	元町遺跡 第4次調査	中央区元町通6丁目 1番14	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	12m <sup>2</sup> 12m <sup>2</sup>	17,10,12～ 17,10,14	中世と近世の遺物包含層を確認。遺物量は少なく、遺構は確認できていない。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
31	祇園遺跡 第13次調査	兵庫区上祇園町29、51	神戸市教育委員会	須藤宏	23m <sup>2</sup> 38m <sup>2</sup>	17,05,23～ 17,06,09	調査区東端で平安末の池状遺構を確認。	重要遺跡範囲確認 〔国庫補助事業〕
32	楠・荒田町遺跡 第34次調査	中央区楠町5丁目 3-11	神戸市教育委員会	中居さやか	60m <sup>2</sup> 60m <sup>2</sup>	17,07,28～ 17,08,04	弥生時代後期の溝・柱穴・中世の溝・落ち込み・柱穴を同一面で確認。	個人住宅 〔国庫補助事業〕
33	楠・荒田町遺跡 第35次調査	兵庫区西多聞通1丁目 3-18	神戸市教育委員会	山口英正	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	17,08,18～ 17,08,29	平安後期～鎌倉の柱穴・土坑等を確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
34	楠・荒田町遺跡 第36次調査	兵庫区福原町21-1	神戸市教育委員会	阿部功	140m <sup>2</sup> 280m <sup>2</sup>	17,08,25～ 17,09,16	平安時代の溝・鎌倉～室町の掘立柱建物・土坑・井戸・ピット等を確認。さらに下層では縄文晩期～弥生時代の遺物を含む流路の堆積土を確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
35	楠・荒田町遺跡 第37次調査	兵庫区西橘通2丁目 4番24	神戸市教育委員会	山口英正・ 阿部功	230m <sup>2</sup> 380m <sup>2</sup>	17,11,21～ 17,12,19	14世紀後半の土坑・ピット、14世紀末～15世紀前半の掘立柱建物・井戸・土坑・15世紀前半の溝・土坑・ピット・落ち込み等を確認。	共同住宅
36	兵庫津遺跡 第36次調査	兵庫区北逆瀬川町 4-10	神戸市教育委員会	藤井太郎	800m <sup>2</sup> 800m <sup>2</sup>	17,04,01～ 17,04,03	昨年度からの継続事業。第4造構面で中世末の柱穴と溝を確認。遺物整理と報告書作成	共同住宅
37	兵庫津遺跡 第37次調査	兵庫区松原通1丁目 1-26、1-27	神戸市教育委員会	阿部功	69m <sup>2</sup> 69m <sup>2</sup>	17,05,16～ 17,05,26	近代以後の整地層内までの調査に留まる。真光寺旧境内を巡る堀の肩の一部?	店舗付倉庫 〔国庫補助事業〕
38	兵庫津遺跡 第39次調査	兵庫区切戸町6-4、 6-5、6-6	神戸市教育委員会	阿部功	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	17,11,04～ 17,11,22	室町時代の集石遺構と多量の遺物を含む包含層、近世の井戸を確認。	社員寮
39	兵庫津遺跡 (兵庫城跡)	兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	黒田恭正	59m <sup>2</sup> 59m <sup>2</sup>	18,03,02～ 18,03,28	兵庫城跡南辺の堀と推定できる東西方向の落ち込み、堀の南側に拡がる町屋を確認。また、城跡の中心部では近世の遺構と下層に中世の遺構の存在が判明。	重要遺跡範囲確認 〔国庫補助事業〕
40	八幡神社古墳群 第1次調査	北区道場町塩田字北山上3418、3419、3150、 3152、3153-1、3159-1	神戸市教育委員会	翁正俊・安 田滋・中村 大介・山口 英正・阿部 功	1000m <sup>2</sup> 1000m <sup>2</sup>	18,01,10～ 18,04,18	塩田北東山古墳は古墳時代後期の全長36mの前方後円墳、4基の割竹形木棺のうち後円部の第1主体部では三角縁神獸鏡・鉄器・ガラス玉・青玉等が出土。八幡神社古墳群8号墳は直径12mの円墳で、無袖の横穴式石室、外護列石をもつ。	墓地造成
41	八多・中遺跡	北区八多町中字 カイモリ	神戸市教育委員会	谷正俊	35m <sup>2</sup> 35m <sup>2</sup>	17,08,29～ 17,09,09	建物基礎部分のみ調査実施。 平安末～鎌倉のピット・溝・土坑などを確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
42	八多・中遺跡 第30次調査	北区八多町中字堂ノ元	神戸市教育委員会	谷正俊	180m <sup>2</sup> 180m <sup>2</sup>	17,08,12～ 17,08,25	平安末～鎌倉のピット・土坑・江戸末のピット・水溜遺構を確認。	区画整理
43	八多・中遺跡 第31次調査	北区八多町中字池尻	神戸市教育委員会	須藤宏	180m <sup>2</sup> 180m <sup>2</sup>	18,03,07～ 18,03,27	奈良～平安末の掘立柱建物・井戸・溝・土坑などを確認。	区画整理
44	日下部遺跡	北区道場町日下部字島居ノ元	神戸市教育委員会	関野豊	17m <sup>2</sup> 17m <sup>2</sup>	18,01,20～ 18,01,20	後世の削平によるものか、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。	区画整理
45	淡河城跡 第4次調査	北区淡河町淡河字上山	神戸市教育委員会	阿部敬生	378m <sup>2</sup> 378m <sup>2</sup>	18,03,17～ 18,03,29	本丸中央部の調査。基盤層面で土坑・ピット・溝・落ち込みを確認。整地土上面では水溜・井戸・土坑・溝・ピット等を確認。	重要遺跡範囲確認 〔国庫補助事業〕
46	原野・沢遺跡 第2次調査	北区山田町原野字沢	神戸市教育委員会	谷正俊	80m <sup>2</sup> 80m <sup>2</sup>	17,05,23～ 17,05,27	汚水管布設に伴う調査。鎌倉のピット・溝・土坑、近世の土坑等を確認。盛土内からサヌカイト剥片出土。	汚水管敷設
47	長田南遺跡 第4次調査	長田区五番町8丁目 1-7	神戸市教育委員会	阿部功	46m <sup>2</sup> 74m <sup>2</sup>	18,02,08～ 18,02,17	遺構面は2面。弥生後期～古墳初頭のピット、平安末のピット、中世後半～近世初頭の溝等を確認。	店舗 〔国庫補助事業〕
48	御藏遺跡 第56次調査	長田区御藏通4丁目 205-2	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	93m <sup>2</sup> 93m <sup>2</sup>	17,05,16～ 17,05,26	基礎工事部分のみの調査。 弥生末の土坑、鎌倉の溝等を確認。奈良の蓮華文軒丸瓦片出土。	福祉施設
49	御藏遺跡 第57次調査	長田区御藏通5丁目 205番1	神戸市教育委員会	阿部功	245m <sup>2</sup> 245m <sup>2</sup>	18,03,06～ 18,03,29	弥生末～古墳初頭の土坑、奈良～中世の掘立柱建物群・溝・土坑・落ち込み等を確認。	共同住宅
50	二葉町遺跡 第19次調査	長田区久保町6丁目	財神戸市体育協会	阿部敬生	1330m <sup>2</sup> 1680m <sup>2</sup>	17,05,09～ 17,09,16	奈良後半～平安の水溜遺構、平安末～鎌倉の掘立柱建物・井戸・水溜遺構等を確認。	市街地再開発
51	長田野町遺跡 第2次調査	長田区久保町6丁目 6、7-1	神戸市教育委員会	関野豊	280m <sup>2</sup> 280m <sup>2</sup>	18,03,09～ 18,03,31	鎌倉～室町の掘立柱建物・溝・土坑・落ち込み・ピット等が確認された。奈良時代の遺構は確認されず。(平成18年度へ継続事業)	小学校
52	水笠遺跡 第27次調査	長田区水笠通2丁目	財神戸市体育協会	黒田恭正	355m <sup>2</sup> 355m <sup>2</sup>	17,12,14～ 18,01,16	時期不詳のピット・土坑・流路を確認。旧耕土層から6世紀後半の須恵器出土。	公園造成
53	戎町遺跡 第61/62次調査	須磨区寺田町1丁目 4番地	神戸市教育委員会	藤井太郎	35m <sup>2</sup> 35m <sup>2</sup>	17,06,21～ 17,06,28	周溝墓に伴う溝と主体部と推定できる土坑を確認。	個人住宅 〔国庫補助事業〕
54	戎町遺跡 第63次調査	須磨区寺田町1丁目 4番地	神戸市教育委員会	藤井太郎	25m <sup>2</sup> 25m <sup>2</sup>	17,06,28～ 17,07,08	弥生中期の周溝墓に伴う溝(コーナー部)とピットを確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕

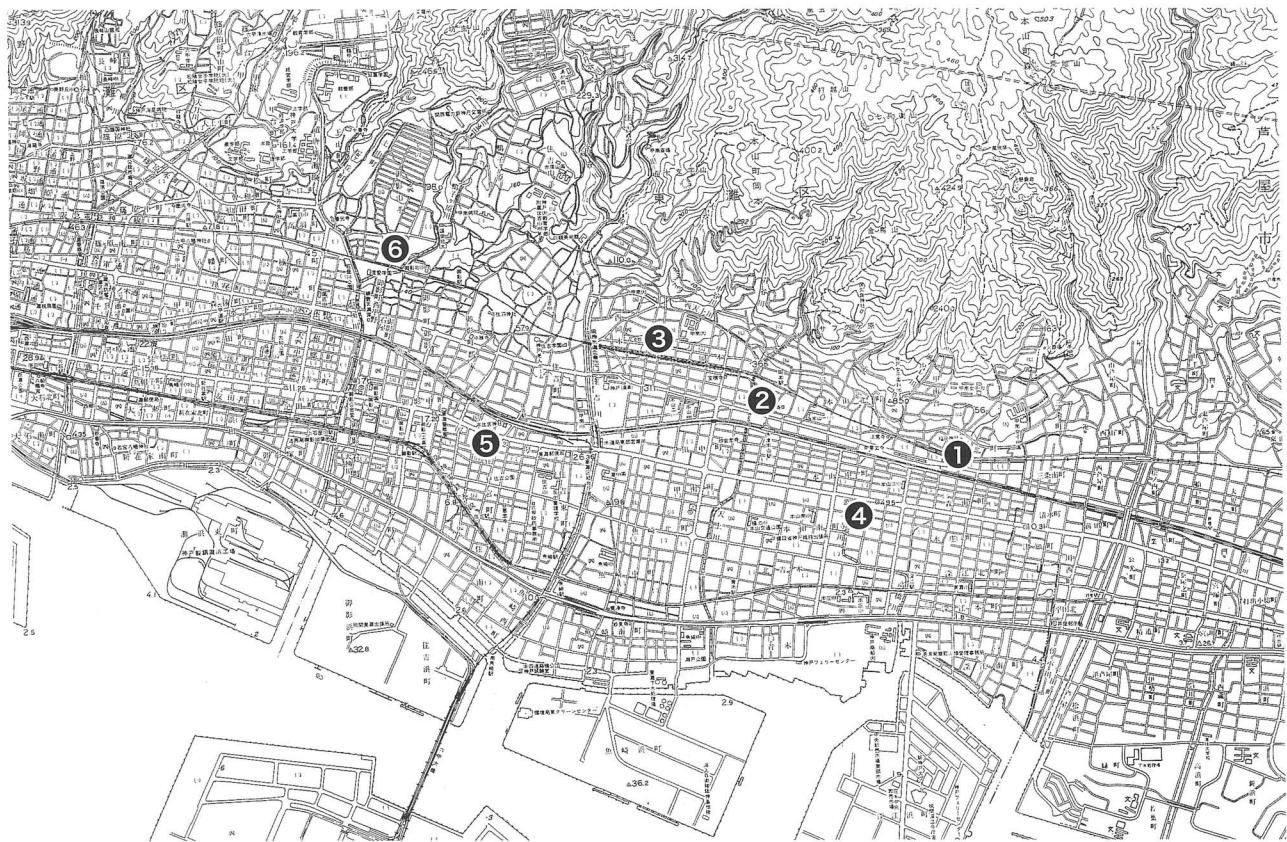
表7 平成17年度 埋蔵文化財発掘調査一覧 3

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積延 掘削面積	調査期間	調査内容	調査原因
55	戎町遺跡 第64次調査	須磨区寺田町3丁目 4番	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	90m <sup>2</sup>	17.07.13 ~	基礎部分のみ12ヶ所のグリッド調査。弥生中期の遺物包含層と古墳後期と推定できる溝・ピットを確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
					90m <sup>2</sup>	17.07.22		
56	行幸町遺跡 第6次調査	須磨区行幸町3丁目 36-5	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	40m <sup>2</sup>	17.08.08 ~	室町時代の溝・土坑・柱穴・鋤溝等を確認。	個人住宅 〔国庫補助事業〕
					40m <sup>2</sup>	17.08.19		
57	行幸町遺跡 第7次調査	須磨区行幸町3丁目	財神戸市体育協会	浅谷誠吾	120m <sup>2</sup>	18.03.13 ~	これまでの調査で確認されている奈良の大溝と落ち込み・柱穴等を確認。	都市計画道路街 路築造
					120m <sup>2</sup>	18.03.28		
58	乙木遺跡 第2次調査	垂水区乙木3丁目 589番1の一部	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	170m <sup>2</sup>	18.02.07 ~	時期不詳の土坑・溝と埋積谷等を確認。平安～中世の遺物出土。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
					170m <sup>2</sup>	18.02.21		
59	吉田南遺跡 第18次調査	西区森友3丁目6-2、 7-3、12-32、27	神戸市教育委員会	中居さやか	80m <sup>2</sup>	17.04.01 ~	16年度よりの継続事業。防火水槽設置部分が対象。弥生後期～古墳後期の造構面と中世の造構面を確認。あわせて出土遺物整理作業実施。	大型商業施設
					80m <sup>2</sup>	17.04.25		
60	吉田南遺跡 第19次調査	西区森友1丁目20番2	神戸市教育委員会	谷正俊	17m <sup>2</sup>	17.10.05 ~	変圧器の基礎部分の調査。奈良～鎌倉の遺物包含層を確認。微高地西側の低湿地に当たるものと考えられる。	変電所
					17m <sup>2</sup>	17.10.07		
61	新方遺跡 第45次調査	西区玉津町西河原字七 反田45-1	神戸市教育委員会	中谷正	15m <sup>2</sup>	17.05.17 ~	擁壁部分の調査。古墳時代後期、飛鳥～奈良時代、奈良時代、平安前期～中期の各造構面の4面の造構面を確認。ピット・落ち込み・鍛冶遺構？を検出。奈良～平安時代の遺物は多量かつ良好。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
					60m <sup>2</sup>	17.05.25		
62	ニツ屋遺跡	西区小山1丁目 4-1～7	財神戸市体育協会	藤井太郎	260m <sup>2</sup>	17.09.26 ~	校舎東半の基礎部分を対象に調査実施。古墳後期以降の柱穴・柱列・溝・土坑・落ち込みなどを確認。	小学校
					260m <sup>2</sup>	17.10.25		
63	日輪寺遺跡 第8次調査	西区玉津町二ツ屋字西 山690番1、699番、700 番	神戸市教育委員会	山本雅和	4m <sup>2</sup>	18.02.16 ~	污水管布設部分について調査を実施。中世と推定できるピットと落ち込みを確認。	共同住宅 〔国庫補助事業〕
					4m <sup>2</sup>	18.02.16		
64	出合遺跡 第34次調査	西区平野町中津	財神戸市体育協会	斎木巖・ 阿部敬生・ 藤井太郎	1518m <sup>2</sup>	17.11.24 ~	明石川に沿った微高地では弥生前期後半の遺構・遺物、丘陵部では古墳～奈良・平安～鎌倉の遺構・遺物を確認。	圃場整備
					2513m <sup>2</sup>	18.03.31		
65	出合遺跡 第34次調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会	斎木巖・ 阿部敬生	268m <sup>2</sup>	17.11.24 ~	水路部分（2トレンチ）と試掘調査を実施。古墳～奈良の溝・柱穴などを確認。	圃場整備
					268m <sup>2</sup>	17.12.28		
66	出合遺跡 第34次調査	西区平野町中津	神戸市教育委員会	斎木巖・ 藤井太郎	270m <sup>2</sup>	17.12.20 ~	（第5トレンチ1区・6区）平安末の土坑、弥生前期末の土坑などを確認（第7トレンチ）6世紀末に埋没した流路を確認。	圃場整備
					270m <sup>2</sup>	18.03.08		
67	端谷城跡 第5次調査	西区櫛谷町寺谷字北谷 992-10	神戸市教育委員会	黒田恭正	114m <sup>2</sup>	17.04.04 ~	平成16年度から継続事業 物見台の瓦葺建物、本丸の瓦葺土蔵状のせん列建物内の13箇の 甲6/26現地説明会開催	重要遺跡範囲確 認 〔国庫補助事業〕
					114m <sup>2</sup>	17.10.18		
68	太山寺遺跡	西区伊川谷町前開 252番地先	財神戸市体育協会	中谷正	400m <sup>2</sup>	17.08.01 ~	調査区の大半は伊川による削平を受けていたが、中世の溝・落ち込み、近世の土坑を確認。	河川改修
					400m <sup>2</sup>	17.09.01		

(各遺跡の番号は掲載遺跡番号と一致)

### 平成17年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図

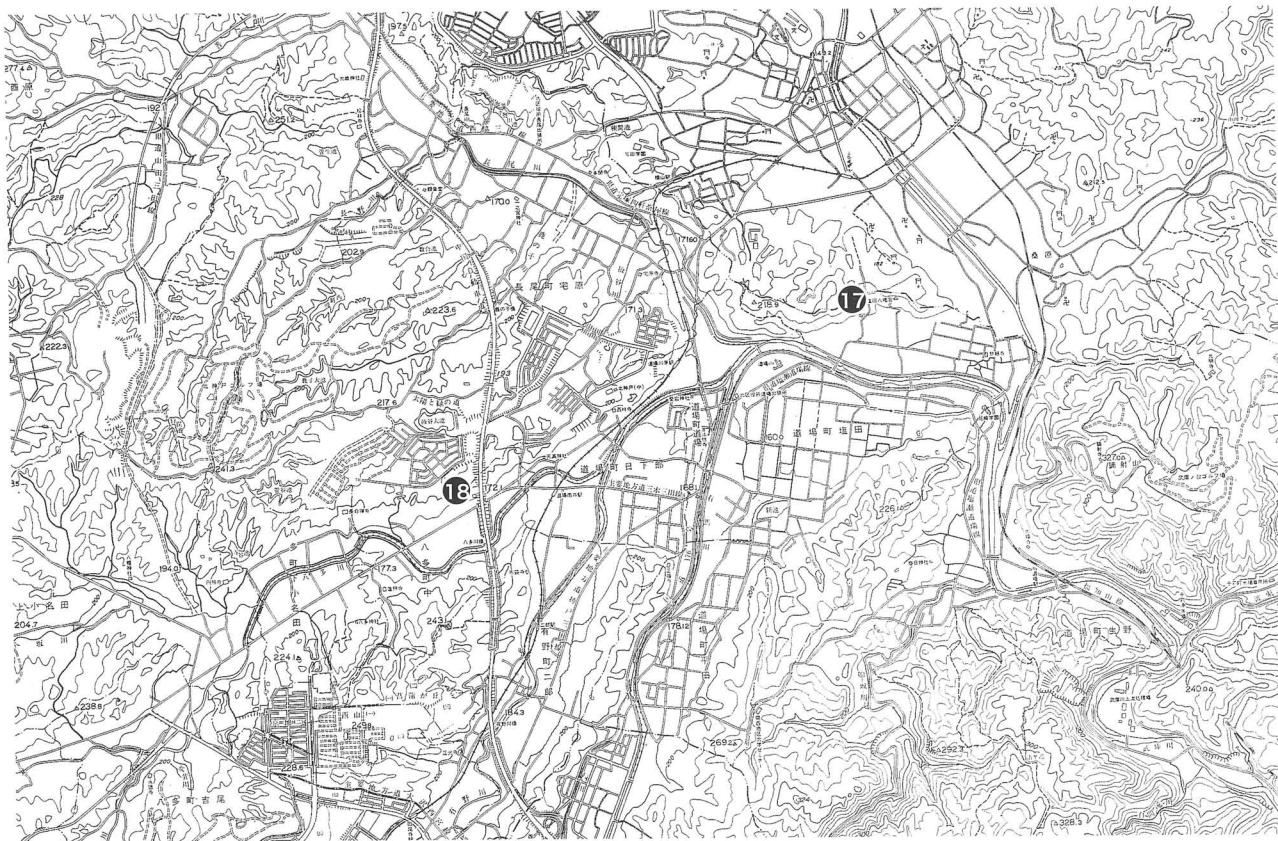




調査地点位置図 (1) 1/50,000



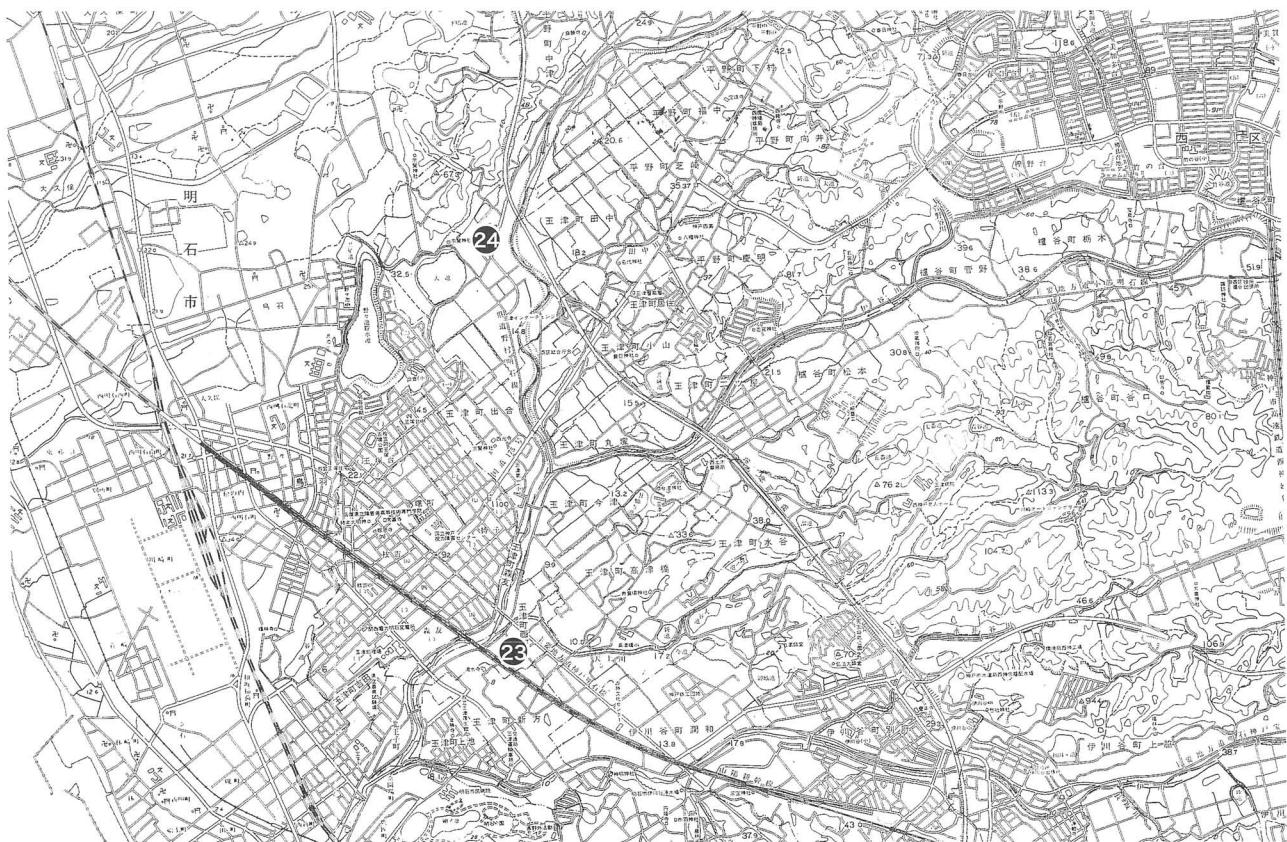
調査地点位置図 (2) 1/50,000



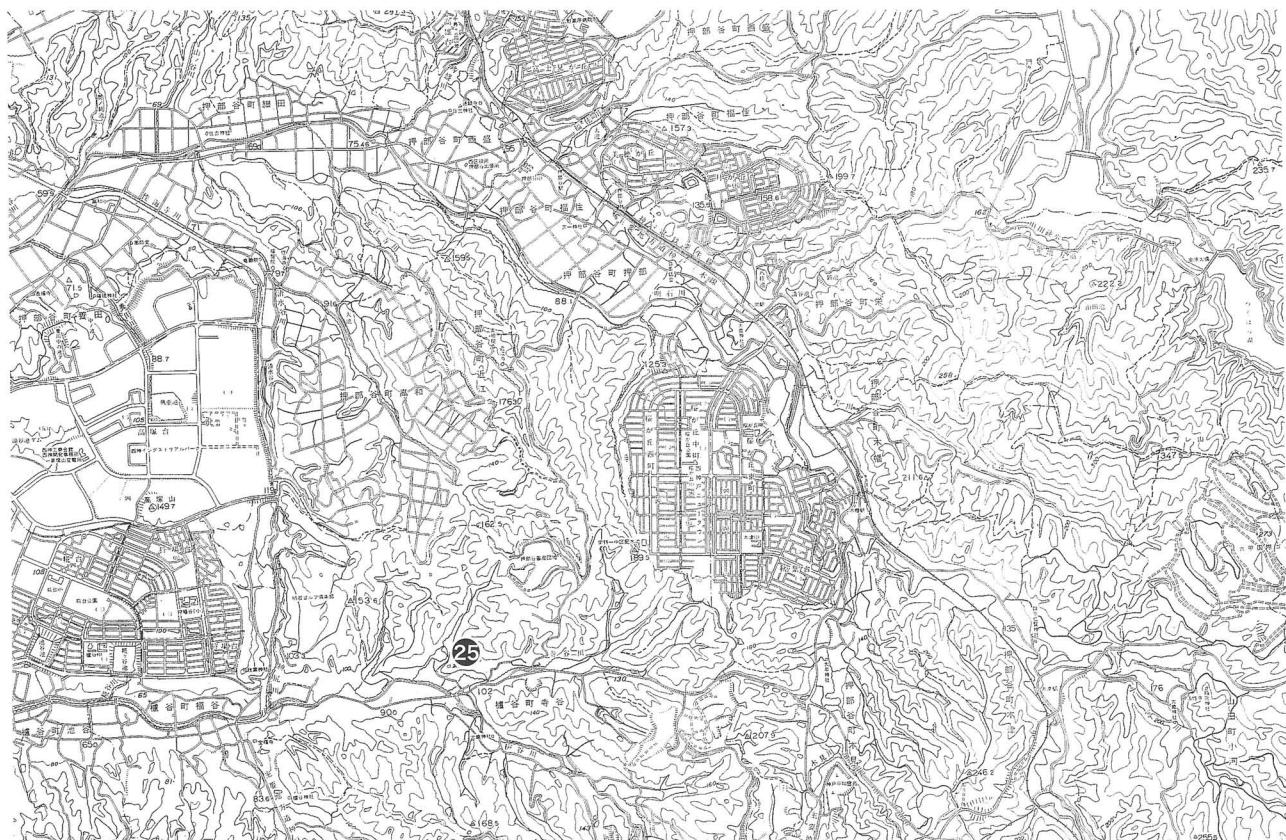
調査地点位置図（3） 1/50,000



調査地点位置図（4） 1/50,000



調査地点位置図 (5) 1/50,000



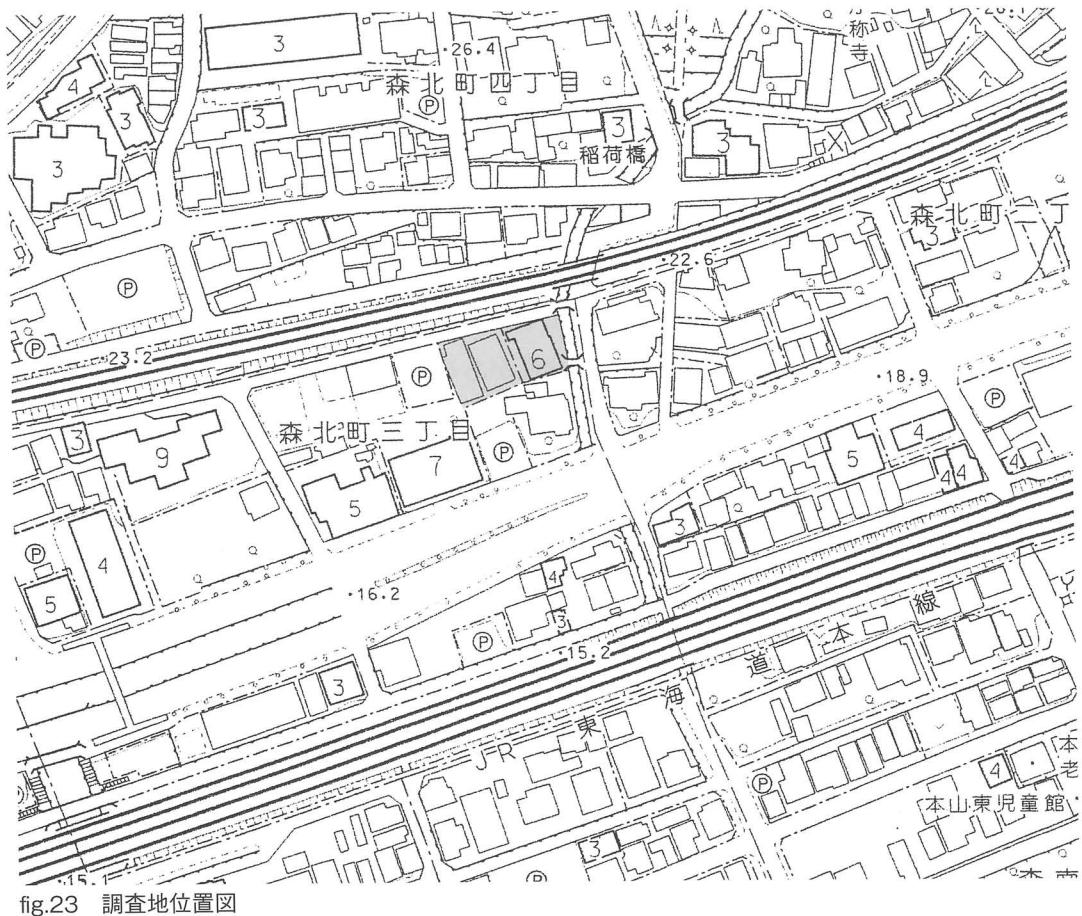
調査地点位置図 (6) 1/50,000

## II. 平成17年度の発掘調査

### 1. 森北町遺跡 第23次調査

六甲山南麓の斜面地に立地する遺跡、特に弥生時代の遺跡は東から東山・森奥・坂下山・森北町・金鳥山・保久良神社・荒神山・赤塚山と古くから数多くが知られている。一方、厚く堆積した洪水層に覆われる郡家・住吉宮町・本山など平野部の遺跡についても近年その内容がかなり明らかになってきている。森北町遺跡は六甲山南麓、東の芦屋川・西の高橋川にはさまれる傾斜地に立地し、南の平地への傾斜変換点付近には出口遺跡が隣接する。

森北町・出口の両遺跡は内容が共通していることから、同一の集落遺跡である可能性がある。森北町遺跡は、1964年にその存在が確認された遺跡で、これまでの調査により弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代などの遺構・遺物が確認されている。とりわけ、中国製鏡・国内の他地域から搬入された古式土師器・陶質土器・初期須恵器などが出土しており、このことから弥生時代から古墳時代にかけて当地は他地域との交流の拠点であったことが窺がえる。出口遺跡の第5次調査においては、古墳時代末期に仏教とともに日本に移入された銅鏡の破片が出土しており、この時期に至っても有力集団が当地に居住していた可能性を示す。



## 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴う発掘調査で、工事では南の道路面に高さを合わせて掘削するため、全面調査を実施した。

調査区は北から南に傾斜する。また、調査区の東には高橋川が流れているが、西から東への傾斜はあまりみられなかった。西壁での層位は上層より碎石・搅乱層の下、0.5～0.7mの耕土・床土層と、洪水の痕跡と考えられる砂礫層がある。遺物包含層はほとんどなく、旧耕土直下に遺構面がある。調査区の東側では遺物が少なく、遺構も希薄であった。また、調査区の南西側では遺構面である淡青灰色粗砂混じり砂質土層において湧水を確認した。

## 検出遺構

大半の遺構は、調査地中央のやや遺構面が高い部分で検出している。弥生時代の土坑7基、河道1条、中世の井戸1基、溝4条、ピット2基を検出している。土坑は、長径1.7m、短径0.8m、深さ0.1mを測り、不整形である。弥生時代中期の壺、甕が出土している。その他の土坑からも弥生土器が出土しているが、細片が多く、少量であった。

## SR02

調査区の中央を南北に縦断して検出した。幅1.0～1.5m、深さ0.7m、拳大の石とともに弥生時代中期の土器片が出土している。

## SE01

調査区の北西で検出した。直径1.5m、深さ1.4mを測る石組みの井戸である。石は直径20～40cm程度の人頭大のものを長辺が井戸の内面側になるように並べ、10cm程度の小石を間に詰めて補強している。底面は平坦で、曲物等はなかった。遺構面より深さ約1.0mの砂礫層から湧水が確認でき、その当時と同じ水脈であったかは定かでないが、井戸として機能していたことを窺うことができた。

土器は土師器・陶器が少量出土している。木簡が1点底面付近より出土している。片面に「蘇民将来之子孫也」の墨書があり、裏面に文字はない。呪符木簡と考えられる。

## まとめ

今回の調査は、高橋川に近接していることから、遺構が希薄であろうと予測された。実際に調査地の北西に位置する第20次調査地の東半分は遺構面が安定していない湿地で、遺物もあまり出土していない。しかし、今回の調査では、これまで森北町遺跡内で調査例の少ない弥生時代中期の土坑を数基検出している。

また、中世の井戸を検出したことから、第20次調査地の西半分に広がる屋敷地とは別の建物が付近に存在する可能性があると考えられる。

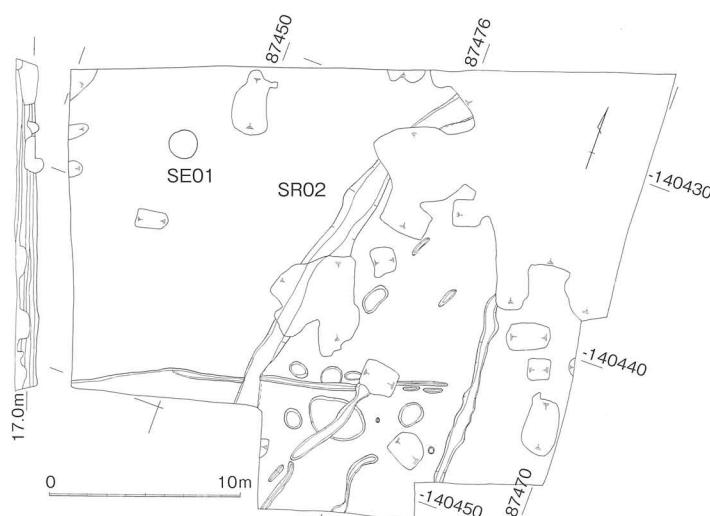


fig.24 遺構面平面図



fig.25 調査区全景

## 2. 扁保曾塚古墳 第2次調査

扁保曾塚古墳は、阪急岡本駅の南西に存在した前方後円墳である。梅原末治氏が『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯で詳細について報告している。それによると、西北西方向に前方部を向けた前方後円墳で、後円部が直径30m以上で、全長60m以上と推定されている。明治28年に後円部が乱掘され主体部から青銅鏡・勾玉・管玉・石釧・棗玉などの副葬品が出土した。また、そのころまでは墳丘も残存していたが、現在では宅地区画の形状で、その痕跡を確認できるのみである。

その後、平成6年度に民間調査団により扁保曾塚古墳の南隣接地において調査が行なわれた。その結果、弥生時代中期の土器棺、5世紀前半の掘立柱建物や土坑・ピットなどが数多く検出された。古墳に係わる遺構・遺物は確認されなかったが、古墳の周辺に古墳とは時期の違なる集落が存在することが判明した。また、平成7年度には北側括れ部と推定される場所で試掘調査が実施され、墳丘盛土・葺石が確認された。

今回の調査地は、前年度末に確認調査を実施し、古墳時代前半の土器を多量に含む溝の肩部を検出した。この成果を受け、建物の基礎工事により遺跡が破壊される部分において調査を行なった。

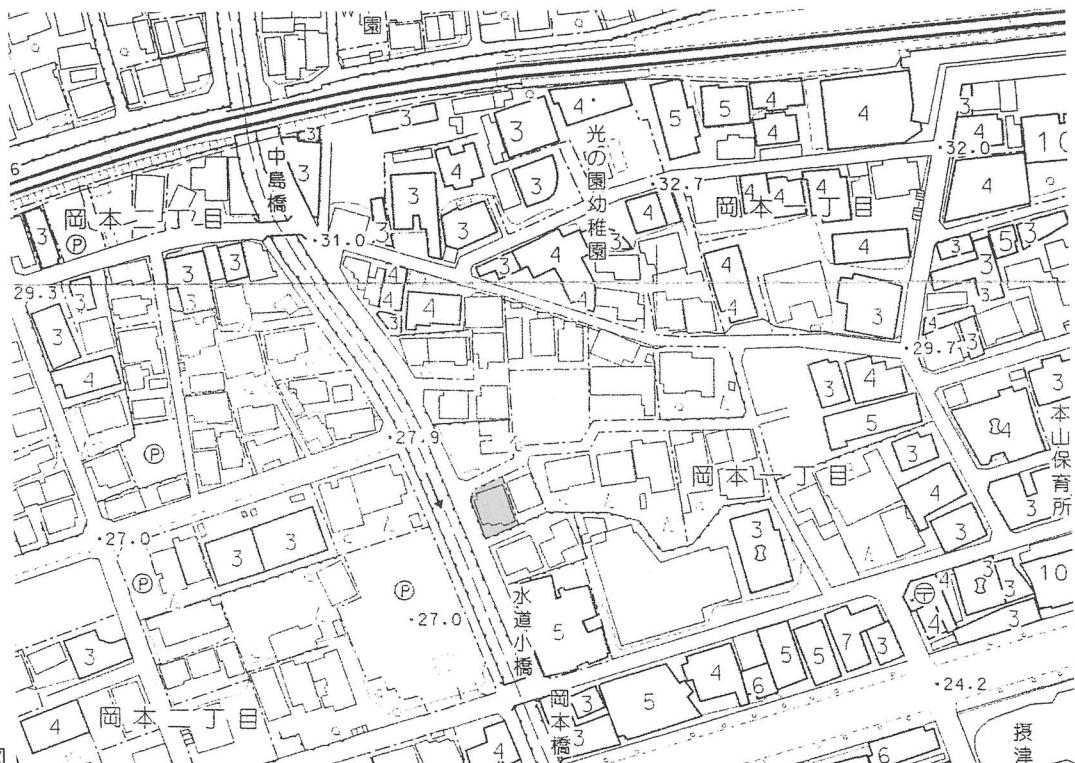


fig.26 調査地位置図

### 調査の概要

**調査概要** 建物の基礎工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす部分についてバックホーにより盛土・耕作土を除去し、人力により遺物包含層掘削・遺構検出を行った。

現地表面から盛土・宅地化以前の耕作土・洪水堆積土上に床土、洪水堆積土が2層、旧耕作土、旧床土、遺構基盤層が堆積する。遺構面は、北では褐灰色砂礫、南では暗茶灰色礫混じり砂質土である。遺構は、溝状落ち込み1条・ピット21基を検出した。

SD01

東端の溝状落ち込みは、北北東～南南西方向で西肩部のみを検出した。検出長7.3m、最大幅2.5m、深さ37cmを測る。掘形は現状で2段落ちを形成しており、上段は鋭角に落ち込むが、下段は比較的緩やかに落ち込む。調査区外の東側に続いているため、溝の幅は不明である。埋土は4層に分かれしており、上層から褐灰色粗砂質土・暗茶褐色粘質土・暗灰褐色砂質土・暗灰褐色粘質土の順で堆積する。上層の褐灰色粗砂質土からは5世紀初と考えられる土師器が、中層の暗茶褐色粘質土・暗灰褐色砂質土からは4世紀初頃と考えられる二重口縁壺をはじめとする土師器が大量に出土した。一方、下層の暗灰褐色粘質土からは土師器の小片が出土したが、時期の明確な個体は少ない。

ピット

ピットは調査区のほぼ全域で確認された。大半のものは直径30cm前後、深さ25cm前後である。埋土からはほとんど遺物は出土しなかったが、SP009からは、タタキを施す弥生土器の破片が出土した。

まとめ

今回の調査では、古墳に係わると考えられる溝状の落ち込みを検出した。溝の方向は磁北方向からやや西に振っている。梅原末治氏の記述では古墳は西北西に前方部を向ける前方後円墳とあり、今回検出した溝の方向がそれにはほぼ一致している。また、溝の埋土中層～下層から出土した土器は4世紀初前後と見られることから、この溝の掘削時期は4世紀初もしくはそれ以前と考えられる。扁保曾塚古墳が三角縁神獣鏡や勾玉などの石製装飾品を持ち、埴輪の樹立がないという特徴から古墳時代前期の古墳と考えられているため、今回の溝の掘削時期とあまりたがわない時期と考えられる。そのため、この溝状の落ち込みが古墳の周濠の可能性が高いものと考えられる。この溝を周濠として捉えると、古墳の全長は60m前後と考えられ、梅原氏が想定したものと一致する。しかし調査区が制約されており、古墳の裾部や、それに伴う葺石が検出されていないため、断定することはできない。

一方、ピットが検出されており集落が存在したと考えられるが、出土遺物が少なく時期を特定することが困難である。平成6年度に民間調査団が調査した時に古墳時代中期の建物を検出しておらず、おそらく今回のものも同時期にあたると考えられる。ただし、弥生時代後期頃と考えられる土器が出土するピットも存在するため、やや古い時期の集落が存在する可能性がある。



fig.27 調査区全景

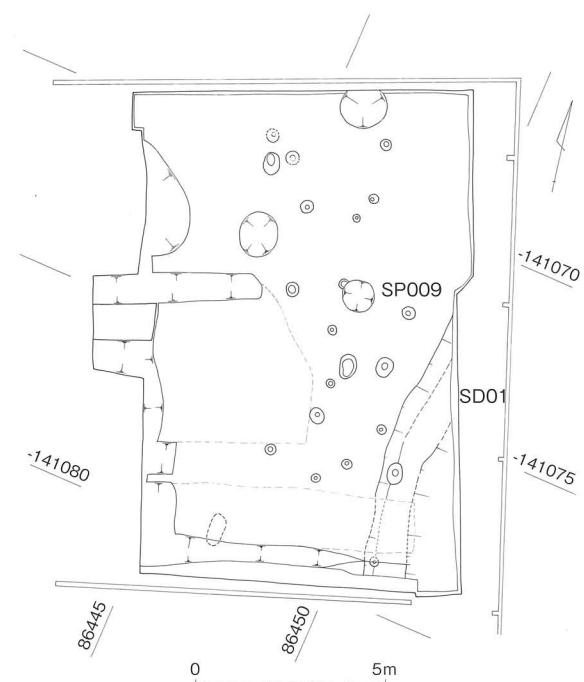


fig.28 遺構面平面図

### 3. 岡本北遺跡 第6次調査

岡本北遺跡は六甲山系東半南麓の、扇状地の緩斜面地に立地している。遺跡は平成元年に集合住宅新築に先立つ試掘調査で始めて確認され、それに伴う第1次発掘調査が実施されて以来、過去5回の調査が実施されている。それらによって弥生時代末頃～古墳時代初頭と鎌倉時代の複合遺跡であることが明らかとなっている。第1・2次調査では当該時期の竪穴住居や掘立柱建物が多く確認されており、広い範囲に集落が形成されていたことが明らかとなっている。

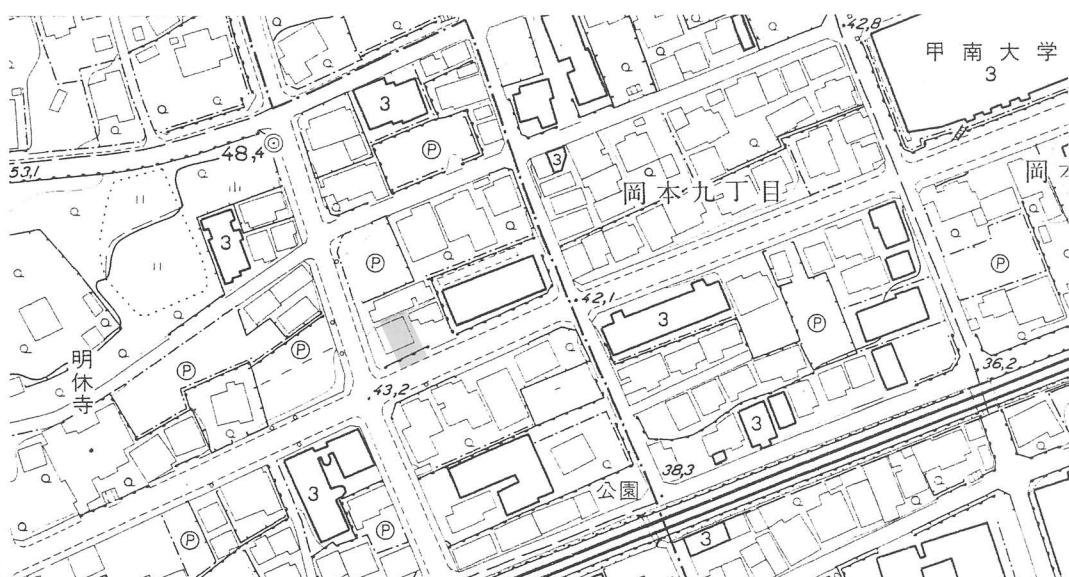


fig.29 調査地位置図

#### 調査の概要

今回当該地で個人住宅の建築計画が出されたため、平成18年2月13日に試掘調査を実施した。試掘の結果埋蔵文化財が確認されたが、個人住宅の基礎部分は掘削深度が埋蔵文化財にまで達しないものの、一部で遺構面に影響を与える部分に関して発掘調査を実施した。

詳細な層序は、上から順に近現代の整地土、宅地化直前の耕作土、旧耕作土が3層、地山最上部の酸化変質部分、地山と続く。

#### 検出遺構

検出した遺構は竪穴住居1棟、土坑1基、落ち込み1基の他、ピットが13基である。

#### SB01

調査区の東半で検出した竪穴住居である。北側は搅乱の底で検出したため西側や南側と比較して検出深度が異なっており、一見輪郭がずれているように見えるが、本来は一辺約6mの隅丸方形の竪穴住居になると考えられる。東端は調査区外に続いている。工事影響深度の関係上、床面までは掘削できなかったため、主柱穴の数や中央土坑の有無などは不明であるが、調査区壁際を一部分掘り下げた結果、深さは約40cmであることが確認された。埋土は上から順に暗茶灰色粘質土、暗灰茶色粘質土、茶色シルト塊混じり暗灰茶色粘質土、茶色粘質土である。遺物は弥生時代末頃の土器が多く出土した他、西寄の埋土中から直径約25cmの淡黄白色粘土塊が出土した。極めて精良で土器製作用の粘土である可能性が高いが、竪穴住居床面上の検出ではなく埋土中からの出土であるため、断定し難い。

- SK01 調査区の南辺中央で検出した土坑である。約半分が調査区外に続いており全体の規模は不明であるが、現状で長さ1.5m以上、幅0.7m以上、深さ約15cmで、断面は椀状である。埋土は暗褐灰色粘質土と茶褐色粘質土が混和したもので、遺物は弥生土器が少量出土した。
- SX01 調査区の南東隅で検出した遺構である。竪穴住居SB01に切り込まれ、さらに調査区外に続くため、わずかの部分しか検出できなかった。遺構の形状が不明であるため、ここでは落ち込みとした。深さは約25cm、埋土は上が炭化物を含む暗茶褐色粘質土、下が暗灰茶色砂質土で、遺物は弥生土器が少量出土した。
- ピット ピットは合計13基検出した。比較的浅いものが多かったが、中には柱穴になりうるものもあった。しかし調査範囲が限定されることもあって、建物などを構成するようにはまとまらなかった。
- まとめ 岡本北遺跡はこれまでの調査によって弥生時代末頃～古墳時代初頭、鎌倉時代の遺構面を持つ複合遺跡であることが解明されているが、2つの時期とも集落が確認されている。今回の調査では明確に鎌倉時代と判断できる遺構は確認できなかったが、弥生時代末頃の竪穴住居が1棟確認できた。今回の調査地点からみて第1次調査地点は北東約100m、第2次調査地点は北西約200mに位置しており、ともに弥生時代末頃の竪穴住居と掘立柱建物が確認されている。したがって今回竪穴住居を確認したことにより、かなり広範囲に集落が展開している可能性が高くなってきた。遺跡はまだ6回目の調査で、今回を含め内4回は小規模の調査であるが、今後も周辺の発掘調査を重ねていくことで、集落の詳細な規模や性格が明らかになっていくことであろう。

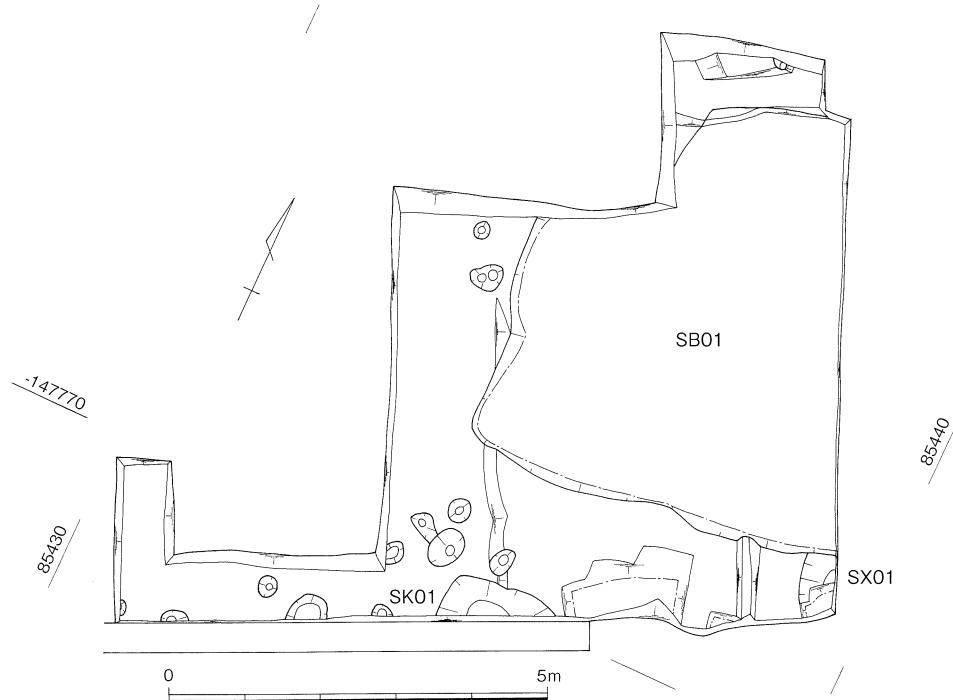


fig.30 遺構面平面図

## 4. 本山中野遺跡 第2次調査

本山遺跡は六甲山系の南面、高橋川左岸の瀬戸内海に面する平野部に位置する。縄文時代の波蝕崖は今回調査地の北約100mにある国道2号線にほぼ重なり、その南はそれ以降形成された堆積土がベースとなる。古代山陽道は当地の南約100mに存在する。

平成6年、今回の調査地の南約20mの隣接地において行われた第1次調査においては、現地表下約1.7m以下において低湿な環境で形成された分解した植物質を多量に含む堆積土が確認され、この層の上に低湿地が陸化していく過程で縄文時代晚期以降の遺物・遺構が残されていた。縄文時代晚期から古墳時代後期の段階では低湿地そのもので、遺構としては踏みしめ道の痕跡が確認できる程度であった。飛鳥時代初めに至りこの湿地を横断する道、両裾に土留めの杭・板を渡し盛土を行う幅約1.5m～2.0mの道が敷設される。奈良・平安時代になると陸化の進んだことが花粉分析で明らかとなっており、この時期の土地区画の溝・盛土をもつ道等の遺構が検出されている。これ以降中世の遺物も出土しているが明瞭な遺構は確認されていない。



fig.31 調査地位置図

### 調査の概要

工事により遺跡の破壊される部分について発掘調査を行なった。その結果2枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。

遺構面 現地表 (1a層上面) : 標高約4.0m

第1遺構面 (5a層下面) : 標高約2.9m～3.0m

第2遺構面 (7a層上面) : 標高約2.6m～3.0m

### 第1遺構面

奈良時代から平安時代初めの遺物を比較的多く含む5a層の下面の遺構面。顕著な遺構は確認されなかった。調査区北部は第2遺構面と同一レベルになる。

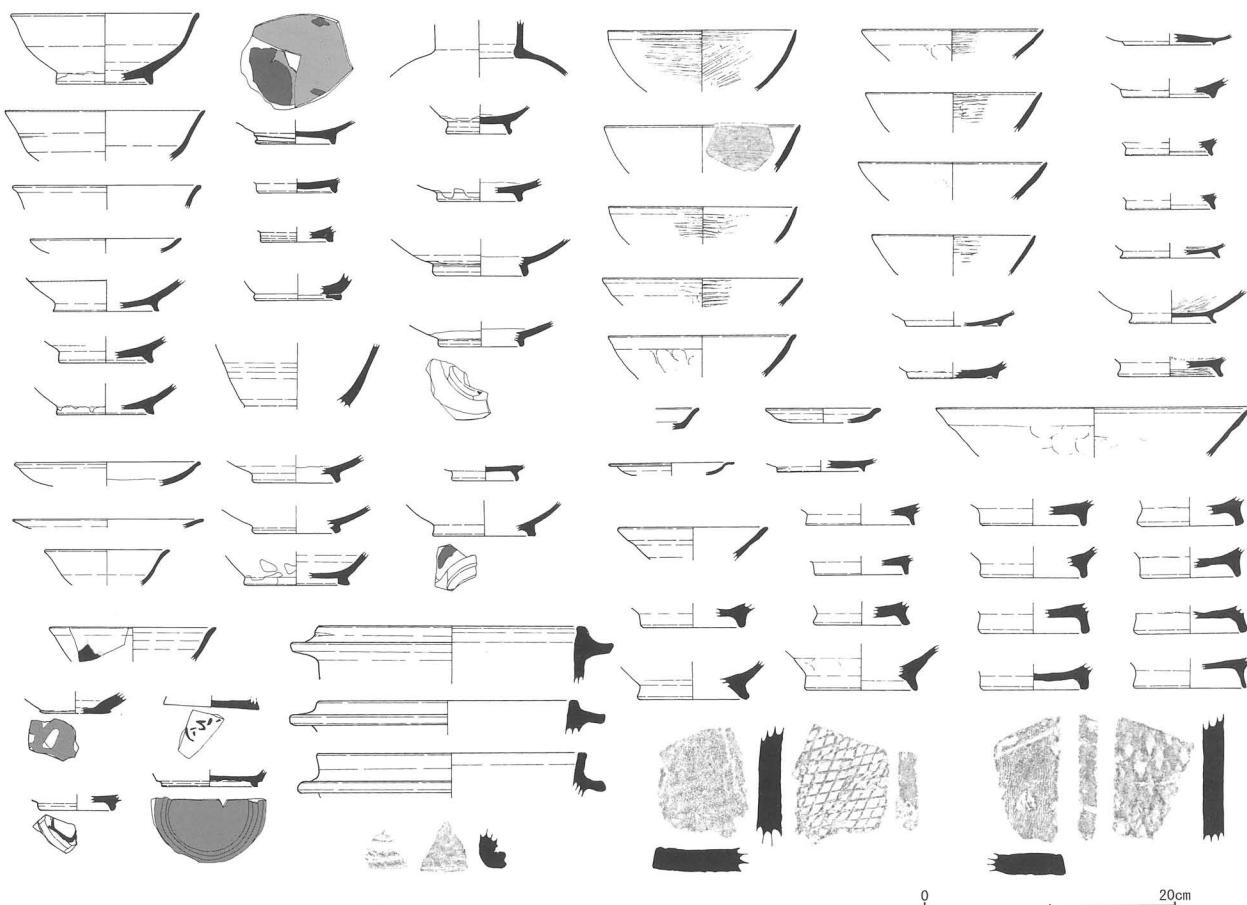
### 第2遺構面

洪水砂層である6c層によって覆われる7a層上面の遺構面。浅い溝3条と段落ちの他、ほぼ全域に動物の足跡が残されていた。洪水砂6b～6c層からは比較的多くの遺物が出土したが、7a層にはほとんど遺物は含まれていない。現地で見る限り、出土遺物は第1遺構面のものとあまり変わらない時期のものであると思われる。

## まとめ

今回の調査地において確認された遺構は低湿地の地面に残された足跡群のほか浅い溝程度であり、顕著な遺構は確認されなかつたが、洪水砂層から出土した遺物には緑釉陶器・瓦・墨書土器等が多くあり、注目に値する。これらの遺物は奈良時代から平安時代前期のものであり、この時期当地に瓦葺の官衙的な施設の存在していた可能性が考えられる。ただし今回の調査地においては関連する遺構はまったく検出されていない。周辺で行われた発掘調査でこういった遺物が確認されたのは、北東約200mの井戸田遺跡第2次調査で出土した緑釉陶器片数点と本山中野遺跡第1次調査地点の例があげられるに過ぎない。国道2号線をはさんで北の本山遺跡の調査は広い面積の調査が行われているが出土は報告されていない。

ここで南の本山中野遺跡第1次調査地例をみてみると、須恵器質の緑釉陶器1点、格子状の叩き目をもつ須恵器質の平瓦片4点が撹乱土層・遺物包含層から出土しているにとどまる。墨書土器はない。わずか20m離れただけであるにもかかわらず、出土のありかたにこれだけの違いが認められること、周辺の遺跡でほとんどこの種の遺物が確認されていないこと、そして遺物自体にも目立った摩滅は確認できないということからは、洪水砂のなかに含まれる遺物が遠くから流されてきたものではなく、その供給源はごく近く、恐らくは北隣接地に存在することを示すものだろう。



1~32・34~55・57・61・63~71・73・74:5層、33・56・58~60:4層、62:6層、72:試掘時出土  
(1~12:緑釉陶器、13~25:灰釉陶器、26~30:須恵器、31~72:土師器、72~74:瓦、  
8・17・25~30:墨書・墨付)

fig.32 出土遺物実測図

## 5. 住吉宮町遺跡 第40次調査

住吉宮町遺跡は弥生時代～中世にかけての遺跡で、とりわけ古墳時代後期には大小の古墳が群集して築かれたことが解っている。昭和60年度に共同住宅建設に伴い調査がはじめて実施され、今回で40回目の調査にあたる。これまでの調査で、JR住吉駅の付近と住吉幼稚園の周辺に古墳群が存在すること判明しており、特にJR住吉駅の北側には坊ヶ塚古墳という前方後円墳が、また駅の南側には住吉東古墳という帆立貝式古墳が存在しており、古墳群の中の盟主的な古墳が存在することが判明した。

一方国道2号線を境にその南側では古墳ではなく、弥生時代中期～平安時代の建物や、安土桃山時代の採石址などが発見されている。今回の調査地の西隣で昭和63年に調査（第11次調査）が行なわれており、主に平安時代の掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居、弥生時代中期～古墳時代初頭の竪穴住居・河道を検出した。しかし遺構はすべて西寄りに発見されており、東側は遺構の密度が希薄になるようで、ほかにも近隣で調査が行なわれたが、第11次調査より東側には住居跡などは確認されていない。



fig.33 調査地位置図

### 調査の概要

今回の調査地は地盤改良を行なうため計画地全面と、クレーン設置部分について発掘調査を行なった。バックホーにより盛土・耕作土を除去し、人力により遺物包含層掘削・遺構検出を行った。

現地表面からアスファルト・盛土・暗褐色砂質シルト・オリーブ灰色シルト質砂・淡オリーブ灰色シルト混じり砂（遺構面・遺物包含層）・黄褐色粗砂（遺物包含層）・にぶい黄褐色粗砂（遺構面・地山）の順で堆積する。以下には洪水堆積に起因するとみられる細砂～粗砂が堆積する。なお、南半分では淡オリーブ灰色シルト混じり砂が堆積しておらず、その下層の黄褐色粗砂上で第1遺構面の遺構を検出した。

### 第1遺構面

主に調査区の北半で検出された遺構面で、採石址と考えられる土坑を10基検出した。大半は全長3m前後、深さ1m程度で、大きなものでは全長7m近い。土坑の壁面はオーバーハンプするものが多く、花崗岩を抜き去ったときに形成されたものと考えられる。いずれ

の土坑も下層の遺物包含層の土壤と灰色シルトが混じりあう土で埋まっていた。

下層からは全長20cm前後の花崗岩の削片が多く見られ、石材には幅10cm・5cmの矢穴が見られるものがある。形態は逆台形のものがほとんどであった。幅の広いものは江戸時代初頭の大坂城改築時に切りだされた石垣に残存するものに当たる。幅の狭いものはやや後出のものと考えられている。SK102は高さ約1mの巨大な花崗岩が存在し、その上部に幅5cmの矢穴が2ヶ所確認できた。また、埋土からは50cm大の花崗岩が出土し、そこには幅10cmの矢穴が2ヶ所確認できた。その他の土坑からは幅5cmの矢穴が穿たれた花崗岩の削片が少量確認されたのみであった。

なお、南半検出した採石址は河道状に検出したが、底面の凹凸などから3基程度の土坑が切り合っていた可能性が高い。ここからは幅5cmの矢穴が確認された。

それぞれの土坑からは古墳時代の須恵器・土師器、江戸時代の陶磁器が出土した。

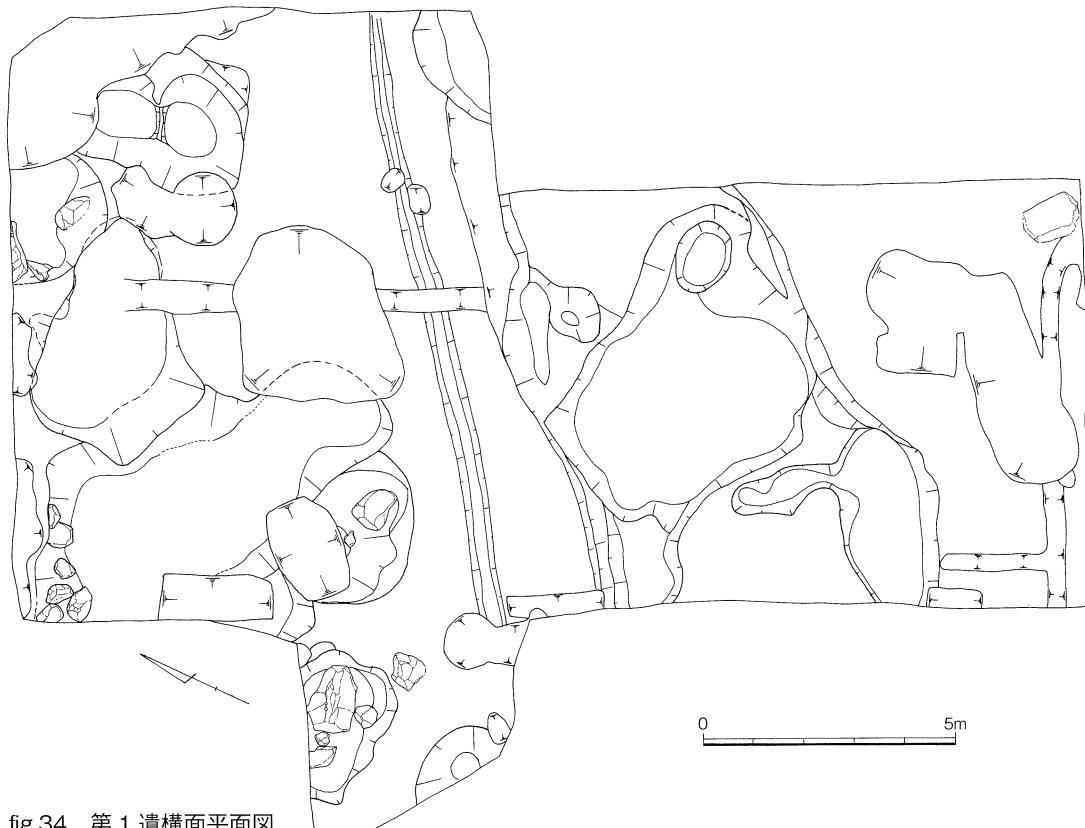


fig.34 第1遺構面平面図

## 第2遺構面

SB201

竪穴住居および掘立柱建物を各1棟、落ち込み1ヶ所、ピット8基を検出した。

搅乱による削平が激しいため正確な規模は不明であるが、1辺5m程度の方形竪穴住居と考えられる。深さは現状で10~20cmを測る。周壁溝および住居に伴うと考えられる柱穴は検出されなかった。遺構検出の段階で住居中央付近に炭が集中する箇所が存在したが、明確な掘り込みなどは見られず、住居に直接関わるものではないと考えられる。また、住居の北側にはカマドが作りつけられていた。しかしカマド本体は存在せず、煙道にあたる部分が検出されたのみに留まった。カマドと考えられる部分は赤褐色に変色しており、周辺に比べやや硬質化していた。炊き口付近には長さ20cm程度の立石が据え付けられており、

支脚として使用されていたものと考えられる。

埋土からは古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。

- SB202 調査区南半で検出された遺構で、SB201に切り合って検出された。2×1間以上ので、柱間は約1.8mを測る。近世の採石址により搅乱されているため不明であるが、建物はさらに北に延びていたものと考えられる。柱穴は直径30cm、深さ40cm前後を測る。埋土はいずれも灰褐色粘質粗砂で、土師器・須恵器小片を含む。時期は不明であるが、堅穴住居の上から掘り込まれていること、周辺の遺構の状況などから、平安時代のものである可能性も指摘できる。

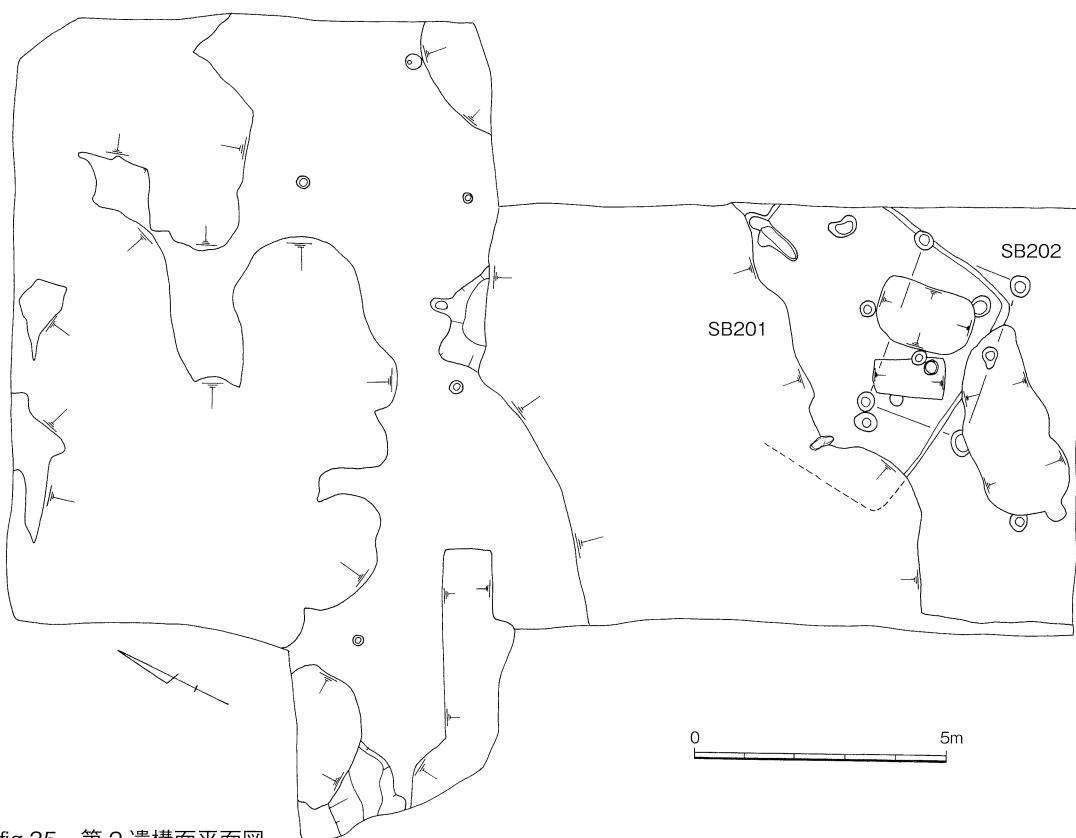


fig.35 第2遺構面平面図

### まとめ

今回の調査では、近世の花崗岩採掘址と、古墳時代の堅穴住居、時期不明の掘立柱建物を検出した。

花崗岩採掘址は他の地点でも検出されているが、今回のように比較的まとまって検出されていない。残存する石材の矢穴痕から江戸時代初頭のものと考えられる。この時期に典型的な幅10cmの矢穴が確認された土坑はSK102のみで、幅5cmの矢穴が確認されたSK103に切られていたため、これまで考えられてきたように後者の矢穴が後出するといえる。しかしSK102のように二つのタイプが同一の遺構で確認されていることもあり、これが時期差もしくは工人の差などを示すものか検討を要する。

古墳時代の堅穴住居が検出されたことで、古墳時代の集落の範囲がさらに南東に延びていたことが解った。

## 6. 御影山手遺跡 第2次調査

御影山手遺跡は六甲山系東半南麓の南西斜面の東灘区と灘区との境を流れる石屋川の東側にある遺跡で、石屋川の支流の新田川と宮谷川の2つの小さい川にはさまれた南西斜面に立地する遺跡である。周辺一帯は完全に住宅地化しているが、陸軍陸地測量部作成の假製図によると遺跡のすぐ北隣まで六甲山から派生する尾根が迫っており、その直下であったことが判る。調査開始前の標高は56mで、現在でも海岸線までの眺望が開けている。

遺跡は平成3年2月に今回の調査地点の西方で第1次調査が実施され、江戸時代の長方形の土坑が2基、平安時代末の掘立柱建物が1棟、鎌倉時代の谷地形が検出されている。それらの他に弥生時代後期の土器も出土しており、近くに弥生時代後期の遺構が存在する可能性も考えられていたが、遺跡の明確な姿は不明確であった。



### 調査の概要

平成16年度に当該地で宅地造成の計画がだされたが、敷地が広いために遺跡の分布状況や遺存状況を確認することを目的として、同年5月25日と6月28日の計2回にわたって試掘調査を実施した。2回合計8本の試掘トレンチの結果、敷地のほぼ全面に埋蔵文化財が存在することが明らかとなった。その後、計画は共同住宅建設に変更されることになったが、試掘調査の結果を受け、今年度になって共同住宅の基礎部分の大半、約1,200m<sup>2</sup>を発掘調査することとなった。

調査の結果、当初の予想以上の成果が得られた。したがって調査期間半ばの7月15日には地元の御影北小学校6年生5クラスに発掘調査見学会を実施した他、終盤の9月3日には一般市民対象の現地説明会を実施し、150名以上が来場した。

調査地点は六甲山系南麓の斜面地に立地しているが、調査開始前の現状は概ね平坦で

あった。しかし調査の結果、宅地化直前の耕作土には東壁だけで5段分の段差が確認され、そのさらに下から地形に沿った斜面の状態で遺構面を検出した。したがって実際の層序では耕作土直下が遺構面である部分や、耕作土の下に何層も旧耕作土や遺物包含層が遺存している部分などがあり、遺構面までの深さは全く一定していなかった。また調査区の北西部分は既存建物の基礎による損壊が極めて著しく、表土直下が直ちに地山であるか、あるいは搅乱であり、さらにまた調査区の南辺は耕作地の段差で地山が大きく削られ、遺構はほとんど残っていない状況であった。このため調査区内全体を規定する基本層序は設定し難いが、ここでは東壁の土層を参考として記述しておきたい。層序は上から順に現代の盛土、宅地化直前の耕作土が2層、旧耕作土が0～4層、遺物包含層が0～4層、地山と続く。遺構面は地山の上面である。



fig.37 遺構面平面図

## 検出遺構

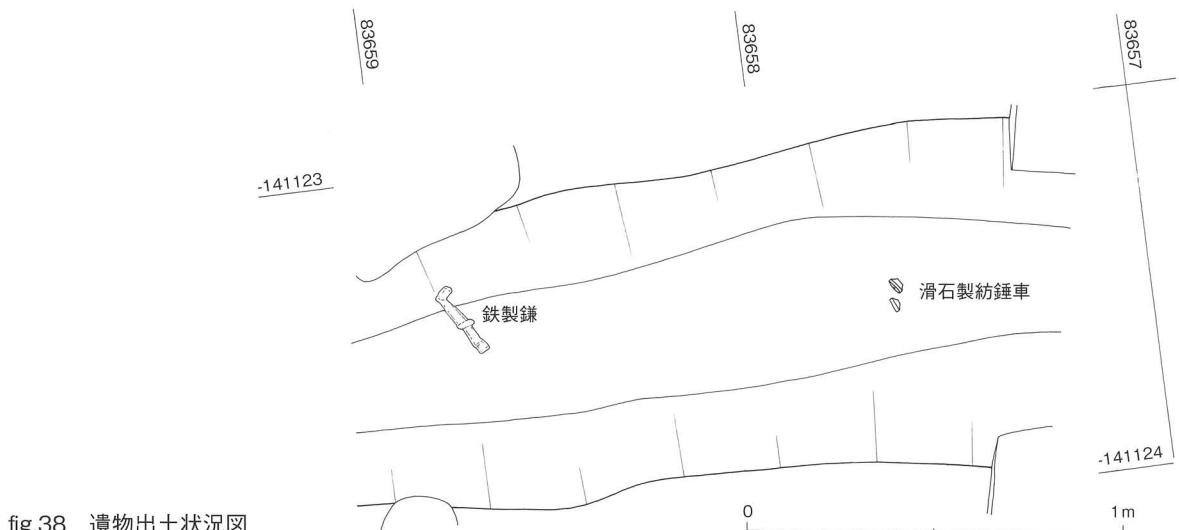
古墳時代後期の古墳群が確認された。古墳は埴輪を持つ1号墳が円墳で、2・3号墳が方墳である。これまで調査地点周辺には古墳の存在は全く確認されていなかった。

調査区内の堆積土層から判断して、これらの古墳は中世のある時点で周辺一帯が耕地化した際に完全に地上から姿を消したと思われるが、1号墳の埴輪の出土状況や2号墳と掘立柱建物群の配置、3号墳周濠の堆積状況から、古墳の周囲に掘立柱建物群が建てられた奈良時代頃にはかなり墳丘に手が加えられ、削平が進行していたことが推定できる。

掘立柱建物は6棟確認されたが、そのうち奈良時代頃の建物は4棟である。これらの建物は柱穴の切り合いが確認されなかったため、建物の同時性は不明であるが、掘立柱建物SB03のみ少し棟方向が異なるため時期が異なる可能性がある。奈良時代以前の建物は2棟で、規模の小さいものである。

その他には弥生時代の遺構もいくつか確認されている。また埴輪や奈良時代の土器などに混じって弥生土器も出土している。それらの時期は弥生時代中期から後期のものである。現状では竪穴住居など居住の痕跡が確認されたのではないが、出土した土器の量から推察して近くに弥生時代の集落が存在していた蓋然性が極めて高い。現在では宅地造成で完全に消滅した北側の尾根筋上に、かつて高地性集落が存在していた可能性も考慮されよう。

なお、本調査の詳細については神戸市教育委員会『御影山手遺跡第2次 発掘調査概報』2006をご参照されたい。



## 7. 日暮遺跡 第28次調査

日暮遺跡は、六甲南麓に位置し、生田川などの河川で形成された沖積地末端に位置する。また、古代における海岸線が、現在の国道2号線付近であると推定されているため、当遺跡は、海岸線から至近距離のところに位置していたと考えられる。

昭和61年に最初の発掘調査が行われて後、現在までに23次の調査が実施されており、これまでに、古墳時代初頭～中頃の竪穴住居や奈良～平安時代の掘立柱建物、中世の溝・土坑等が確認されている。今回は共同住宅の建設に伴い、遺跡が破壊される計画建物の基礎部分に限り、調査を実施している。

### 調査の概要

基本層序は搅乱盛土、旧耕土、暗灰褐色砂質土（近世以降耕土）、暗黄茶褐色砂質土（地山、上面が遺構面となる）、黄茶褐色砂質土となる。

基本的に近世以降の生産活動に伴い、遺物包含層等は削平された様である。

### 遺構と遺物

遺構は、詳細な時期不明の落ち込みの他、中世後期の柱穴群、小溝、土坑を確認している。また近世の柱穴や溝、耕作痕も混在している。

遺物は、弥生後期の土器片等が少量出土した他、中世後期の須恵器や土師器、備前焼が出土している。

### 柱穴群

調査区の全域から多数の柱穴を確認している。径約25cm～40cmで、深さ約20cm～40cmを測る柱穴が大多数である。遺物はわずかしか確認できないが、SP02、SP03では、中世後期の須恵器、土師器が小片で出土している。このことから、柱穴の主な時期は中世後期と考えられる。ただし、SP01、SP06からは近世磁器や平瓦が出土しており、一部には近世の柱穴も混在している。

中世後期と近世の柱穴は、その埋土が異なる可能性が高い。中世後期の遺物が出土する柱穴は暗茶褐色砂質土が埋土である事に対し、近世陶磁器の出土した柱穴は軟弱な暗灰色砂質土が埋土となっていた。基本的に柱穴はこの両者の埋土で確認しており、時期区分が可能だと考える。

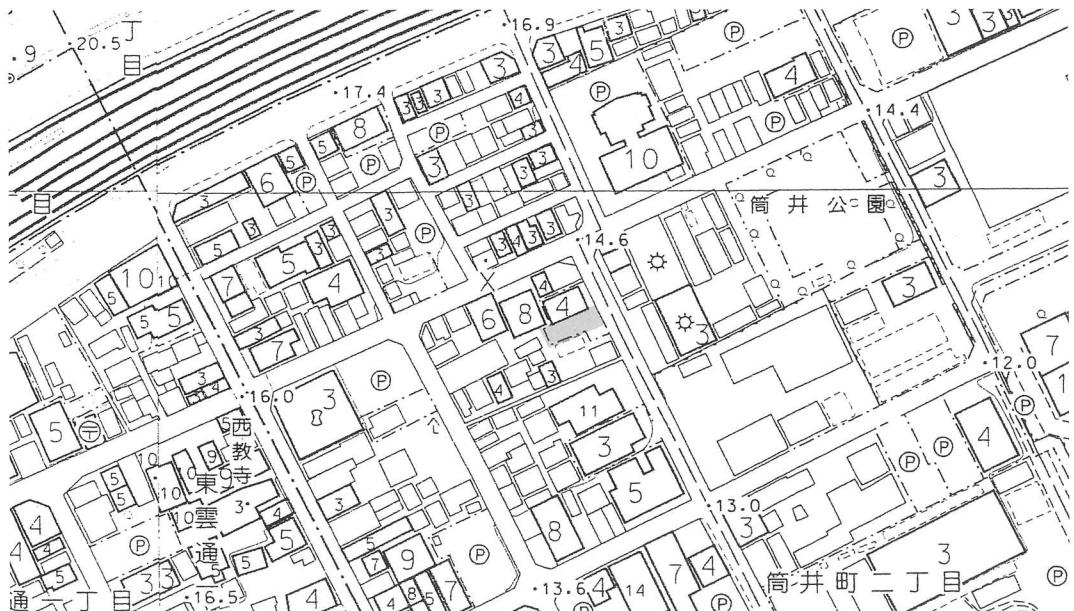


fig.41 調査地位置図

- 近世の柱穴が調査区の南西半で多く確認したのに対し、中世後期の柱穴は北東半で多く確認している。
- これらの柱穴群は、建物や柵列等としての並びは確認できていない。またSP04、SP05（共に中世後期）では柱穴底部に根石を確認している。
- SD01 調査区の北東端部で確認した小溝であり、北東～南西方向から北方向に屈曲して延びている。暗灰褐色砂質土が堆積している。幅約40cmで、深さ約20cmを測り、中世後期の備前焼の甕底部や土師器片が出土している。
- SD02 調査区の北東端部で確認した小溝であり、北西～南東方向へ延びている。暗灰褐色砂質土が堆積し、SD01を削平している。幅約43cmで、深さ約33cmを測り、時期不明の土師器の細片が出土している。SD01を削平している事実から、おそらく中世後期の範疇に収まる溝と考える。
- SK01 調査区北東半で確認した土坑である。幅東西約70cm以上×南北約63cmで、深さ約53cmを測る。暗茶褐色砂質土が堆積し、時期不明の土師器が、細片で少量だが出土している。SK02と切り合い関係が認められるが、その前後関係は確認できなかった。
- SK02 調査区北東半で確認した土坑である。幅東西約65cm以上×南北約75cmで、深さ約25cmを測る。暗茶褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。SK01と切り合い関係は前述のとおりである。
- SK03 調査区北東半で確認した土坑である。幅東西約65cm×南北約53cmで、深さ約34cmを測る。暗茶褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。
- SX01 調査区の北東角で確認した不定形の落ち込みであり、暗褐色砂質土が堆積する。幅約4.8m以上で、深さ約25cmを測る。上面からSD01、SD02やSK03が掘削されており、これらよりも古い遺構である。
- 詳細な時期は不明だが、細かな遺物としては、弥生土器片や土師器となる可能性も認められる破片が出土している。明らかな中世の土師器や須恵器片は出土していない。正確な時期は不明だが、古墳時代前期以前に遡る可能性が高い落ち込みであろう。

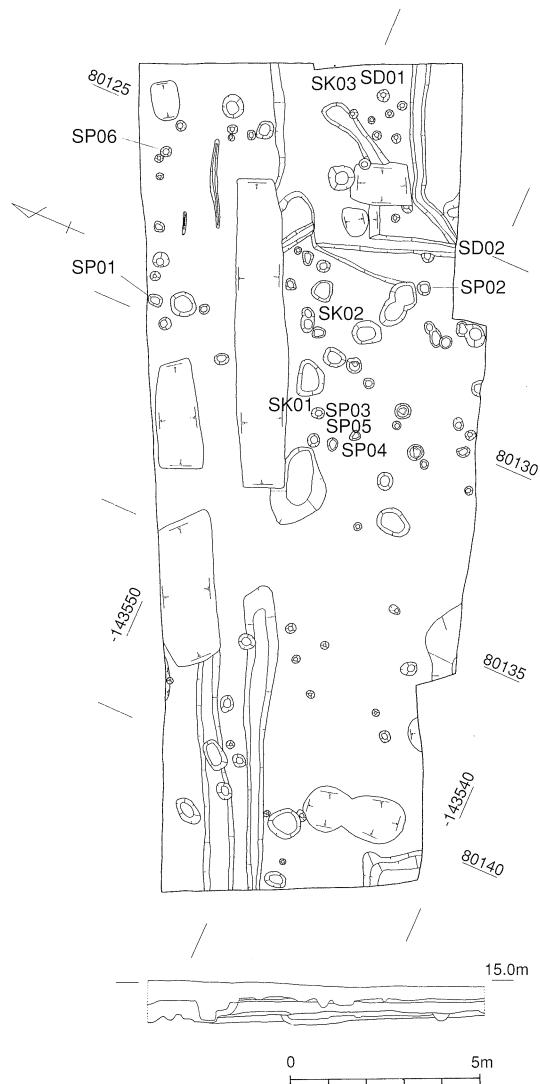


fig.42 遺構面平面図・断面図

## 鋤溝

調査区の北東端で数条確認した。幅約10cm～15cmで、深さ約2cm～5cmを測る。遺物は出土していない。座標北から東へ約25°振る方向に延びている。

遺構面を覆う近世以降の耕作土である暗灰褐色砂質土が埋土となっていることから、近世以降の所産と理解できる。

## まとめ

今回の28次調査では、中世後期の柱穴や土坑、小溝を確認した。その結果、調査地周囲で中世後期集落に伴う居住域の存在が明らかとなった。また、近世の柱穴や溝、耕作痕を確認しており、近世集落も存在する事が判る。他に、古墳時代前期以前の可能性が高い時期不明の落ち込みも確認している。

これまでの調査で中世集落の居住域に関する遺構は、5次調査、19次調査、20次調査等で掘立柱建物等が確認され、徐々に概要が明らかとなっている。特に20次調査では、鎌倉時代後半～室町時代前半の小規模な苑池を構えた屋敷地が確認されており、莊園等の在地有力者が居住していた事も予想できる。

他に、11次調査、12次調査で中世前期(平安時代後期)の耕作痕を多く確認している。また、14次調査では中世後期の水田跡が確認されている。これらの調査は遺跡の東半に位置する筒井町か日暮通り1丁目で行われており、周囲に集落の生産域が拡がる事実が確認できる。

今回の筒井町で行われた28次調査の結果により、今までの調査事例より東方にも、中世後期集落の居住域が広がる事実を確認できた。

この28次調査で確認した集落の詳細な時期は、全体的に遺物が少量で細かな破片である為、不確定である。ただし概観すると、中世後期の範疇に収まる事は確実である。



fig.43 調査区全景

## 8. 二宮東遺跡 第2次調査

二宮東遺跡は、現在の生田川右岸に広がる遺跡で、古墳群が存在したと伝えられている場所に当たる。当遺跡の東側には、奈良時代から平安時代の鍛冶遺構が検出された二宮遺跡が存在し、南側には縄文時代早期から中世に至る複合遺跡である、雲井遺跡が存在する。

当遺跡の調査は今回が2回目で、第1次調査では、古墳時代後期の流路などが確認されているが、遺跡の性格は不明な点が多い。



fig.44 調査地位置図

### 調査の概要

調査地は、南側に緩やかに傾斜する扇状地上に位置する。今回の調査は、共同住宅建設に伴い実施したもので、工事により影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。現在の標高は22.4mである。

基本層序は、現代の盛土・表土層下、古墳時代以降の耕作土が数層存在し、継続した生産活動が行われていた状況が窺える。洪水等の多量の土砂の堆積は無く、安定した立地条件であるといえる。遺物包含層は存在せず、現地表から約60cmで古墳時代後期の遺構面を検出し、流路1条、柱穴数基を検出した。

SD101

幅3.3m以上、深さ約175mの流路で、ほぼ南北方向に流れる。埋土は大きく2層に分層できる。遺物は、上下2層の分層面と溝底から出土した。分層面からは古墳時代後期の遺物がまとめて出土した。溝底から出土した土器は少量で遺存状況が悪く、時期を判別しがたい。

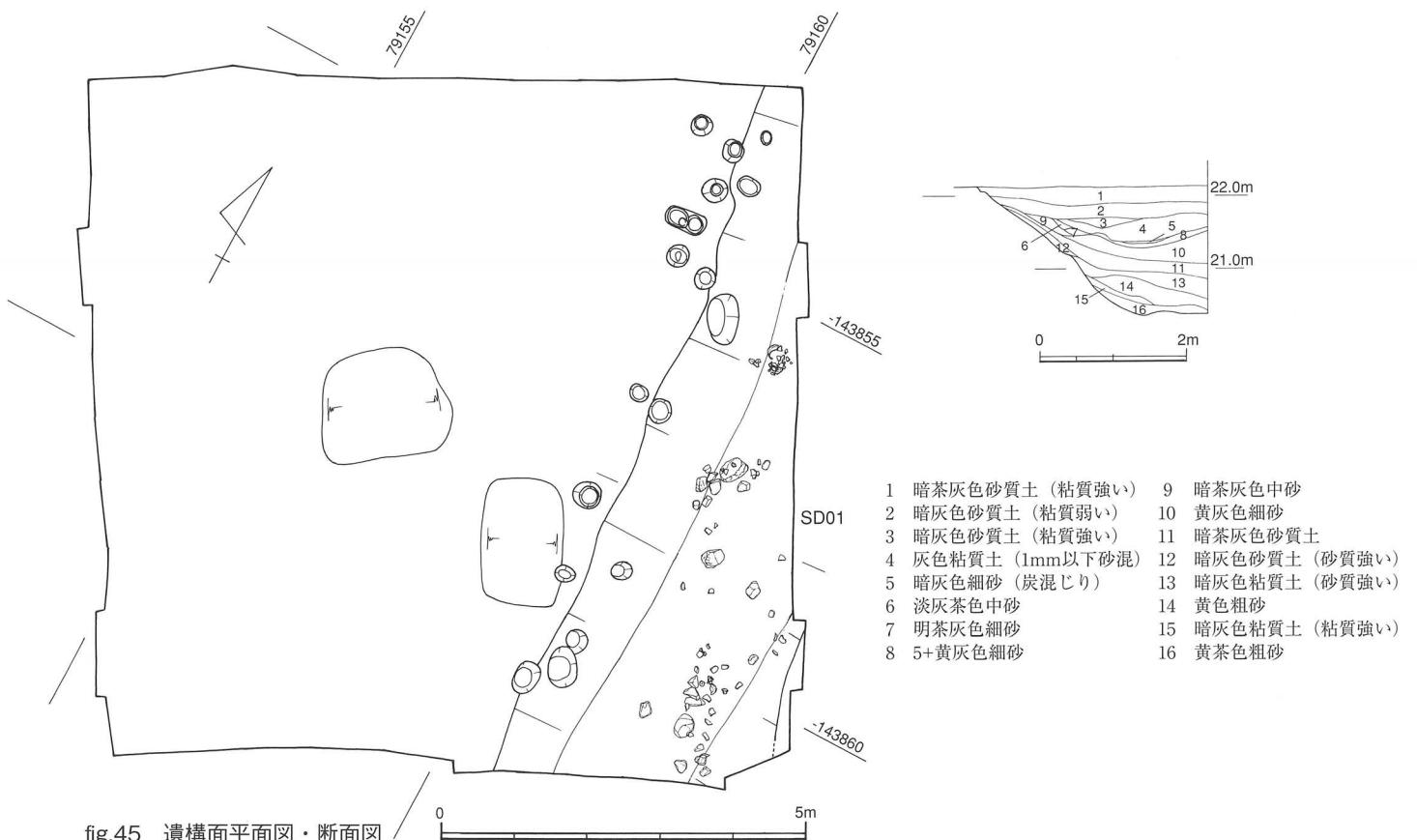
柱穴

10基検出したが、建物としてまとまるものは無い。遺構の切り合い関係から、SD101より新しい時期の遺構であると考えられる。

## まとめ

今回の調査で検出した古墳時代後期の流路は、第1次調査地や近接する二宮遺跡でも同様に検出されている。明確な居住域を示す遺構は確認できなかったが、二宮遺跡で確認されている古墳時代後期の集落が、当調査地周辺まで広がっていたと考えることができる。

調査地の西半部で遺構の検出はなかった。調査地は、北西から南東に傾斜しているため、高位である西半部が後世の整地により削平を受け、遺構面が失われた結果であると考えられる。



## 9. 雲井遺跡

雲井遺跡は、雲井通・旭通・琴ノ緒町が中心にあっており、これまでの19次に及ぶ調査が行われ、縄文時代早期から中世に至る遺構や遺物が検出されている。特に、縄文時代晩期と弥生時代中期の遺構や遺物が多く、縄文時代晩期の土器棺と、弥生時代中期の方形周溝墓群は、当遺跡を特徴付ける遺構である。



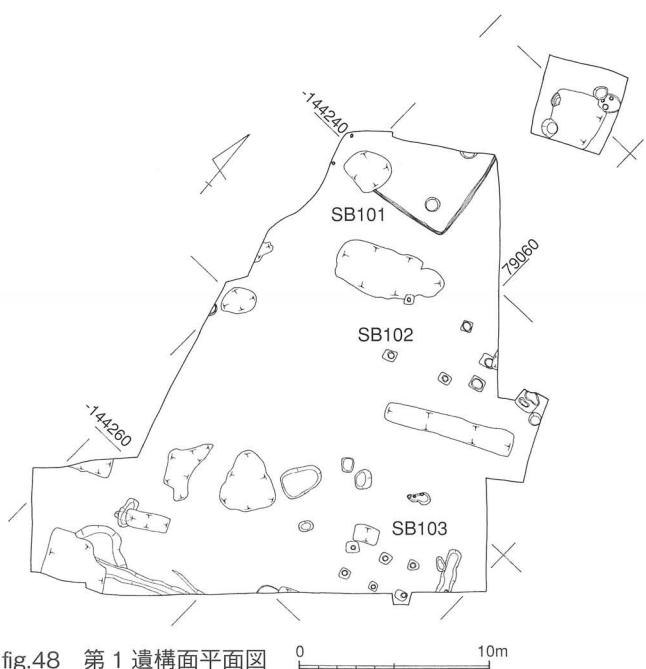
fig.47  
調査地位置図

### 1. 第20次調査

#### 調査の概要

調査地は、主要ターミナルである三宮駅の東北に当たり、市街化が早い段階で進んだ場所に当たる。現在の標高は15.3mから15.5mを測る。基本層序は、現代の盛土・表土層下、古墳時代以降の耕作土が数層存在し、継続した生産活動が行われていた状況が窺える。現地表から約60cmで古墳時代の遺構面が、さらに下層から、部分的に縄文時代晩期の遺構面が検出された。

- 第1 遺構面** 弥生時代～古墳時代後期の遺構面で、1区では土坑を4基検出した。いずれも搅乱により一部が失われており、詳細は不明である。2区では竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴等を検出した。遺構面直上は耕土層で、遺物包含層は残存せず、遺構の遺存状況も悪い。
- SB101 方形の竪穴住居である。全体が耕作による強い削平を受けており、西辺部は削平により失われているため全容は不明であるが、東側と南側の周壁溝と柱穴2基を検出した。残存長は、南北5.1m以上、東西4.3m以上である。柱穴と周壁溝の配置から1辺約5.8mの規模であったと復元できる。ベッド状遺構、中央土坑は確認できなかった。柱穴は、直径約75～90cm、深さ50cmを測る。柱痕の直径は、約20cmである。周壁溝を、東辺と南辺で検出した。SP2及び床面直上から、土師器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。
- SB102 1間×1間の掘立柱建物で、SP10より土師器の細片が出土したが、時期を特定できない。
- SB103 1間×2間の掘立柱建物である。桁行方向は、SB102と同様、N250°Wである。SP104を除く柱穴から須恵器、土師器の細片が出土しており、所属時期は6世紀後半と考えられる。
- 第2 遺構面** 縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構面で、土坑、不定形の落ち込み、柱穴等を検出した。
- SK205 長径50cm、短径40cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。埋土上層より、縄文時代晩期の深鉢の破片とサヌカイト片が出土した。
- SX201 南北3.2m、東西1.5m以上、深さ約5cmの方形の遺構である。柱穴が1基検出されており、竪穴住居である可能性があるが、中央土坑や周壁溝等の施設が検出されず、確定できない。埋土から遺物は出土しなかった。
- まとめ その他の遺構、柱穴、土坑等を数基検出したが、いずれも遺物は出土しなかった。
- 今回の調査地は、後世の耕作による削平の影響が大きく、検出された遺構は少ない。しかし、これまで不明であった遺跡の北西部の様相を示す資料として重要である。特に、縄文時代晩期の土坑と古墳時代後期の掘立柱建物の検出により、両時期に集落が北西部に拡大することが確認され、当遺跡の集落動向を考える上で重要である。
- なお、詳細は2006年刊行の『雲井遺跡第20次調査発掘調査報告書』をご参照されたい。



## 2. 第21次調査

**調査の概要** 調査区は、南側に緩やかに傾斜する扇状地上に立地し、現在の標高は17.9mから18.1mを測る。基本層序は、現代の盛土・表土層の下層に、古墳時代から中世に至る耕作土が数層存在し、その下層に古墳時代後期の湿地状の土壤が堆積している。湿地状堆積土のベース層（明黄灰色砂質土）が遺構検出面であり、現地表から約180cmを測る。遺構より出土した遺物は少ないが、弥生時代中期から後期の遺構面と考えられる。

**SB101** 炭を含む土坑を中心に、5基の柱穴を検出した。柱穴の検出位置から、6基の主柱穴を持つ竪穴住居と想定でき、対向する柱芯距離は約4.2mを測る。遺構の残存状況は悪く周壁溝は残存しないため、住居の平面形態は不明である。

**SD101** 幅80～120cm、深さ25cmを測る遺構である。砂質の強い堆積土であることから、溝状遺構と想定できるが、近接する調査区で接続する遺構は確認できず、全体の形状は不明である。遺物の出土はない。

**SK106** 長さ90cm、幅50cm、深さ約20cmの土坑である。遺物は出土しなかった。

**まとめ** 雲井遺跡内で検出された弥生時代中期から後期の生活域は、南半部に集中しており、北半部で検出されている遺構は、数条の流路等があるにすぎず、集落の状況は不明であつた。今回の調査で、竪穴住居をはじめ、柱穴や土坑がまとめて検出されたことから、北半部にも集落が展開することが確認された。

北接する二宮遺跡が盛行する古墳時代後期から飛鳥時代の遺物は、湿地状の堆積土から若干出土したが、遺構は確認できなかった。古墳時代以降は、度重なる土砂の流入により地盤が安定せず湿地化した状態が認められる。

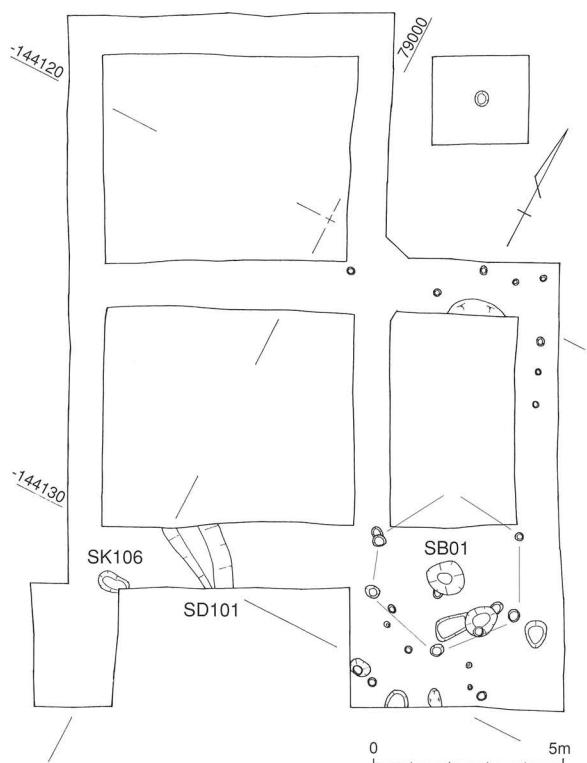


fig.50 遺構面平面図



fig.51 調査区全景

### 3. 第23次調査

#### 調査の概要

基本層序は、現代の搅乱、旧耕作土、遺物包含層、地山と続く。遺構面は地山の上面である。検出した遺構は竪穴住居、溝、土坑、落ち込み、ピットである。

#### SB01

1区の南端で、土坑SK01に切られる状態で検出した竪穴住居である。大部分が搅乱で破壊されているため、全体の規模や詳細な形状は不明であるが、現状では方形の竪穴住居になる可能性が高い。深さは約40cmで、さらに幅約10cm、深さ約5cmの周壁溝がある。また北側には、作り付けのカマドと考えられる突出部分がある。床面上からピットが1基検出されたが、配置から考えて主柱穴になる可能性は低く、竪穴住居に伴うものかどうかは不明である。遺物は弥生時代後期の土器しか出土しなかったが、住居の形状や突出部分から古墳時代後期の竪穴住居と考えられる。

#### 土坑

土坑からは、弥生時代後期の土器が出土した。

#### まとめ

雲井遺跡はこれまでの調査によって縄文時代前期～飛鳥時代の遺構面を持つ複合遺跡であることが解明されており、なかでも弥生時代後期と古墳時代後期のふたつの時期には集落が大規模に展開していることが確認されている。今回の調査では、これまでの周辺の調査成果と同様に弥生時代後



fig.52 調査区全景

期と古墳時代後期の遺構が確認されたが、遺構面としては同一面で検出された。古墳時代後期の遺構では、竪穴住居が確認された。

弥生時代後期の遺構は溝や土坑、ピットであったが、遺構の密度から考えて周辺にも当該時期の集落が展開しているものと考えられる。

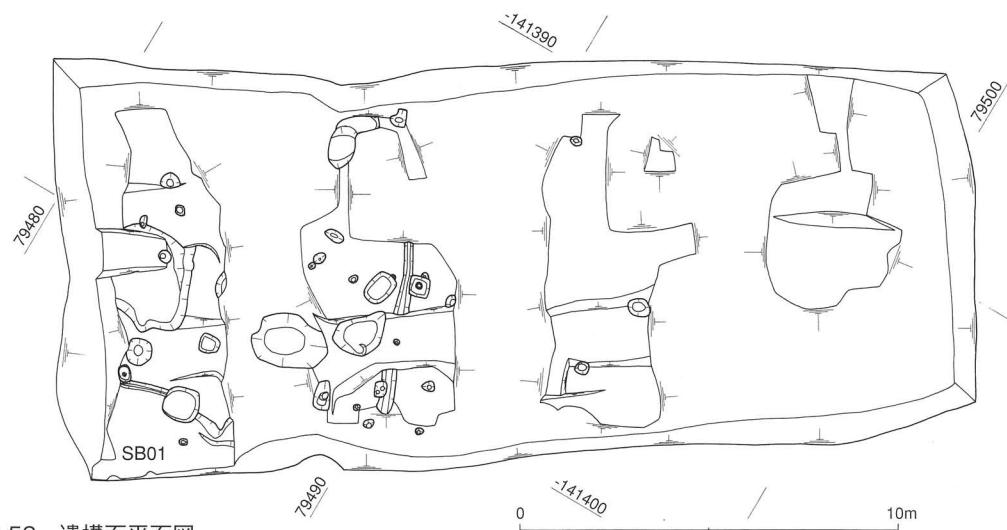


fig.53 遺構面平面図

## 10. 生田遺跡 第4次調査

生田遺跡は鯉川をはじめとした六甲山系から流れ出す中小河川により形成された狭い扇状地の扇央部分に位置する遺跡である。

今回の調査地は、六甲山系南麓に形成された扇状地上に立地しているため、標高差はおよそ5mを測る。調査区北部では耕作土直下に中世遺構面・古墳時代後期から平安時代遺構面・縄文時代から弥生時代遺構面の3層の遺構面を検出した。しかし調査範囲中央部では、明治～昭和初期の神戸中華同文学校の基礎の直下に、縄文時代後期から古墳時代遺構面を検出した。さらに下層には3層の縄文時代の遺構面が確認された。調査範囲南部では削平は比較的少なく、現地表面から盛土・旧耕作土・古墳時代後期包含層（上面が中世遺構面）・古墳時代中期～後期遺物包含層（上面が古墳時代後期遺構面）縄文時代～弥生時代遺物包含層（上面が縄文時代～弥生時代遺構面）・縄文時代後期遺物包含層（上面が縄文時代後期遺構面？）が堆積する状況を確認した。



奈良時代から中世 この時期の遺構は、1・3・4・6BLで確認されている。主な遺構は、柵列・土坑・井戸・溝・大溝・ピットが挙げられる。

- 掘立柱建物 4BL北半西側で検出した。2間×3間の掘立柱建物である。柱穴掘形は直径20~40cm、深さ15~20cm、柱間は1.5~2.5mを測る。柱穴からは平安時代頃の土師器が出土している。
- SB4101 井戸 3BL北半西端で検出した。縦板組隅柱横桟留の井戸である。上層には花崗岩が1段敷き詰められており、一部井戸内に崩落した状況が確認できた。掘形の直径2.0m、一辺0.7m、深さ1.3mを測る。厚さ1.0~2.0cm程度の立板を一辺に2枚、四隅は杭で留め、中層にも杭で横桟を渡す。土圧によって立板が南東方向へ倒れている。
- SE3201 主に奈良から平安時代の遺物が出土している。また、割物の桶・斎串・杓文字が出土している。なお、分析の結果、板材には、モミ属・ツガ属・カヤが、杭にはコウヤマキが、横桟にはコウヤマキ・カヤ・コナラ属アカガシ亜属が使用されている。強度・耐水性を考慮した木材選択が行なわれていたことが判明した。そこに設置されていた曲物には、ヒノキが使用されていた。また、井戸内部から出土した製品については、杓文字・斎串がヒノキ、桶については、底がモミ属、身がケヤキ、持ち手がコナラ属アカガシ亜属と判明した。
- 大溝 6BL東端で検出した。北西方向から南東方向の溝で、長さ約10.0m、最大幅6.0m、深さは検出面から80cmを測る。遺構の平面形は直線的であるが、底面は凹凸が激しく、一定していない。上層ではオリーブ灰色粘質土、下層では灰色粗砂が堆積する。埋土からは縄文時代～中世の遺物が比較的まとまって出土した。そのため埋没時期は中世後期ごろと考えられる。中世後期にはこの付近に中世城郭である花隈城が存在し、この溝が花隈城の堀の一部である可能性が指摘できる。
- SR6101 古墳時代 この時期の遺構は調査地全域で検出されている。主な遺構は、掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝などが挙げられる。特に掘立柱建物は比較的規格性をもって配置されてような状況で検出されている。1・3BLで検出されたような溝は、その形状から区画溝のようなものであった可能性が高い。
- 掘立柱建物 今回の調査で検出された古墳時代の掘立柱建物跡は合計10棟を数える。規模等については表を参照されたい。

遺構番号	桁行×梁間	柱穴規模(cm)		柱間(m)		主軸方向	時期
		直径	深さ	東西	南北		
SB1201	3間×2間～	40~100	50	2.0	1.5	N 30°W	古墳時代後期
SB1202	2間×1間～	50	20~50	2.0	1.5	N 30°W	古墳時代後期
SB1203	2間×1間～	50	10	1.8	1.7	N 30°W	古墳時代後期
SB1204	1間×1間	40~90	40	2.0	2.2	N 25°W	古墳時代後期
SB2201	2間×2間	40~50	20	1.5	1.3	—	古墳時代後期
SB3201	3間×2間	60	30~40	1.3	1.6	N 30°W	古墳時代後期
SB3202	3間×1間～	60	30~40	1.3	1.6	N 30°W	古墳時代後期
SB5201	3間×1間～	40	—	1.7・2.7	1.7	—	古墳時代後期
SB6201	5間×1間～	40~60	13~30	1.3~1.4	1.3	N 30°W	古墳時代後期
SB6203	2間×1間～	40~60	30~40	1.7	1.3	N 30°W	古墳時代後期
SB6204	2間×1間～	30~70	30~40	2.0	2.0	N 30°W	古墳時代後期

表8 古墳時代掘立柱建物

竪穴住居 SX3204	3 B L 中央部で検出した。やや不整形な方形を呈する竪穴住居と考えられる。東辺は約5.0m、西・南・北辺は4.0m、壁高20cmを測る。SD207・208と切り合っている。底面は平坦で、周壁溝は確認されなかったが、土坑1基、ピットを数基検出した。埋土は灰褐色粘質土で、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土している。
SB6202	6 B L 中央で検出した。東西辺3.5m、南北辺4.0m、壁高10cmを測る。床面はほぼ水平で、叩き締めたような痕跡は確認されなかった。4本柱で、炉・カマド・周壁溝は検出されていない。柱穴は直径30～70cm、深さ20cm前後を測る。埋土は黒灰色砂質土が主体で、古墳時代の須恵器・土師器と小型の携行用と考えられる砥石が出土した。
弥生時代	主に1 B L・4 B L・5 B Lで遺構を検出した。主な遺構は竪穴住居・方形周溝墓・土坑・集石・ピットが挙げられる。
竪穴住居 SB4201	南半中央に位置する。直径6.0m、壁高0.2mを測る円形の竪穴住居である。中央土坑、周壁溝、ピット8基をもつ。部分的ではあるが、放射状に拡がる炭化材を検出しておらず、焼失住居であると考えられる。また、周壁溝が南東側で壁面に沿っていないことから、住居を一部拡張した可能性が考えられる。また、貼床などの痕跡は見られなかった。
SX5304	中央土坑は直径1.2m、深さ0.3mを測り、断面は緩やかなU字状を呈する。柱穴は、直径40cm前後、深さ10～15cmを測る。床面北東に弥生時代中期の甕がつぶれた状態で出土している。また、床面西に1辺30cmほどの台石と考えられる花崗岩製の平石も出土している。炭化材のサンプル取り上げを実施している。分析の結果、いずれの木材もコナラ属アカガシ属で、強度の強い木材を選択して使用していたことが判明した。
方形周溝墓 ST4301	南側を搅乱によって削平されているが、東壁面で深さ0.2mを測る。底面は平坦で、直径0.2～0.3m、深さ0.2mのピットを5基検出している。埋土は暗灰褐色石混じり粗砂質土、暗灰褐色炭・石混じり粗砂質土、灰青色石混じり粗砂質土である。周壁溝がめぐり、北側の立ちあがりが急であることから、住居の可能性が考えられる。復元すると直径約10.0mを測る。縄文時代後期の土器が出土している。しかし周辺のピットから弥生土器が出土していることや、4 B Lで弥生時代の住居などが検出されていることから、現状では弥生時代のものとして報告する。
集石遺構	1 B L 西部で検出した。南北約7.0m、東西約4.0mの範囲で多量の拳大から人頭大の礫と共に、後期の縄文土器・石鎌、中期の弥生土器、叩き石、石錘、石包丁などが出土地した。礫や土器は緩やかに傾斜する地形の上に投棄されるように検出された。礫の堆積は厚みなく、比較的短期間の堆積であったと考えられる。遺構の形態からは縄文の集石遺構のよう

ではあるが、弥生時代中期の土器が多く出土することから、弥生時代のものであると考えられる。

#### 縄文時代

主に1BL・2BL・5BL・6BLで遺構を検出した。主な遺構は土坑・落ち込み・ピットが挙げられる。遺構がもっとも多く検出されたのが、2・5BLで、特に2BLでは縄文時代の遺構面が3面検出されている。また、2BLの南側には縄文土器が比較的まとまって出土する浅い土坑が集中して検出されている。

#### 土坑・落ち込み

SX1401

1BLで検出された直径約1.8m、深さ70cmの不整形な土坑である。若干北側にオーバーハンプしておらず、炭粒が混じった暗オリーブ灰色シルト～砂質シルトが堆積する。縄文土器・石鏸・サヌカイト片が出土した。遺構の形状から貯蔵穴のようなものと考えられるが、堅果類の種子などは出土していない。

SX5301

5BL南部で検出した。南側は調査区外へ拡がる。底面は北から南へ緩やかに傾斜しており、褐灰色石混じり砂質土が堆積していた。南壁面で深さ0.3mを測る。底面では土坑2基、ピット9基を検出した。ピットのうち3基は直径0.2mを測り、埋土が3基ともに灰褐色砂質土である。この落ち込みからは縄文時代後期の土器が多く出土しており、遺物包含層と考えるには土器片に摩滅が少なく、破片も大きいことから、住居の可能性が考えられる。また、土器と共に石鏸なども出土している。

SX2301

2BL中央で検出した。上層は一辺約3.0m、深さ1.4mを測るやや不整形な方形を呈し、さらに北半底面には長辺2.2m、短辺1.7m、深さ0.7mを測る不整形な長方形を呈する落ち込みが確認できる。北側と東側が搅乱により削平されている。下層の長方形状を呈する底面は、北辺袋状土坑状を呈し、肩は急にたちあがり、南辺は緩やかなU字形を呈する。形状や土器の出土状況から貯蔵穴のようなものではなく、何らかの祭祀遺構と考えられる。縄文時代後期後葉の遺物がまとまって出土している。

SX2302

2BL東南端で検出した。不整橢円形を呈し、長径2.8m、深さ10cmを測る。縄文時代後期の遺物が出土している。土壤水洗を後日実施しており、サヌカイト製石鏸・サヌカイト剥片・骨片・ヒスイ製の小玉等が出土している。ヒスイは新潟県糸魚川流域で産出された

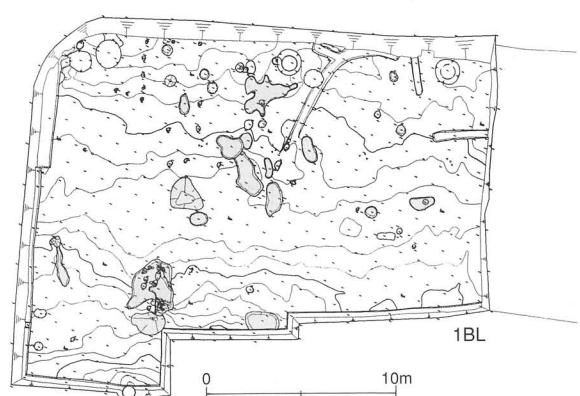
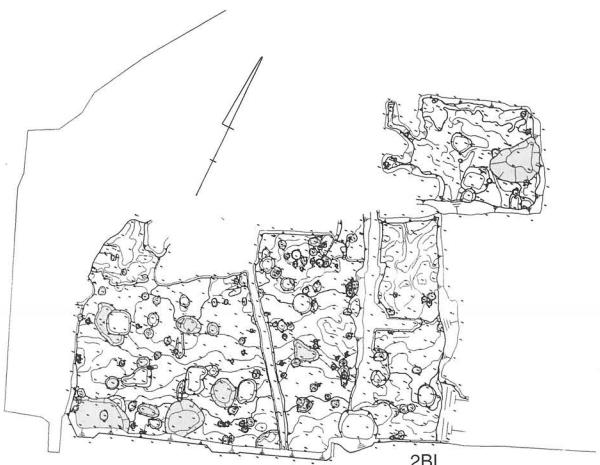


fig.56 縄文時代後期遺構面（下層1）

ものと考えられ、北陸地方からの搬入品と考えられる。

#### SX6201

6 BLで検出した最大長4.3m、最大幅2.5m、深さ1.3mを測る不整形な土坑である。西側・南側の壁面は、なだらかなで、一方北側・東側の壁面は比較的急な傾斜を形成する。底面は、中央がもっとも深く、東側に一段高く、テラス状の平坦面を形成する。埋土は大きく2層に別けられる。上層では暗



fig.57 繩文時代後期遺構面 (下層2)

2BL  
10m

茶灰色系の粘質土が、下層では灰色～灰黄色の粗砂が堆積する。縄文土器・石鎌・サヌカイト片が出土した。遺構の形状からSX2301と同様の性質を持つ遺構であると考えられる。

奈良時代～中世は、掘立柱建物1棟・柵列1条・井戸・鋤溝など検出している。遺構の分布は3・4 BLといった北側に偏りを見せる。このことからこの時期の中心は調査範囲内北側にあったものと考えられる。また、1・4 BLの耕作土・包含層などから輪羽口の破片が出土している。また、平成18年3月に現NHK放送局北側のマンション建設用地で行なった発掘調査においても同様の遺物が比較的まとまって出土しており、周辺で鋳造関連の遺構が存在した可能性が高い。周辺には奈良時代の鍛冶関連遺構を検出した二宮遺跡が存在する。

#### まとめ

#### 奈良時代～

#### 中世

#### 古墳時代

古墳時代後期は、掘立柱建物が12棟、竪穴住居2棟、柵列2条他多数の溝・土坑・ピットが検出されている。掘立柱建物群は大きく1 BLを中心とした南建物群と、3 BLを中心とした北建物群に別けることができる。前者は、逆L字型に整然と配置されているように見え、倉庫群のような様相を見せる。一方後者は、逆凹字型に配置され、これら建物に囲まれた場所は広場状を呈している。北側の建物群を倉庫とするならば、南側の建物群は居住用の建物と推定される。

このような規格性を持った建物配置は、古墳時代の豪族居館や古代における官衙関連遺跡との共通性を見出せる。現状からは倉庫群は3棟前後の1単位にして間隔を置いて建てられたものと推察される。生田遺跡の東には生田古墳群が存在していたと伝えられており、この古墳群との関連も強いものと考えられる。

#### 弥生時代

弥生時代は円形竪穴住居と方形周溝墓などが検出されている。時期的にはやや、住居跡が古く中期中葉で、方形周溝墓が中期後葉に属するものと考えられる。方形周溝墓から出土した土器は、指かけのための凹みが見られる水差しや、体部に縦位に櫛描直線文を施す壺など他にも他地域の影響と思われる要素を持つ。

方形周溝墓が検出されている遺跡は、近隣では雲井遺跡、楠・荒田町遺跡などがある。これらの遺跡では2基以上がまとめて検出されているが、生田遺跡例は単独で検出されており様相が異なる。確実に単独で存在するか否かは、周辺の調査事例を待たねばならない。

## 縄文時代

縄文土器の出土量はコンテナ約100箱（一箱28ℓ換算）に近い。中心となる時期は後期中葉～後期後葉といえる。現在のところ住居址の可能性がある遺構はSX5301のみであり、縄文土器が出土した遺構のほとんどは浅い凹みで、まれにSX2301や、SX6201などの深い遺構が存在する。

縄文土器は、中期の船元式・里木式、後期前葉の北白川上層式、後期中葉の一乗寺K式、後期後葉の元住吉山式、後期末の宮滝式がある。船元式・里木式・北白川上層式については2BL・6BLの遺物包含層から出土しているのみである。SK2204は絡げ縄や、6字状文など古相を示す文様が見られ、一乗寺K式の一括資料である。SX2201からは一乗寺K式～元住吉山I式の土器が比較的まとまって出土している。これらの縄文土器は、縄文時代後期の編年研究上重要な資料といえる。

石器については、石鏸・楔形石器・石匙・石錐・削器・叩石・凹石・石皿・打ち欠き石錘、磨石などが出土している。石鏸は200点を越える。使用されている石材はサヌカイトで、金山産のものが主体を占めるものと考えられる。大小の剥片や石核も出土しており、石器生産が行なわれていた可能性が高い。

また、特殊な遺物としては、土偶・ヒスイ製小玉が挙げられる。土偶は東海地方に分布の中心を持つ「今朝平タイプ」と呼ばれる後期土偶の典型的な形態をもつ。このような後期土偶は兵庫県下では淡路島の佃遺跡で出土しているのみである。また、ヒスイは岩石鑑定から糸魚川流域産と判明している。

なお調査の詳細については、既刊の『生田遺跡第4次発掘調査概要』をご参照されたい。



fig.58 調査区全景

## 11. 花隈城跡 第2次調査

花隈城は、摂津国守護和田惟政によって永禄11年（1568年）に築城された城郭・城館である。その後荒木村重の離反により攻撃を受け、天正2年（1580年）に落城となる。その後、石垣は兵庫城の石垣に一部転用されたと伝えられている。

花隈城の内部については、岡山大学の池田文庫に『攝津国花熊之城図』が存在しており、それから城の様子を垣間見ることができる。内部は堀によって三分割されていたようで、城を中心東には侍町・足軽町を、西には町屋を配する。この地図を現代の地図に当てはめると、北は兵庫県庁南の東西の筋、南はJRの高架線、東は神戸生田小学校の東の南北道路、西は花隈町と下山手通8丁目の境の道路と考えられる。

今回の調査地は、西境の堀の付近に位置する。調査地に南接する病院駐車場建設に伴う試掘調査では、近世の堀が確認されている。

### 調査の概要

工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす部分についてバックホーにより盛土・耕作土を除去し、人力により遺物包含層掘削・遺構検出を行った。ただし、今回の調査については掘削深度が2mを超すことが予想されたため、杭間をトレーニチ状に繋げ調査を実施した。

現地表面から1.6～2.3mまで盛土がなされており、1区ではその下層に耕作土と考えられる灰褐色粘質土が堆積する。その下層には落ち込み状の堆積が見られる。1・2区では灰褐色砂質シルトと黒灰色シルトが混じる堆積で、3区では黒灰色砂質土とオリーブ灰色極細砂がラミナで堆積する。

### 1区

南半部については、南東方向に傾斜する落ち込みを検出した。深さは検出面からもっとも深い箇所で40cmを測る。埋土からは須恵器・土師器の小片が出土したため、中世のものと考えられる。



fig.59 調査地位置図

2区

調査区のほぼ全体で近世および中世の落ち込みを検出した。近世の落ち込みは検出長3.5m、深さ1.1mを測る。西肩部のみを検出しており、東方向に大きく2段に落ち込む。埋土からは近世の陶磁器・瓦が出土した。中世の落ち込みはほぼ近世の落ち込みと重複する。2段落ちで埋土からは須恵器・土師器が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。おそらく、1区の落ち込みに繋がるものと考えられる。

3区

この調査区では、明確な遺構は検出されなかつたが、調査区壁面で全体に南に向って落ち込んでいく土層を確認した。この調査区からは遺物は出土しなかつた。

まとめ

今回は平安時代・近世の遺構・遺物を確認した。平成15年度に実施された試掘調査で幅約10mの堀状遺構を確認している。今回検出した落ち込みはこれに\_がるものと考えられ、北方向に長さ70m以上を推定できる。また、現在の地図と『攝津国花熊之城図』を重ねあわせると、ちょうど外堀が今回の調査地にあたる。自然の谷状地形を利用し、城郭の外堀を形成したものと考えられる。

ただし、出土した遺物は平安時代・近世のものが大半で、花隈城が機能していた時期の遺物は出土していない。しかし、旧地形の一端を窺うことができた。

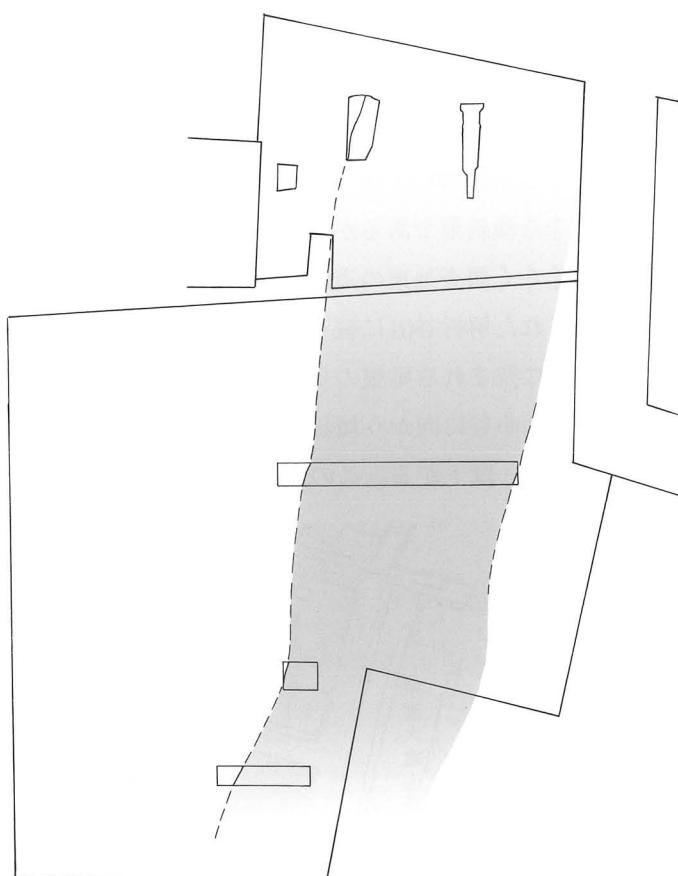


fig.60 堀状遺構復元図

## 12.下山手北遺跡 第2次調査

下山手北遺跡は宇治川左岸、南の平野部を見晴らす丘陵末端に位置する。比較的最近その存在が確認された遺跡で、11年前の震災直後に初めての発掘調査が行われ、その内容が明らかとなった。

当地は西に宇治川が流れ、旧村名に宇治野村の名が残り、摂津国に属したと推測できる。その後、郡域の変更があり、承平年間（931～937）の『和名類聚抄』によると東は生田までが八部郡に属することになった。宇治川右岸は平安時代末期に平家一門が別業を構えた福原庄で、湊川河口付近に大輪田泊がある。福原の地域では1981年の楠・荒田町遺跡の調査以来、雪御所遺跡・祇園遺跡と福原京関連の遺跡が少しづつ確認されるようになっている。

平成7年に行われた下山手北遺跡の第1次調査では、平安時代初め、九世紀の居宅をはじめとして縄文時代から近代までの遺構・遺物が確認されている。

今回の第2次調査は、震災で倒壊した教会跡地に建設されることになった介護老人保健施設の建設により、遺跡が影響を受ける約1200m<sup>2</sup>についてこれを行った。

### 調査の概要

今回の調査地は丘陵上にあたり、基本的に土砂の堆積が少なく、浅い位置で遺構面が検出された。現在の表土である盛り土1a層下に第2次大戦時に罹災した2a層、さらにその下に近世耕土3a層が存在する。SB06付近等、一部に古い表土4a層が遺存するものの、基本的には3a層を除去した段階の1面ですべての遺構面が検出されることになる。地形は基本的には北が高くなる傾斜地であるが、調査区の東部が棚田状に下がることが確認されており、その東、おそらく調査地東の道路部分に小さい谷が入るものと考えられる。これが第1次調査で検出された解析谷01に続く可能性がある。調査地の西側も若干高くなり、西の宇治川と東の小谷に挟まれる尾根のピークは調査地の西側となる。

### 検出遺構

調査地東部は東の小谷に向かう傾斜地となっており、これを利用した段造成の水田がつくられ、西区に比べ一段下がる。このため、古い遺構は残されていない。

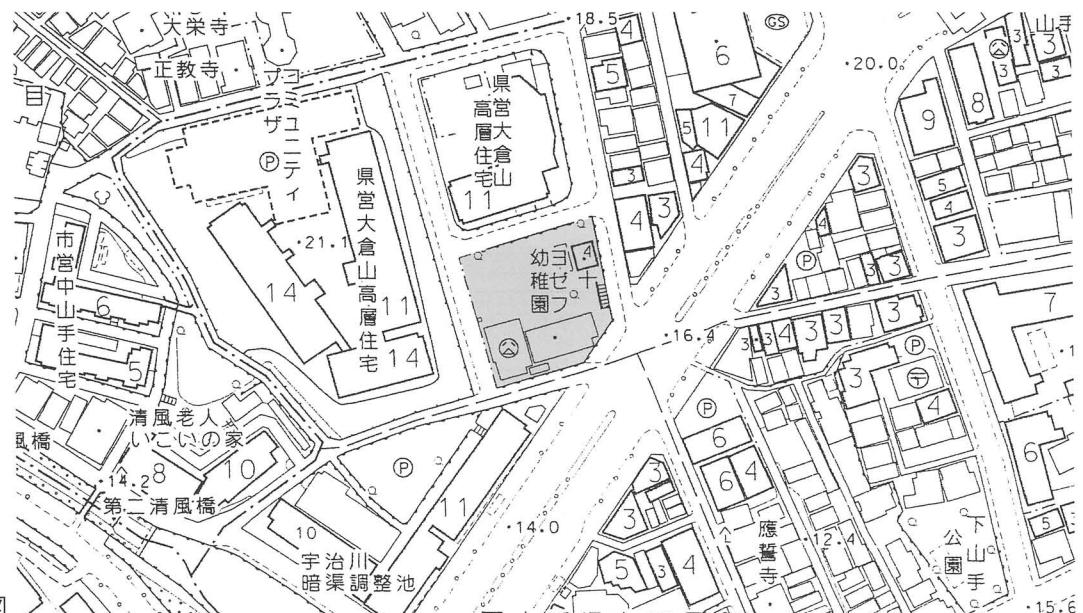


fig.61 調査地位置図

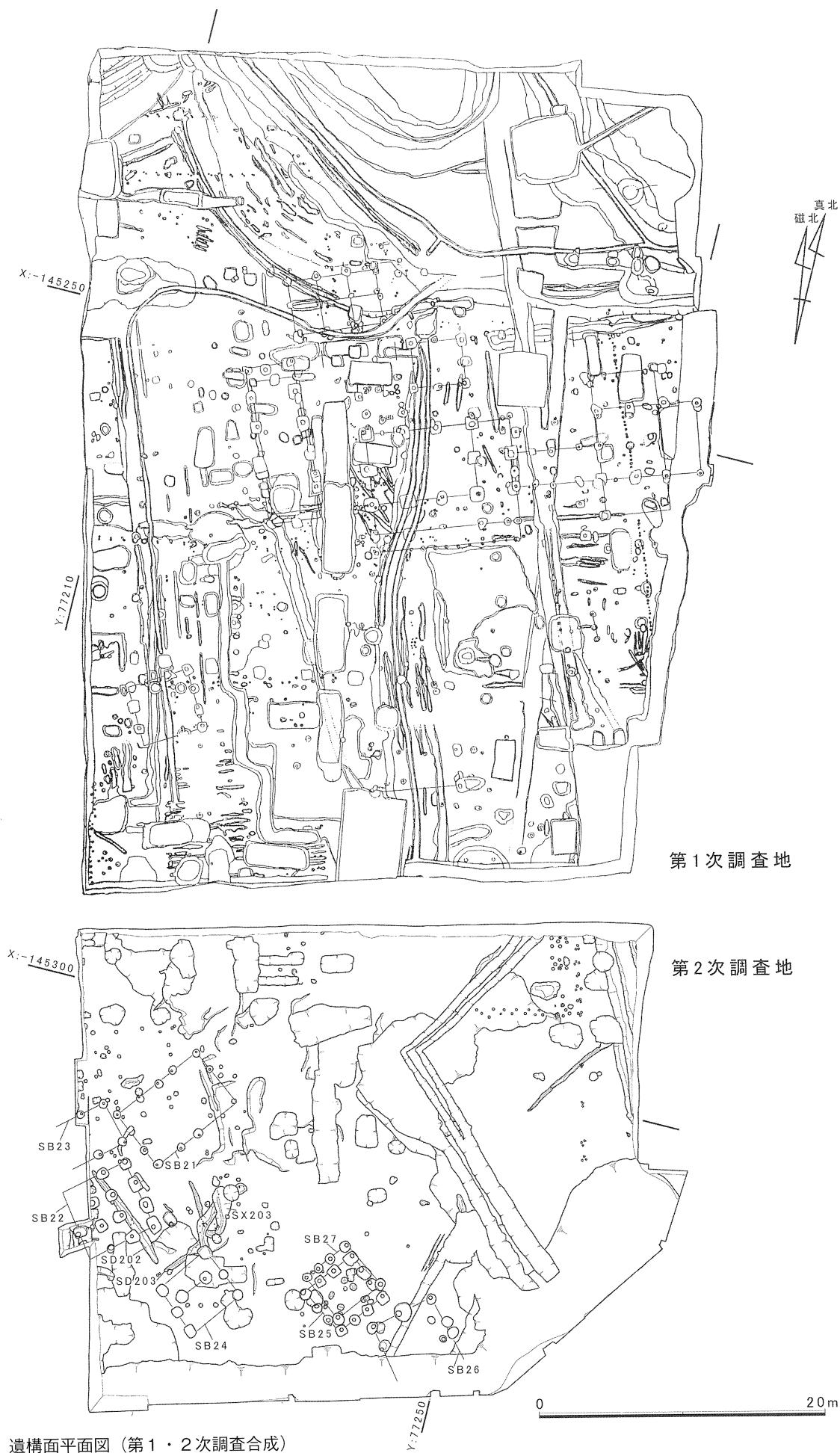


fig.62 遺構面平面図（第1・2次調査合成）

## 西区

一段上がる中～西部も後代の削平が顕著でSB21の柱穴など遺構の上部はかなりの部分が削平されている状況が見て取れる。この傾向は北部ほど、また東部ほど顕著であり、この部分には、削平されて痕跡を残さない遺構が存在する可能性も考えなくてはいけない。南部に行くに従い、柱穴等遺構の遺存度も高くなる。西区では掘立柱建物7棟のほか、土坑・溝などの遺構が検出された。

## SB22

東西3間(5.92m)×南北3間(5.80m)の掘立柱建物。SD23と切り合い関係にあり、SB23が新しい。総柱建物はこれが唯一で主軸をN-39°-Wに取る。一辺70～90cmのプラン隅丸方形の柱穴には柱痕が残り、これにより、径25～28cmの断面円形の柱材であったことが知られる。建物の側柱とその内側の床を支える束柱の柱穴掘形の大きさや柱の直径が同じであることからこの建物は倉であると推測される。この柱穴も掘形・柱痕ともに南東方向に傾く。柱穴内からは飛鳥時代前半の須恵器蓋坏などのほか、魚網用の土錘・鉄滓などが出土した。

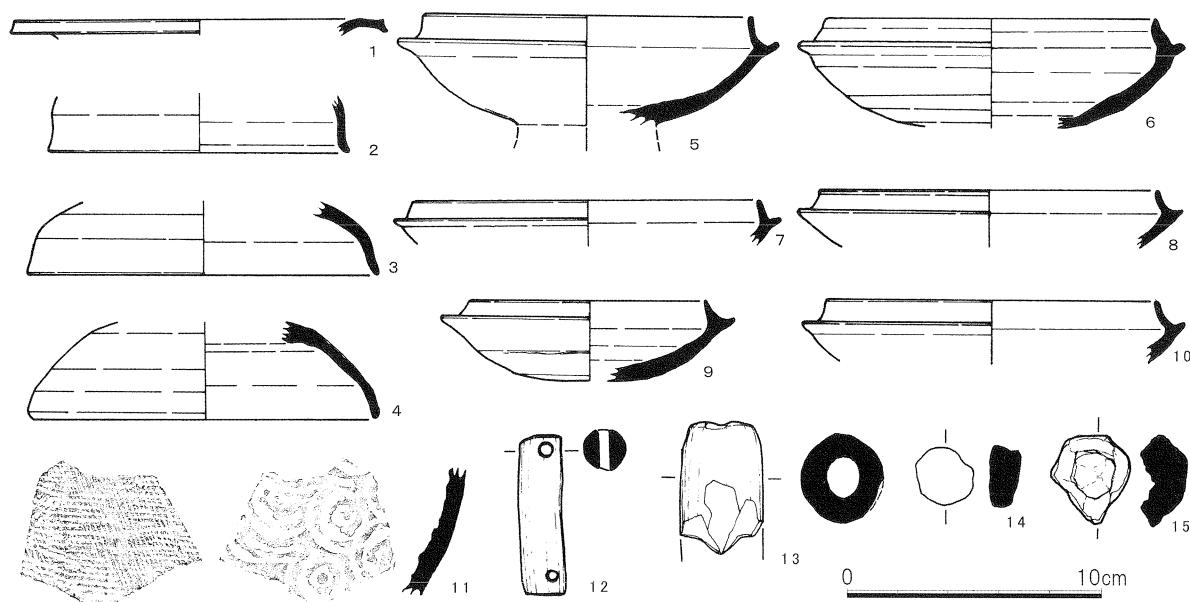


fig.63 SB22 出土の遺物

## SB23

調査区の西にかかる。東西1間(2.32m)以上×南北1間(3.56m)以上の掘立柱建物。主軸方向はN-41°-W。径50～70cm程度のプラン円形の掘形内にはSB21同様柱痕部分に黄色い砂質粘土が入り、径12～15cm程度の断面円形の柱材であったことが知られる。また同様に柱痕はそのほとんどが南東方向に傾く。SB01と主軸方向が少々ずれ、またかなり近い位置にあることからすると、両者は同時に存在しないように見えるが、柱穴埋土の状況は共通している。屋根の高さを違えれば同時存在の可能性もある。

## SB24

東西1間(4.52m)×南北2間(4.28m)の特異な構造の掘立柱建物。柱間が広いため、確認のため、P1・P2間およびP4・P5間を断ち割ってみたが柱穴の存在は確認できなかった。調査区南部にあるこの遺構は残りのよい柱穴で深さ70cmほどをはかり、柱穴が削平により消滅する可能性は低いと考えられ、もともとこのような柱の配列であったと思われる。主軸方向はN-52°-W。一辺80～90cm程度のプラン隅丸方形の柱穴に柱痕は全く存在せず、

また柱を抜き取った形跡も確認できなかった。今回の調査で確認されたほかの建物は柱痕が確認されており、様相が異なっている。この柱穴も南東へ、ややひずむようである。

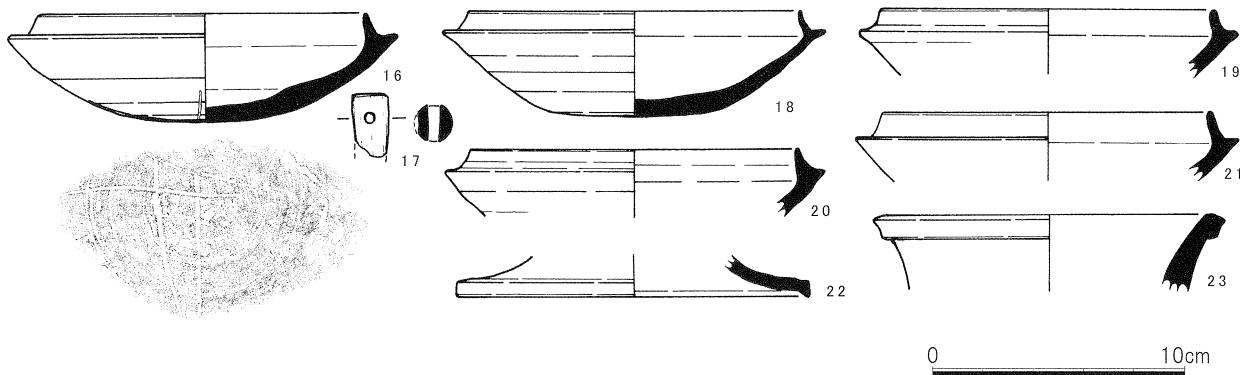


fig.64 SB24 出土の遺物

**SB25** 東西3間(12.1m) × 南北3間(10.9m)の掘立柱建物。SB27と切り合い関係にあり、SB25のほうが古い。残りのよい柱穴で深さ40cmほどをはかる。主軸方向はN-50°-W。一辺70～95cm程度のプラン隅丸方形の柱穴に確認できる柱痕は径20～28cmの断面円形のもの。柱間は芯々間で110cm～170cmだが120cm代の狭いものが多い。柱穴からは飛鳥時代の須恵器・土師器片が出土している。建物内には小柱穴が複数存在する。建物外には確認できないため、SB05・SB07のいずれかにともなうものと推測される。

**SB26** 東西2間(5.36m) × 南北1間(3.48m)以上の掘立柱建物。南部は搅乱により消滅。主軸方向はN-41°-W。他の柱穴が同じプラン円形でも径60～80cmであるのに対して北辺中央の柱穴P1はとりわけ大きく径130cmをはかる。柱痕もP1が径40cm、他は24cmほどと顕著な違いが認められる。P2が棟持柱となる切妻造の建物になると思われる。

柱穴からは飛鳥時代の須恵器・土師器片のほか平安時代前半の坏片が出土している。これが混入品でなければ、この建物のみ平安時代に下る遺構ということになる。

**SB27** 東西3間(4.5m) × 南北1間(4.3m)の掘立柱建物。ほぼ同規模のSB25と切り合い関係にあり、SB25のほうが古い。残りのよい柱穴で深さ45cmほどをはかる。主軸方向はN-54°-W。一辺60～80cm程度のプラン隅丸方形の柱穴に確認できる柱痕は径20～28cmの断面円形のもの。北辺では4本の柱穴が確認されたが、他は南東隅と南西隅の2本だけという特異な構造をもつ。北辺を除く3辺について確認のため断ち割りを行ったが断面でも中間の存在は確認できなかった。北辺の柱間は芯々間で104・112・152cmと狭い。柱穴からは飛鳥時代の須恵器・土師器片が出土している。

**まとめ** 第1次調査で1棟、第2次調査で6棟、計7棟の掘立柱建物が確認された。これらの主軸方位にはN-40°-W前後のものとN-52°-W前後の二者がある。そして出土遺物からその年代はともに飛鳥時代前半であることが確認された。このうちSB25とSB27のように切り合い関係が確認できるものがあり、そのすべてが同時存在したものでないことが明らかである一方、SB21とSB23のように近接し主軸の異なる建物であっても、柱穴覆土の状況が共通していて、同時存在する可能性の高いものがある。

## 倉庫SB22

掘立柱建物SB22は総柱で重量物を支える構造となっており、その用途は倉庫であると推測されるが、その構造・規模は、後の時代の郡衙正倉すなわち郡倉クラスに匹敵する。しかし「評・五十戸制」以前である飛鳥時代前半においてはこれに基づく地方官衙は存在しないのであれば、この建物群は官制以前の地元有力者が関与した施設であった可能性が高い。つまり、このような規模の建物をもつ居宅であるということは、その主が後の時代、中央から派遣された国司の下、地元の有力者から選ばれ地域行政の実務を担う評造・評督に任せられるような地元有力者であった可能性もある。  
こおりのみやつこ こおりのみやつこ

## SB24

このほか注目される建物にSB24がある。この建物は南北が柱間2間、東西が柱間の広い1間という特異な柱の構成をもつが、柱穴の深さも他の建物に比べかなり深く、現状でも70～80cmの深さが残り、本来は1m内外はあったと考えられる。柱穴の深さは地上部分の柱の長さに比例すると考えられ、SB04は背の高い建物であることが推測されるが、この建物の構造を考える上で注目したいのが建物内にある2つの柱穴あるいは土坑SP237・SP238である。これらの並びは建物の軸線に重なるが、柱通りは一致するものがない。となれば建物自体ではなく、建物内部の施設に伴う柱であった可能性もある。

以上、既存の調査等を含め、今回の調査ではここ宇治の地に7世紀・9世紀・12世紀の有力者の居宅が営まれることを確認できた。12世紀段階の「宇治新亭」の「新」が当地における居宅の建て替えを意味するものであればこれ以外にも居宅が存在するということになるし、当地の重要性を考えればそれ以外の時期にも同様の居宅が存在する可能性は高い。花隈城址第2次調査において稜塊が出土していることからすれば花隈城と重なる地点、あるいはその近隣に古代の官的な施設、また有力者の居宅が存在する可能性を考えができるだろうし、それが存在するのであれば、山陽道に直接面する高台という立地が両者にそのポイントを選ばせた理由になると考えられる。



fig.65 調査区全景

## 13. 祇園遺跡 第13次調査

### 遺跡の位置

祇園遺跡は神戸市兵庫区上祇園町周辺にひろがる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この湊川の河口付近にかつて大輪田泊があった。

考古学的には、1981年、ここ平野から600mほど南、平頬盛邸があったと伝えられる荒田の地において二本の堀や大型の掘立柱建物が検出されたのを端緒として、1986年の雪御所遺跡、また1993年に始まる祇園遺跡の発掘調査において、「福原京」にかかる遺構・遺物が継続的に確認されるようになった。

祇園遺跡においてこれまでに行われた発掘調査は12次に及び、2・3・5次調査で確認された平安時代末、福原京の時期の園池は平氏政権の中枢に位置する人物の邸宅庭園と推測されている。

### 調査の概要

第二次世界大戦時の戦災面の下にそれ以前の地表土と思われる薄い土壤化層がある。この下は厚い盛土層で、この下に近世と推定される畠が検出された。さらにその下層で平安時代の遺構面を検出した。

約60cmの盛土の下層に畠が広がっている。畠間の凹んだ部分表面で19世紀前半から中ごろの丹波焼壺が出土しており、埋め立てが行われたのはそれ以降と推定される。

上層の畠耕土3a層下の表土4a層には弥生時代から室町時代までの遺物が含まれるが、主体をなすのは平安時代終わり頃のものである。検出された遺構には池と土坑がある。遺跡の存否を確認することが目的であるため、土坑についてはその存在を確認するに止めたが、池についてはその時代等を確認するため第3トレンチを設定し、調査を行った。



池SG01

第2トレンチと第3トレンチの北部で池SG01の西岸が検出された。池の縁部分をめぐるよう平らな面を上に向けた石が並べられている。この石列は池の埋没がある程度進行した段階で設置しており、基本的に石列をめぐらせた以降の池の堆積物が、上層の黒色砂交り粘土層となる。上層の黒色砂交り粘土層からは平安時代末の時期を中心とする土器片が多く出土している。石列以前と考えられる埋土下層からの遺物出土量は上層に比べて少ない。

SK01

第2トレンチで検出した隅丸方形の土坑で、一辺の長さは180cmを測る。平面での確認に止めたため、出土遺物がなく、時期は不明である。

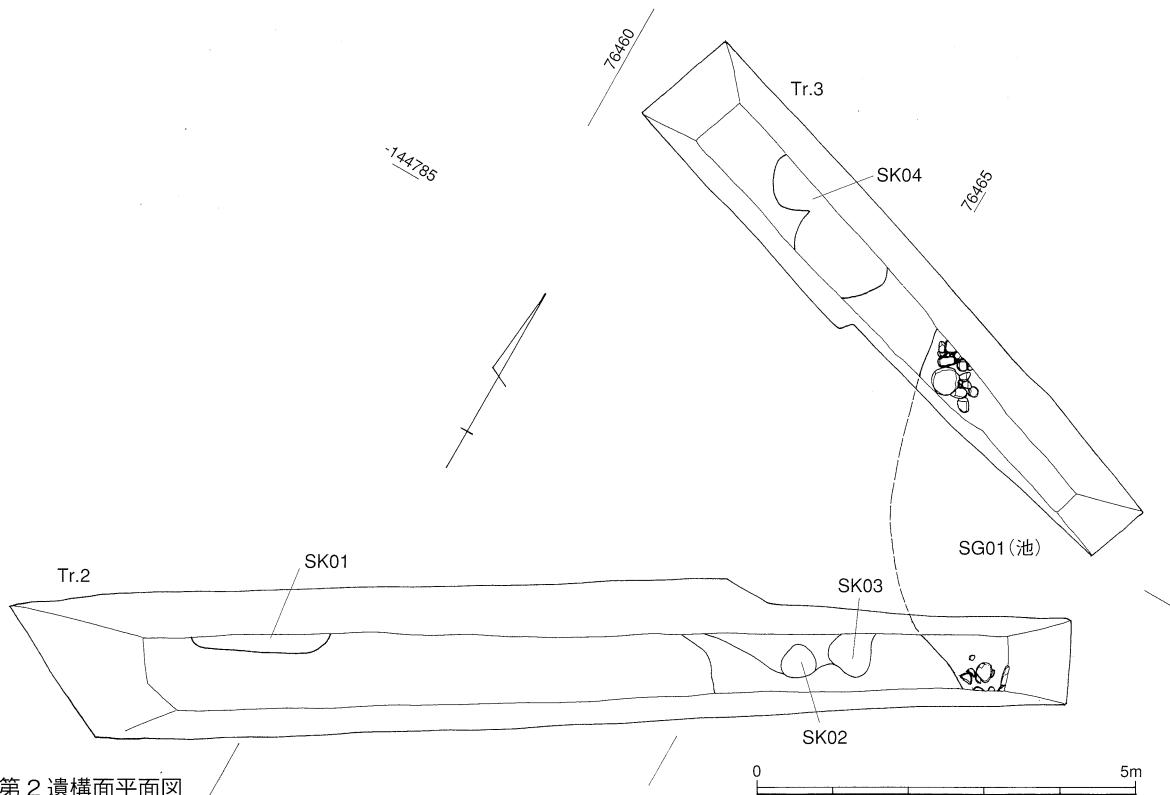
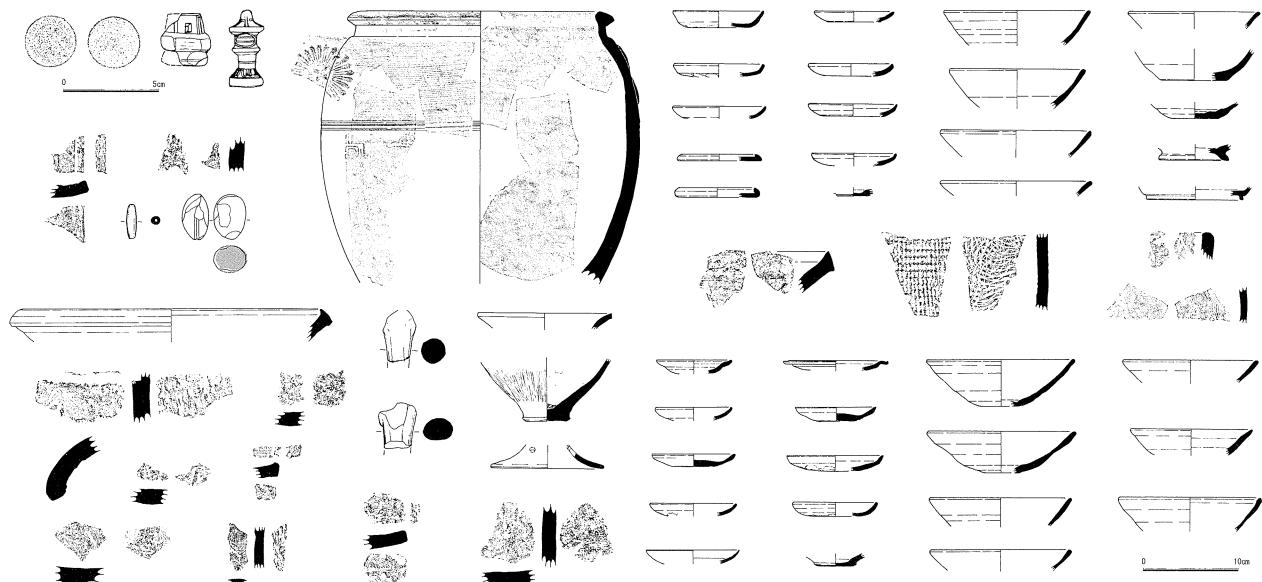


fig.67 第2遺構面平面図



1:3c層、2~8:4a層出土、9~45:5a層、46~51・56~61:SG01上位、52~55:SG01下位出土  
(1:香港銅錢、2・3:石灯籠、4・5・38~40:播磨製瓦、6:土錘、7:石錘、8:丹波焼甕、9:瓦器、  
10~17・26・33・34・46~54:土師器、18~25・27・29・32・55~62:須恵器、28:備前焼、  
30:滑石製石鍋、31:陶器、35~37:弥生土器、41~45:山城製瓦)

fig.68 出土遺物実測図

## まとめ

今回確認された池は、調査地の東に広がるものと考えられるが、その規模は不明である。時期については、調査範囲がごく一部であるため、確定はできない。池の堆積土からは、小破片ばかりだが比較的多くの土器が出土している。これらの土器の時期は、12世紀後半の遺物の割合が高いものの、少量ではあるがそれよりも古い12世紀前半、さらにそれをさかのぼる時期に属している。このことから、この池が機能していた時期が平安時代末頃であれば、福原京に関連する遺構である可能性もある。



fig.69  
第3トレンチ第2遺構面



fig.70  
第2・3トレンチ第2遺構面

## 14. 楠・荒田町遺跡

楠・荒田町遺跡は、六甲山南麓の宇治川右岸に位置し、旧湊川東岸の六甲山系から派生する丘陵端部の段丘上に立地する遺跡である。昭和52年度に市営地下鉄山手線建設工事に先立つ工事立会により、その存在が確認された。昭和53年度に実施された発掘調査では、弥生時代前期～中期を中心とする竪穴住居、貯蔵穴等の遺構、また、銅鐸の鋳型等を含む多くの遺物が検出された。弥生時代における西摂地域の拠点集落のひとつで、出土土器は弥生時代前期～中期の当地域の基準資料となっている。これまで30数次におよぶ調査から弥生時代前期の貯蔵穴、中期の竪穴住居・方形周溝墓等の遺構が多数検出されている。



fig.71 調査地位置図

## 1. 第34次調査

### 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。工事掘削影響深度はG.L.-1.1mで、重機・人力掘削を行うとともに残土処分を実施している。

調査地は北から南に傾斜しており、遺構面での比高差は0.15mであった。上層より、盛土・搅乱ののち、灰色砂質土、暗橙灰色砂質土、淡灰色砂質土、灰茶色砂質土、淡灰褐色砂質土、暗橙色砂質土と旧耕土層と床土層の互層ののち、暗褐色砂質土（遺物包含層）、茶褐色砂質土（遺構面）であった。遺物包含層は厚さ5cm～10cmを測る。

### 検出遺構

調査区は北から南に傾斜しているため、北側の遺構は削平されている可能性が考えられ、検出した遺構は南に集中している。弥生時代後期の溝1条（SD01）、柱穴2基、中世の溝2条（SD02・03）、落ち込み1基（SX01）、柱穴13基を検出した。

### SD01

北西方向から南東方向に検出した。幅0.8m、深さ0.2mを測る。断面は緩やかなU字状を呈し、埋土は暗褐色砂質土であった。弥生時代後期の土器片が少量出土している。

### SD02・03

東西方向に並列して検出しており、鍬溝痕である可能性が考えられる。幅0.3m、深さ0.1mを測る。SD03からは完形の土師皿1枚が伏せた状態で出土している。

### SX01

調査区の南西隅で検出した。深さ0.25m、埋土は淡灰褐色炭混じり砂質土である。鎌倉時代の土師皿がまとまって出土している。

柱穴は遺物をほとんど含んでいないが、埋土から弥生時代のものと中世のものに分けることができた。中世の柱穴は調査区外へと拡がる掘立柱建物になる可能性がある。

### まとめ

今回の調査は、個人住宅建設に伴う調査であったが、ほぼ全面調査であったため、遺構の広がりを面的に調査することができた。これまでの調査からは、遺構は希薄であろうと考えられた調査地であったが、中世の遺構が多く見つかり、遺物も落ち込み（SX01）から多く出土している。遺構の詳細な時期については、遺物整理が進んだ段階で言及したい。

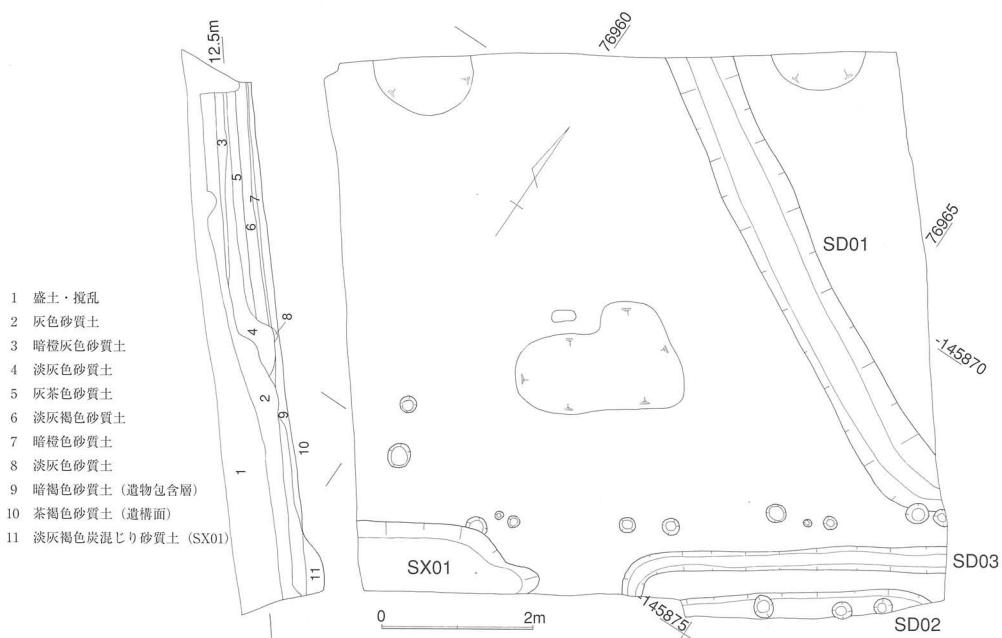


fig.72 遺構面平面図・断面図

## 2. 第36次調査

調査の概要	調査地の基本土層は地表面から1.1～1.3mまでが、盛土、旧耕土・床土層で、この下層が遺構面の灰褐色細砂層である。この上面には調査区の南西側の一部では、遺物包含層である暗褐色砂質シルトが遺存していた。遺構面のベース層である灰褐色細砂とその下層の淡青灰色砂混シルトには弥生時代の遺物が多く含まれるが、これより下層は砂層を中心とする堆積層で遺構面の確認はできない。調査区の南西側では、地表面から2m前後で検出される灰色粗砂から縄文時代晚期頃の遺物が出土した。
SB101	遺構面である灰褐色細砂上面からは、掘立柱建物1棟、溝1条、井戸1基、土坑3基、ピット7基を検出した。その多くは北半部からの検出である。
SD101	調査区の北半部で検出した掘立柱建物である。東西4間、南北2間分を検出したが、調査区外の北側へと続く以外に、東西へ続く可能性も考えられる。柱間は東西では2.3mを主体として2.1m～2.3mで、南北ではほぼ2.5mである。柱穴の直径は0.3m前後で、深さは検出面から0.14～0.32mである。出土遺物は微細な土師器、須恵器が出土している。
SE101	調査区の北半部東側で検出した幅0.88m～1.2m、深さは0.3m前後の、北西から南東へ向かう溝である。埋土はシルトと細砂層による堆積で、比較的流れを伴うものであったものと推定される、出土遺物は平安時代頃と考えられる須恵器蓋のつまみ部分、土師器などが出土しているが、いずれも微細なもので時期の特定は困難である。
SK101	調査区の北半部北西角で検出した。掘形の直径1.26m、検出面からの深さ0.38mで、調査区の北側へと続く、掘形内には直径1.0mで木質の痕跡がわずかに確認された。これらの形状から井戸であると考えられる。微細な土師器片が出土している。
ピット	調査区の南半部中央で検出した長径2.75m、短径2.4mの不定形な土坑で、検出面からの深さは0.26mである。鎌倉～室町時代頃のものと考えられる完形品の土師器皿1点の他、土師器、須恵器が出土した。
下層	遺構面の調査完了後、工事影響深度までの掘下げを開始した。まず設計GL-1.75m（梁底）まで掘下げ後、基礎、エレベーターピット部分（設計GL-3.0m）の掘削を行なった。梁底部分までの掘削では遺構面のベース層である灰褐色細砂、その下層の淡青灰色砂混シルトから弥生土器、石鏸、サヌカイト、チャート片などが出土したが、遺構面の存在は確認できなかった。これより下層は砂層の堆積であり、基礎、エレベーターピット部分で6ヶ所の断面掘削を行なった結果、西側中央と南西角の2ヶ所の灰色粗砂層から縄文時代晚期頃のものと考えられる、縄文土器片数点が出土した。
まとめ	今回の調査では1面の遺構面を確認し、掘立柱建物、土坑を始めとする遺構を検出することができた。遺構の詳細な時期については出土遺物の整理を待ちたい。調査完了時点での見解では、掘立柱建物SB101は出土遺物が微細であるため、時期の特定は困難であるが、SB101の柱穴は、平安時代頃と考えられる須恵器の出土したSD101の埋土の上から切り込んでおり、SK101、SP103から鎌倉～室町時代頃の遺物が出土していることから、概ね鎌

倉～室町時代頃の時期が考えられる。

下層については土層の堆積状況から調査区の大半が河道内に位置しているものと推定されるが、工事影響深度内の調査のため、河道の肩の確認はできなかったが、北東角の基礎部分の断面で暗黄灰色シルトを主体とした安定した堆積状況が確認された他は、すべて砂層の堆積が確認された。調査区から西側の旧湊川流路の方向には、北西から南東方向へ向かう河道の存在が推定される。出土した縄文時代、弥生時代の遺物はこの河道の堆積砂と共に流入したものと考えられ、多量の砂から幾度かの洪水も示唆される。河道の埋没後に中世の遺構が営まれたものと考えられる。

これまでの楠・荒田町遺跡の調査では、遺跡内の南西部にあたる当調査区付近では明確な遺構の存在が知られておらず、建物を伴う遺構の存在の確認は大きな成果と言えよう。

今後の調査データの集積により、集落と旧河道との関係も明らかになるものと思われる。

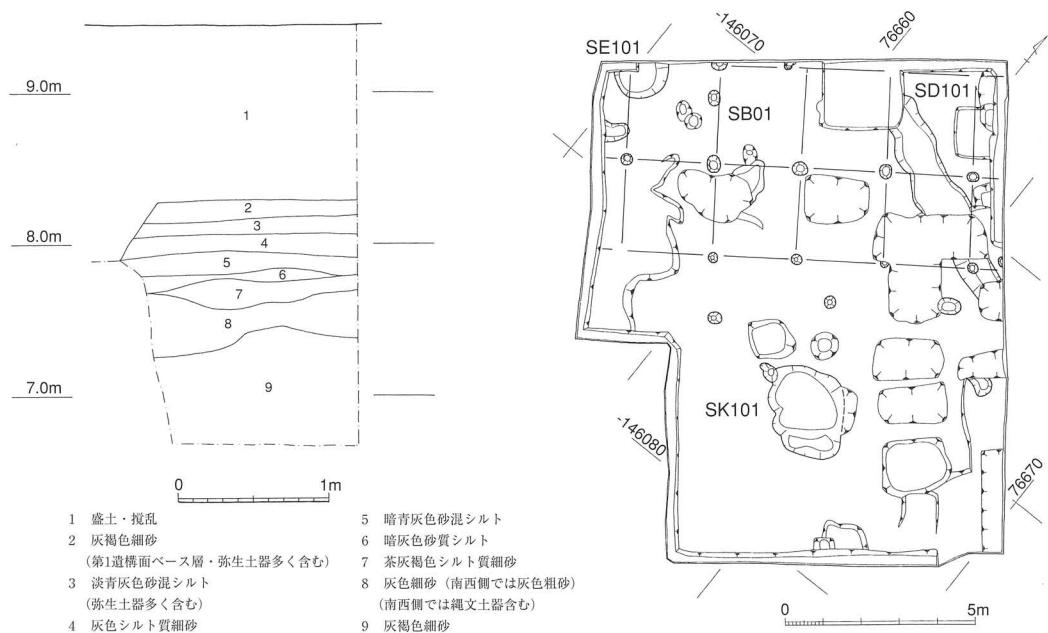


fig.73 遺構面平面図・断面図



fig.74 調査区全景

### 3. 第37次調査

#### 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

調査は残土置場の確保の関係上、2分割の反転調査で実施し、先に開始した西半部を1区、東半部を2区とした。

調査地の基本土層は地表面から1.2m前後までが、盛土、旧耕土・床土層で、この下層の灰褐色シルト質細砂の上面が第1遺構面である。これは第2遺構面の遺物包含層で、この下層の淡黒褐色シルトの上面に第2遺構面が検出される。この淡黒褐色シルトは第3遺構面の遺物包含層である。そして、この下層の淡緑灰色シルトの上面で第3遺構面が検出される。但し、調査地は東から西への緩斜面地に位置するものと考えられ、1区の西半部では第1・2遺構面が検出されたが、東側では後世の削平を受けており、第1・2遺構面は検出されず、淡緑灰色シルト上面で同一に遺構が検出された。また、ベース層である淡緑灰色シルトには調査区北側角から南側角に向かって、砂層が帯状に存在しており、旧河道であると考えられる。

以下、検出した主要な遺構について述べる。

#### 第1遺構面

溝 第1遺構面からは溝8条、土坑22基、ピット45基、落ち込み5ヶ所を検出した。

1区で北西から南西方向の近世の濠状の遺構を検出した他、北西から南東方向の溝、1区南西角で南北方向の河道状の落ち込みを検出した。

#### 土坑

1区の西半部に集中して0.6m～1m前後の土坑が検出された他、2区ではSK120から焼土、炭と共に多量の遺物が出土した。

#### SK120

2区東半部ほぼ中央で検出された。北西側は調査区外へ続き、南西は搅乱に切られているため、全体の規模は不明である、幅2.3m、検出面からの深さは0.35m前後で、上部から0.2mまでの深さに焼土、炭と共に土師器皿、丹波焼と考えられる壺、甕等を始めとする陶器、瓦質の羽釜などが多量に混入した状況で出土した。

#### 墓

ST101は1区西角で検出した直径1.15m前後の土坑で、掘形内部に曲物或いは、桶状の容器を数個重ねていた痕跡が認められる。出土遺物は土師器皿、陶器等と共に、5点の銅錢が出土した。すべて北宋銭で淳化元寶（初鑄990年）、皇宋通寶（初鑄1039年）2点、元豐通寶（初鑄1078年）政和通寶（初鑄1111年）である。銅錢の出土から墓である可能性が考えられるが、骨片などは検出されなかった。

#### 落ち込み

1区を中心に直径3m前後の内部に人頭大の石が投棄された落ち込み状の遺構が4基検出された。これらの中でSX104は北西側は調査区外へ続くため、全体の規模は不明であるが、幅3m、検出面からの深さ0.43mの土坑で、埋土中には人頭大の石が混入していた。埋土中からは土師器の皿、瓦質の羽釜、陶器が出土した。

その他の落ち込みからも同時期の土師器、陶器、羽釜が出土し、SX101からは北宋の銅錢2点（元豐通寶〔初鑄1078年〕、元祐通寶〔初鑄1086年〕）が出土している。

この他2区東端部で、東側へ続く大きな落ち込みを検出した。

#### ピット

検出されたピットは直径0.2～0.5mの規模で、建物等を構成するものは確認できない。

#### 第2遺構面

第2遺構面では、掘立柱建物1棟、井戸3基、土坑1基、ピット1基を検出した。

**掘立柱建物** SB201は1区西半部南寄りで検出した掘立柱建物で、東西2間、南北2間分を検出した。北東側は近世の濠状遺構に切られており、南側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。柱穴の直径は0.2～0.4mで、主軸を27°東に振る。出土遺物が微細なため時期の判定は困難である。

**井戸** 3基の井戸は、井側に曲物を組み合わせた2基(SE201、203)と、上半部は石組みで、下半部に桶を組み合わせた1基(SE202)を検出した。

SE202は2区北西角で検出した、直径2.7m前後のやや方形を呈する掘形の井戸である。北東側と南東側を搅乱に切られ、北側は調査区外へ続く。井戸掘形断面は漏斗状で、検出面からの深さは2.35mである。井側は上下2部構成で、上部は石組井側、深さ0.9mまで、0.3～0.4m前後の石を組んでいる。下部井側は2～3段に直径0.7mの桶を組む、木組円形桶側である。桶は腐朽により、塗膜状となり部分的に遺存している状況であった。井側内から完形の土師器皿5点が出土した他、井戸掘形、井側内から土師器、須恵器、陶器、青磁、羽釜等が出土している。

SE203は2区ほぼ中央で検出した、長径3.3m以上、短径2.3mの楕円形状の掘形を呈する井戸で、井戸掘形断面は漏斗状である。検出面からの深さは2.3mで、掘形底から直径0.5m、0.6m、0.7mの桶を3段に組んで井側としており、断面観察から、元来はもう1段存在した可能性が考えられる。SE202と同じく桶は腐朽により、塗膜状になって部分的に遺存している状況であった。井戸掘形、井側内から土師器皿、甕、須恵器鉢、陶器、青磁、羽釜等が出土している。

**第3遺構面** 第3遺構面では、調査区の中央部から、土坑4基、ピット10基を検出した。遺構は第1、2遺構面と比較をすると疎らである。

土坑は0.5～0.7m前後の円形で、土師器、陶器等が出土している。ピットは建物等を構成するものであるかは、認められなかった。

**まとめ** 今回の調査では3面の遺構面を確認し、掘立柱建物、井戸、土坑を始めとする多くの遺構を検出することができた。しかし、出土遺物は整理が完了しておらず、また、調査区の東半部では各遺構面の遺構が同一面から検出しているため、遺構の詳細な時期、帰属の検討については出土遺物の整理を待ちたい。

第1遺構面からは調査区の西半部を中心に多くの遺構を検出した。遺構の分布は濃密であるが、建物は認められない点から、調査地近辺に集落本体が存在するものと考えられる。

第2遺構面からは1区南西角で掘立柱建物1基を検出した他、3基の井戸を検出した。特に井戸は埋没旧河道を選地して掘削されており、湧水、掘削の容易な点から選地されたものと考えられる。掘立柱建物の時期は、出土遺物が微細なため判定が困難であるが、検出状況から井戸とほぼ同時期であるものと考えられる。

第3遺構面の遺構は、上層に比べて非常に疎らであった。上層の遺構により消滅したものと考えても、その数は少ない。

出土遺物は室町時代のもので、概ね14世紀後半～15世紀前半の範囲に属するものと考えられ、各遺構の出土遺物からそれぞれ第1遺構面の遺構は15世紀前半、第2遺構面は14世紀末葉～15世紀前半、第3遺構面は14世紀後半頃の時期が考えられる。

中世の遺構については、調査地の北西約150mの地点で、今年度調査を実施した第36次調査で鎌倉～室町時代のものと考えられる掘立柱建物が検出されているが、今回の調査では多量の遺構、遺物が検出されており、楠・荒田町遺跡の南西部の様相を考える上で貴重なデータと言えよう。また、第36次調査では旧河道の埋没砂の中から、縄文時代晚期、弥生時代の遺物が出土しているが、今回の調査では、旧河道内からは共に確認されなかった。縄文時代、弥生時代の集落域の縁辺部にあたるものと推定される。



fig.75 SE202 断ち割り状況

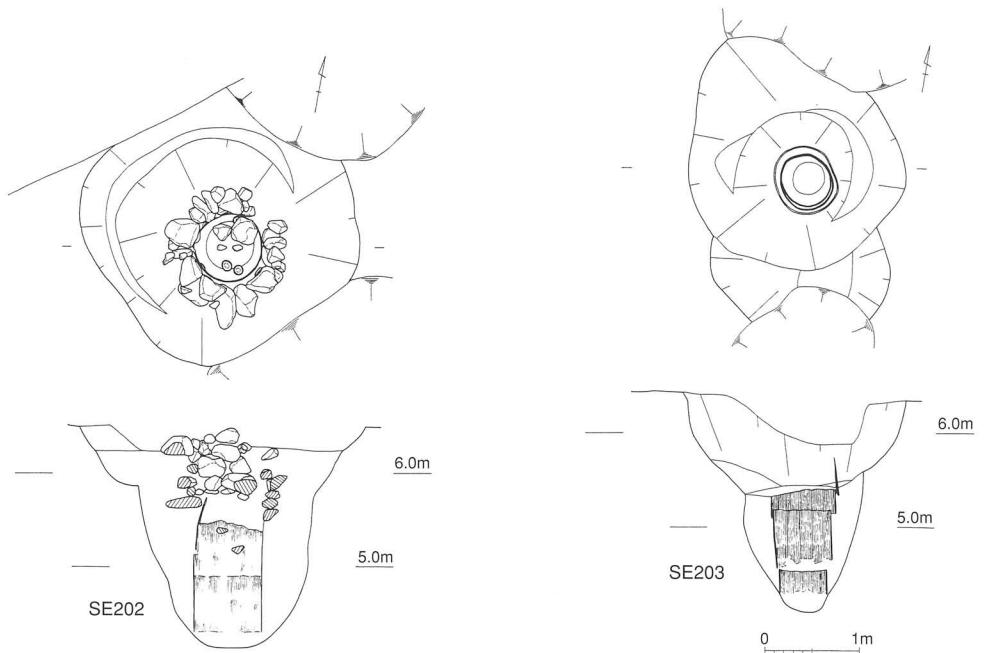


fig.76 井戸平面図・断面図

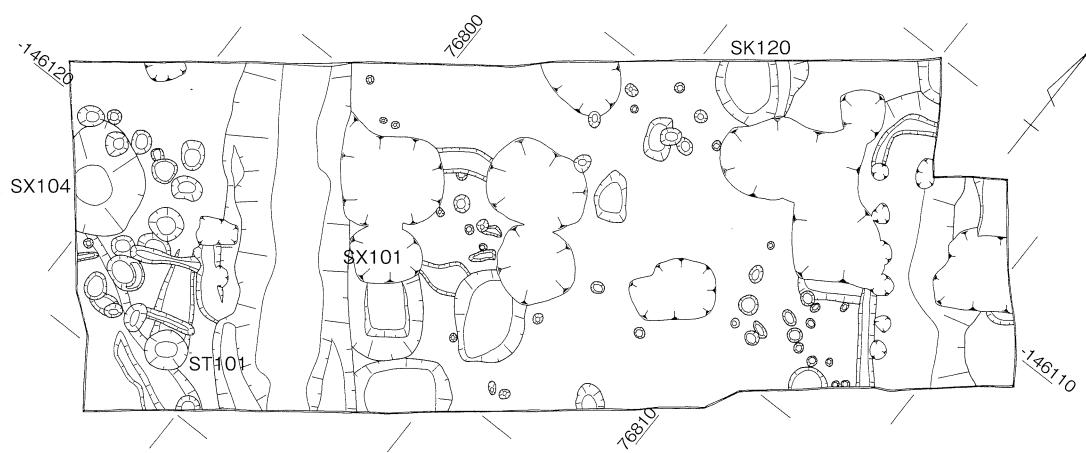


fig.77 第1遺構面平面図

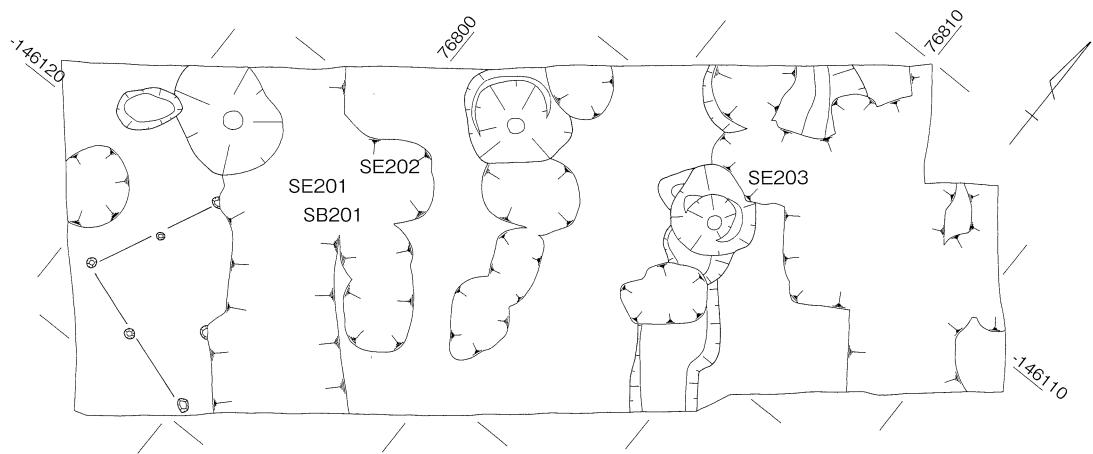


fig.78 第2遺構面平面図

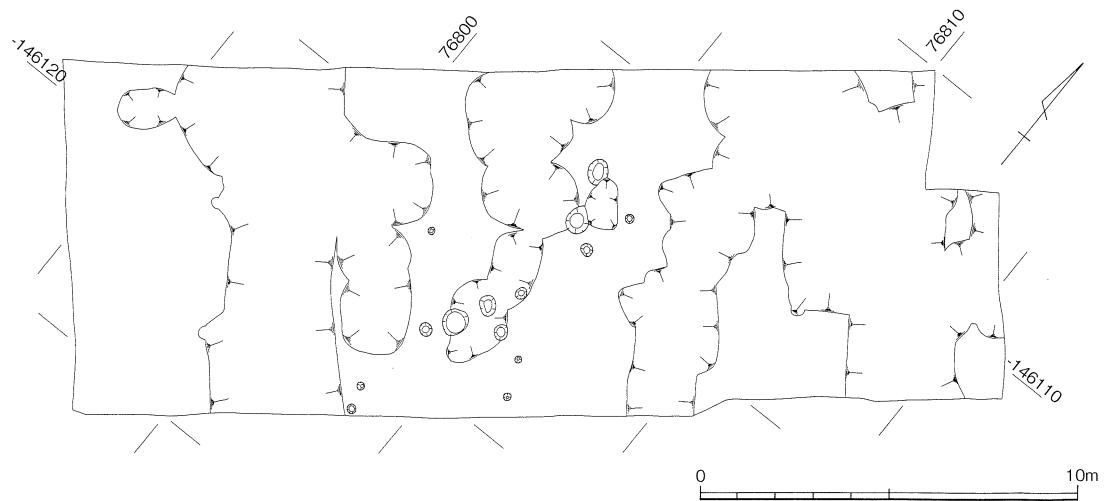


fig.79 第3遺構面平面図

## 15. 兵庫津遺跡 第39次調査

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区南部のJR兵庫駅の東側からJR和田岬駅付近にかけて、広範囲に所在する、兵庫の港と港町を中心とした、奈良時代から近世の遺跡である。

兵庫の港は瀬戸内海航路の基幹港として栄え、古くは「大輪田泊」と呼ばれて、平清盛の大修築により日宋貿易の拠点として繁栄した。中世には「兵庫津」と呼ばれるようになり、大地震や大火などの災害に遭いながらも、流通経済の重要港として発展し、天正9年(1581)には池田恒興・輝政父子により、兵庫の町の中心に兵庫城が築かれている。近世には幕府の宿駅指定を受け、西国街道も兵庫へ迂回するようになる。兵庫は尼崎藩領を経て、再び幕府直轄領となり、幕末には兵庫(神戸)開港を迎えた。

今回の調査地は元禄9年(1696)に尼崎藩により作成された『元禄兵庫津絵図』では「御屋敷」(尼崎藩兵庫陣屋、もとの兵庫城)の西側に位置し、「切戸町」と南側の「同心ヤシキ」、及びその西側の存在する東西及び南北の水路交差地点付近に位置するものと推定された。尚、調査地は平成16年度に、兵庫城に関連するものと考えられる石垣が検出された、第35次調査地の南西側に近接する。

今回の調査は社員寮建設に伴うもので、工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

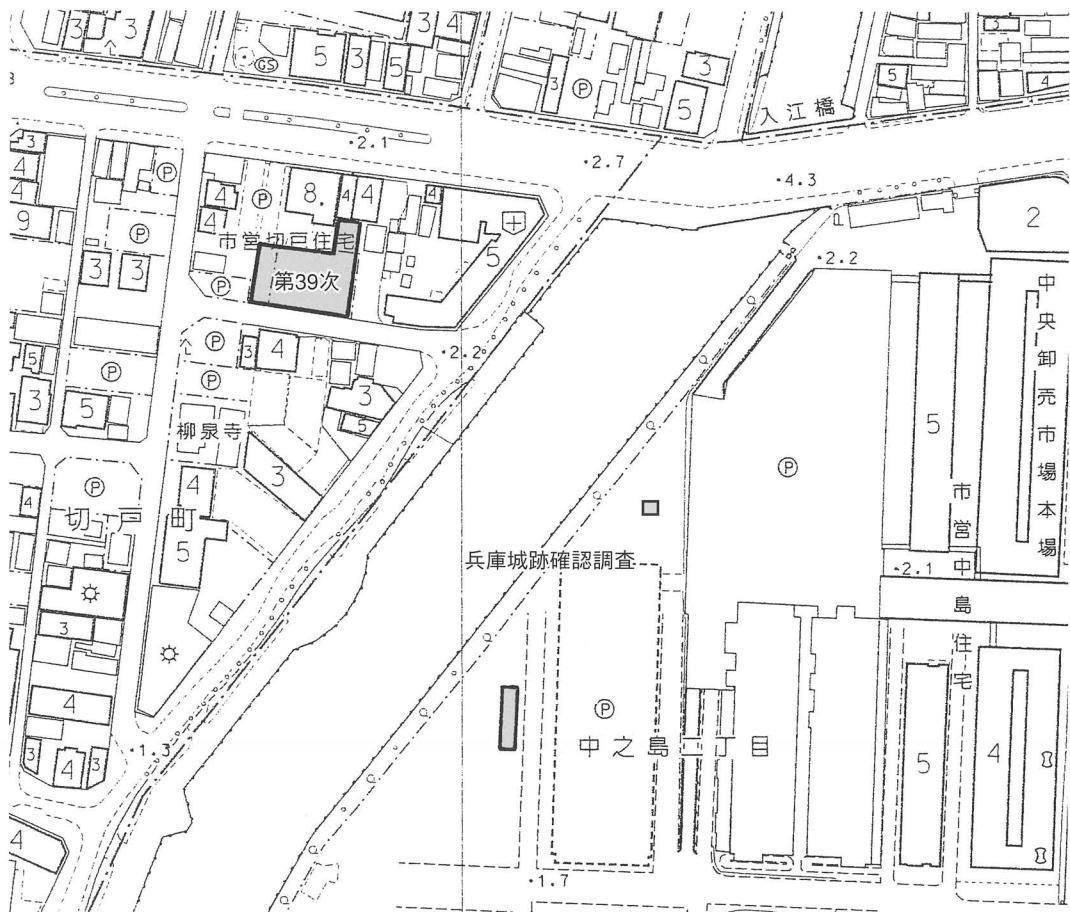


fig.80 調査地位置図

## 調査概要

調査地は3分割し、東から1区～3区とした。2区は従前建物基礎による搅乱の影響を大きく受けている。2区は基礎部分のみの調査であるが湧水が著しく、作業が危険であるため、重機による坪掘調査を行ない、可能な限りの記録調査と出土遺物の回収に努めた。

調査地の基本土層は盛土・搅乱層下に近世と考えられる数面の整地層が確認され、この下層に中世の遺物を含む、暗灰色細砂が存在する。この下層が中世の遺構面である灰色細砂である。

## 1区

1区は比較的、搅乱の影響は少なかったものの、近世以降の遺構は南で、井戸（SE01）を検出したのみであった。

## 井戸

表土の除去後検出した、直径75cm前後の井戸で、井戸掘形を掘削後、漆喰状の材を内面に塗り、1辺20cm前後の板状の型を押し付けて整形し、井戸枠としている。湧水が非常に激しく、壁面の崩壊も著しいため、作業の安全上、検出面から120cm以下の調査は実施できなかった。出土遺物は染付等が出土しているが、検出状況から近代以降のものである可能性も考えられる。

## 集石

1区北では北西角を中心に拳大前後の石が集積した状態で出土した。さらに北側へと続くため全体の規模は不明である。この石の間から室町時代頃のものと考えられる土師器皿、須恵器甕等が出土している。

## 2区

基礎部分をNo.1～No.6として調査を実施した。各区共、湧水が非常に多く、明確な遺構の検出には至らなかったが、全体として中世の遺物包含層が良好に遺存しており、多くの遺物が出土した。出土遺物の大半は室町時代のものであると考えられ、土師器、須恵器、瓦器、陶器、青磁、白磁等が出土している。この他No.4からは北宋銭「太平通寶」（初鑄976年）を含む13枚の錢貨が出土した。

## 3区

3区は北側を中心に、大きく搅乱の影響を受けており、近世の整地層も確認されなかった。土層の堆積は東側の1区とは大きく異なり、壁面の観察から、西側へと落ちていく大きな掘り込み状の堆積状況が確認された。また、南半は砂を中心とした土層堆積となっており、3区では現地表から240～250cmで地山層である灰色細砂及び淡褐色細砂を検出した。湧水も激しく、限られた範囲であるため、判然とはしないが、調査地の西側に濠状の大きな掘り込みが存在する可能性が考えられる。中世の遺物の出土は微量であった。

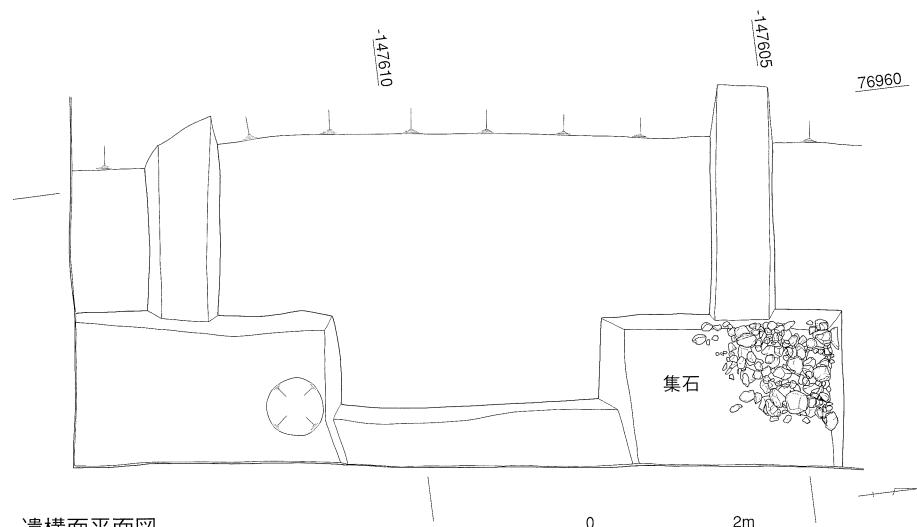


fig.81 遺構面平面図

## まとめ

今回の調査では、後世の搅乱等により、当初予測された水路、また、「同心ヤシキ」などに関連する近世の遺構を検出することはできなかったが、3区で西側へと落ち込んでいく状況が確認された。『元禄兵庫津絵図』に描かれた、南北の水路が存在すると推定された2区は従前建物基礎による搅乱の影響を大きく受けたため、詳細は不明であるが、『元禄兵庫津絵図』以降に存在する絵図にも、調査地の西側に水路等の記載は見られず、調査地の南西約150mで平成14年度に実施した、第31次調査で検出されたような絵図に表われていない水路である可能性も考えられる。

また、中世の遺構と多量の遺物が出土したことは大きな成果であった。出土遺物は整理作業が完了していないため、詳細な時期の検討はこれを待ちたいが、調査完了時の見解では、土師器、須恵器、瓦器、陶器、青磁、白磁等があり、室町時代頃のものと考えられる。また北宋銭「太平通寶」等の銭貨13枚が出土している。また、この他、近世の土師器、陶磁器、瓦等が出土した。

調査地の近隣地では、これまでの調査から、中世後半～末にかけての遺物の出土が濃密に確認されており、第31次調査では遺構に伴って、土師器の皿を中心に室町時代の多量の遺物が出土している。また、今回の調査地の北東側に近接する第35次調査においても室町時代の遺物が多量に出土しており、切戸町付近には当該期の遺構、遺物が濃密に分布することが推定される。未だ明らかになっていない、中世の兵庫津を復元する上で、貴重なデータとなった。



fig.82 調査区全景

## 16. 兵庫津遺跡（兵庫城跡範囲確認調査）

兵庫城は江戸時代の享保17（1732）年に書かれた『花熊落城記』によれば、池田恒興（信輝）が天正8（1580）年に荒木村重が築いた花熊城を落とした功により、同9（1581）年に花熊城の石材を利用して築かれた。当時の兵庫城は天守閣を備えたものと言われているが、その縄張りも含め具体的にどのような規模を有していたかは史料も乏しく明確ではない。

恒興は天正11（1583）年、美濃大垣に転封となり兵庫城はわずか2年でその役割を終えた。天正13（1585）年、羽柴秀吉は池田氏旧領の尼崎・兵庫を与えていた甥の三好秀次を近江に移し、これらの領地を秀吉の蔵入地（直轄領）とした。現地は片桐（主膳）が代官となり支配し、兵庫城も「片桐陣屋」と呼ばれていた。慶長12（1607）年の朝鮮使節の日記には、陣屋は周囲に堀を巡らし3重の門があったと記載されている。

兵庫は、大坂城が落城した元和元（1615）年以降も片桐貞隆に預けられていたが、同3（1617）年に至り戸田氏鉄を摂津尼崎に移して尼崎藩領とした。城跡は「兵庫陣屋」とよばれ奉行が置かれたが、明和6（1769）年、幕府直轄領とされ「勤番所」が設置されて大坂谷町代官支配となった。元禄9（1696）年の兵庫津絵図には東に枱形を備えるD字形の「御屋敷」が描かれている。この絵図を参考に、17世紀末の兵庫陣屋の規模は約140m四方と推定されている。なお、堀は18世紀後半の勤番所建設時に埋められその幅を減じている。

明治元（1868）年、明治政府により「兵庫鎮台」が置かれ、同年2月に「兵庫裁判所」、同年5月には「兵庫県庁」と改称した。同9月県庁が移転すると、建物は郷学「明親館」の校舎となるが、明治5（1872）年6月閉鎖され廃校となった。明治6（1873）年には城下町の外周に巡らされていた土塁が削平され、翌7年には城跡中央部を貫くように新川運河が開削された。

兵庫城跡は平成16年10～11月に行った切戸町6丁目の荻原みさき病院の増改築工事に伴う発掘調査で、北西隅付近の堀および北側の石垣と石垣の北で17世紀段階の東西方向の堀状の堆積が確認されている。また、石垣内側の堀の埋土からは18世紀後半から19世紀にかけての遺物が出土し、勤番所建設に伴い堀を埋めたことを裏付けた。

今回の調査は中央卸売市場の再開発事業に先立ち、兵庫城の南辺の東西方向の堀付近と、城のほぼ中央部にトレーナー及び試掘坑を設け、遺構の残存状況を確認する目的で発掘調査を実施した。

### 調査の概要

#### トレーナー

兵庫城南辺の東西方向の堀及び堀の南側に広がる町屋の残存状況を知るために設定したトレーナーで、幅2.5m、長さ20mを測る。トレーナー南端から北へ10mの地点で、東西方向の約40cmの段落ちが検出された。この段落ちから南側には標高1mで平坦面が続いており、東西方向の性格不明遺構（SX01）、匂炉裏、南北方向の石列が検出された。遺構の時期を決定する目的でSX01及び匂炉裏内的一部分を掘り下げたが、遺物は少ないながらも近代以降のものを含んでおらず、江戸時代の遺構と判断される。

トレーナー中央の段落ちから北へ6mまでは灰オリーブ色の粘土を貼った平坦面（標高0.6m）が続いており、これより北は砂礫面となっていた。この段落ち内の平坦面の時期



fig.83 遺構面平面図・断面図

を決定する材料は得られなかったが、土層から判断して南側の町屋と同時期と判断される。

トレンチ北端付近の砂礫面を一部掘り下げたところ、約25cm下から東西方向の石列と石列から北へ広がる平坦面を確認した。平坦面は平面で抑えることが出来ず西壁断面の土層で把握したが、灰オリーブ色の粘土が上面に貼られていたものと考えられる。

トレンチ中央部の段落ちは、元禄の絵図などから見て兵庫城南辺の東西方向の堀の南縁部と考えられ、今回の調査状況から堀内部も生活面となっていたことが確認できた。また堀が埋め立てられる過程で上下2枚の遺構面が形成されていることより、少なくとも2回堀内部を生活面としたことが推測される。堀内部の遺構面検出中に出土した遺物は、18世紀後半から19世紀代のものと思われ、2枚の生活面もその中で時期が抑えられるものと考えられる。

なお堀底については確認していないが、近代以降の搅乱坑の壁面土層から判断して深さ1m以上（標高0m以下）となる可能性が高い。

また南半部の町屋のベース土は、多量の焼土を含む土砂で形成されており、中世の遺物も含まれている。搅乱坑壁面の観察では約10～20cm下に遺構面と推測される面があり、堀の南側部も生活面が複数となる可能性がある。

**試掘坑**  
城内のほぼ中央部に設定した3m四方の試掘坑で、GL-0.8m（標高1m）で遺構面と考えられる硬化面を検出した。この面には上層から切り込む近代以降の搅乱や石列などがあり、遺構を平面で把握することができなかったが、西側壁面で径40～50cmの土坑を確認した。また西半部を30～40cmの深さで掘り下げた段階で径40cmほどの土色変化部を検出したが、標高1mの遺構面から切り込んでいたかどうかの判断は出来なかった。いずれの遺構についても掘り下げは行っていないが、トレンチ南半の遺構面の標高と同一であることや、断面に見える瓦片などから近世のものと考えられる。また西半部の掘り下げ中に16世紀代に遡ると推定される丸瓦の破片も出土しており、中世の遺構の存在も考えられる。

**調査の成果**  
(1) トレンチ調査では兵庫城南辺の堀と考えられる東西方向の落ち込みが検出された。切戸町6丁目の調査成果とあわせれば、城の南北長は150～160mとなり、今まで言っていた140m四方よりやや大きくなる可能性が出てきた。また堀の幅は10m以上で、絵図を参考にすれば15m前後と考えられる。ただしこの城の規模については、今後の調査の進展を待ちたい。

- (2) 堀の南側および堀の内部に町屋が広がることを確認できた。町屋の時期は堀内の出土遺物から18世紀後半から19世紀と考えられる。また遺構面は少なくとも2面あるものと推測される。
- (3) 城跡の中央部に関しても近世の遺構が存在することが推測できた。また城跡の内外から中世の遺物（瓦、土師器や備前焼摺鉢片など）が出土し、近世の遺構面の下に中世の遺構が広がる可能性が高いことが判明した。

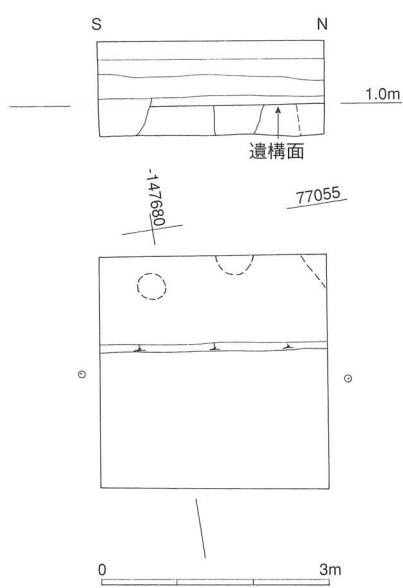


fig.84 試掘坑遺構面平面図・断面図

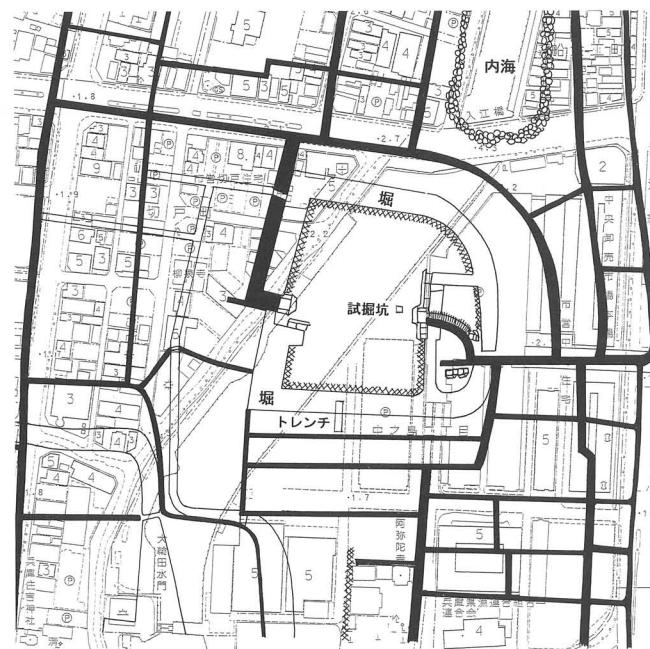


fig.85 兵庫城復元図



fig.86 近世町屋遺構面



fig.87 石列検出状況

## 17. 八幡神社古墳群 第1次調査

八幡神社古墳群は武庫川中流域の北岸、三田市と市境を接する標高190m前後の八景丘陵の稜線上に立地する。

この丘陵上には、神戸・三田側共に、古墳時代後期の古墳群が多数存在することが知られている。しかし、現在まで発掘調査が行われたことがなく、その実態は明らかではなかった。

このたび当該地に、墓地拡張の工事が計画され、切土、擁壁工事によって破壊される部分に位置する2基の古墳、塩田北山東古墳（八幡神社古墳群9号墳）および八幡神社古墳群8号墳の調査が行われた。

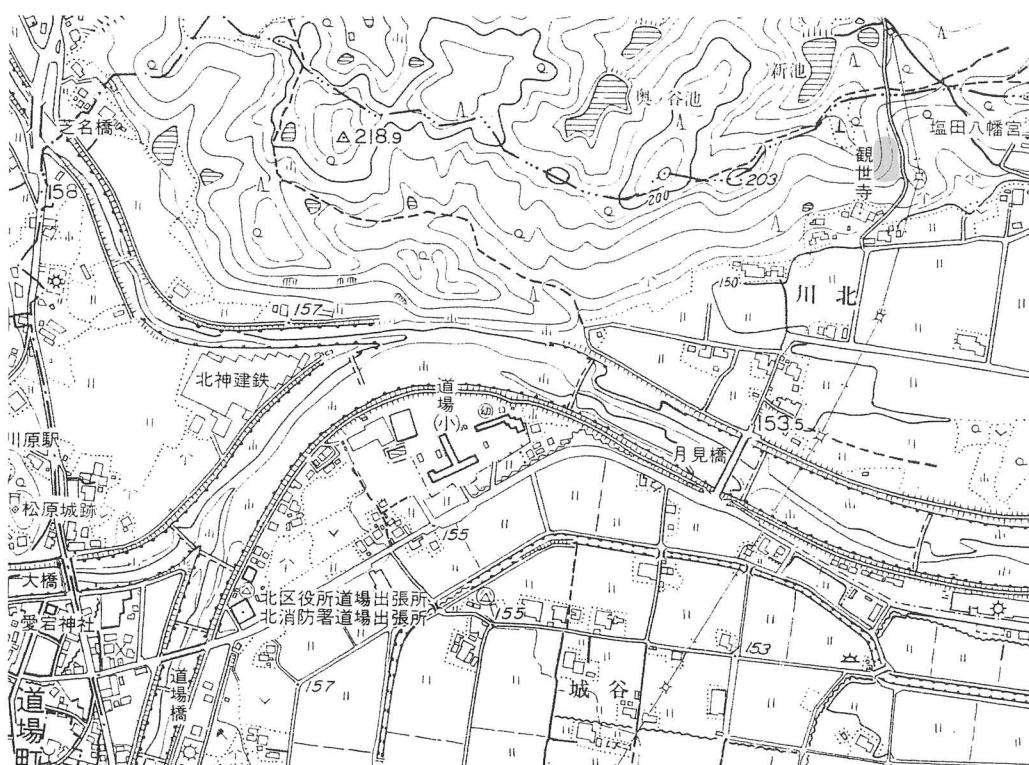


fig.88 調査地位置図  
(S = 1 : 10,000)



fig.89 八幡神社古墳群

## 1. 塩田北山東古墳（八幡神社古墳群 9号墳）

丘陵頂部に築造された古墳時代前期前葉～中葉に築造されたと考えられる前方後円墳である。墳丘規模は全長35m、後円部径22m、前方部長14m、後円部高さ約2.5mを測る。前方部幅・くびれ部幅については後世の削平のため詳細は不明である。墳丘の主軸はほぼ東西方向を向いている。

墳丘には4基の埋葬施設が確認された。後円部に造られた第1主体部と第2主体部は、第1主体部（古墳時代前期前葉～中葉）→第2主体部（古墳時代前期中葉～後葉）の順で、その後、前方部に第3主体部（古墳時代前期後半）→第4主体部（古墳時代前期後半）の順に築かれたと考えられる。

### 第1主体部

長さ8.4m、幅3.1m、深さ2.2mと長大な箱形の墓廣が掘られ、精良な白色粘土にて棺台・粘土床を構築し、内面を赤色顔料で彩った長さ6.7m、幅0.8mを測る割竹形木棺（コウヤマキ製）が据えられていた。棺内は3つに区画されていたようで、東区画内に鉄斧・刀子・ヤリガンナなどの鉄製工具、また遺体を葬っていたと考えられる中央区画内には三角縁仏獣鏡1面、緑色凝灰岩製管玉8点、カリガラス製の小玉68点などが副葬されていた。埋葬頭位は東向きと推測される。

### 第2主体部

第1主体部を構築した後、ほぼ同じ場所に長さ5.3m、幅1.2m～の墓廣を掘り、さらにもう一つの棺を葬っている。2段墓廣であり、第1段目廣内に直接、長さ4.6m、幅0.8mの割竹形木棺（コウヤマキ製）を据えていた。こちらも内部に赤色顔料を施していたようで、棺内には鉄剣・鉄製工具類・碧玉製紡錘車形石製品などの副葬品が供えられていた。

### 第3主体部

前方部で古墳主軸に沿う状態で、全長6.4m、幅約1.7m～の2段墓廣を検出し、中から長さ約4.7m、幅0.7mの内部に赤色顔料を施した割竹形木棺の痕跡を検出した。棺を据える前には簡単な粘土床を擁している。副葬品には刀子とヤリガンナがある。

### 第4主体部

第3主体部の西側から、墳丘主軸に斜交する状態で検出され、長さ4.0m以上、幅約1.0mの墓廣が確認された。内部には簡素な粘土床が構築され、幅約0.3mの割竹形木棺が据えられていたと推定できた。副葬品は確認されていない。また、棺内から赤色顔料が少量出土した。

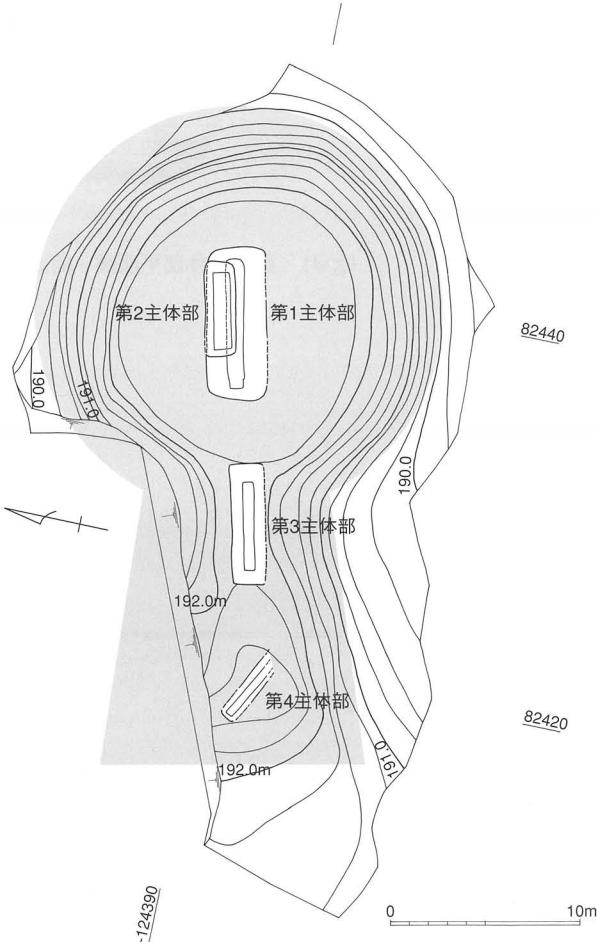


fig.90 墳丘平面図

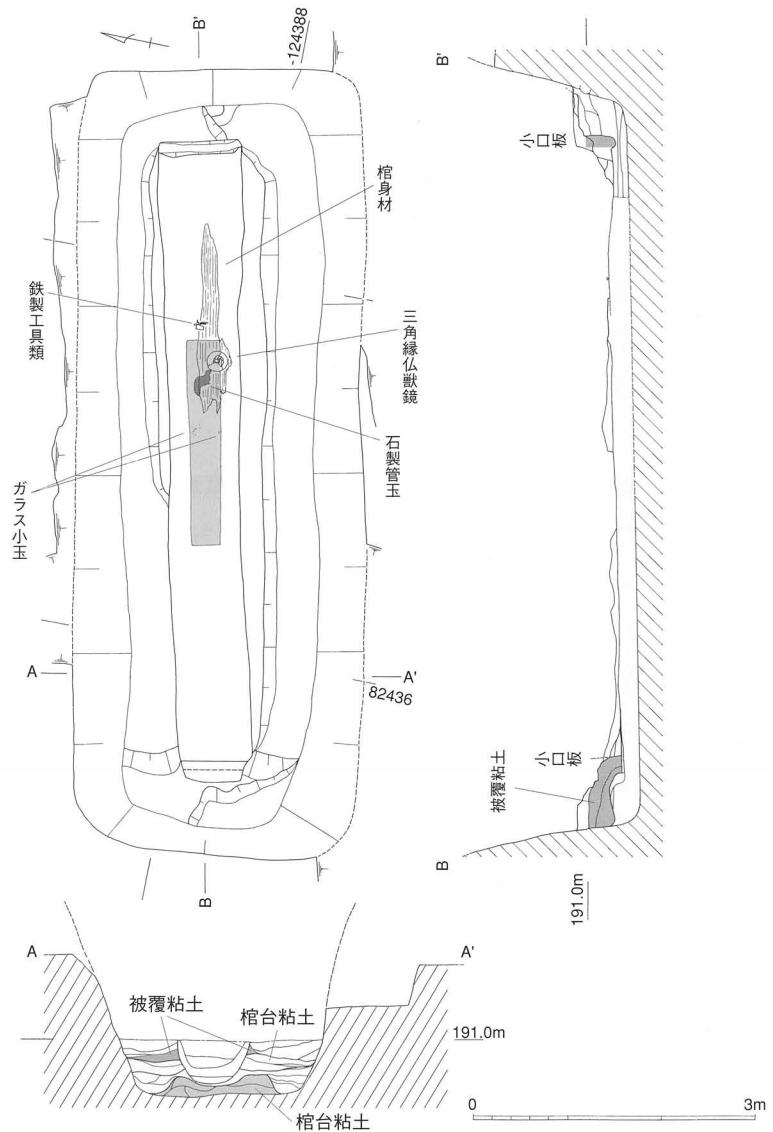


fig.91 第1主体部平面図・断面図



fig.92 塩田北山東古墳遠景



fig.93 第1主体部遺物出土

## 2. 八幡神社古墳群 8号墳

古墳時代後期（6世紀末）の円墳で、残存する墳丘の規模は、径12m、高さ約1.5mを測る。

また、古墳の西側斜面に一抱えもある石を2～3段積み上げた外護列石を設置している。また墳丘内にも一部、列石を設ける部分がある。

巨石を用いた横穴式石室は無袖で、長さ9m、幅1.6m、天井石の全部と側石の一部は失われている。開口方向は南である。

副葬品として金銅装の馬具の一部、鉄刀、ガラス玉、土玉、須恵器、土師器などが出土した。

### 調査の成果

塩田北山東古墳から出土した三角縁仏獸鏡は全三角縁神獸鏡が490面以上にのぼる中で本例を含めて9例しか知られていない。また三田盆地周辺では、三角縁神獸鏡自体の出土が初例となった。古墳の築造時期は、粘土櫛の状況や第1主体部よりの出土遺物から古墳時代前期前葉～中葉と考えられる。

三田盆地において、前期の前方後円墳は、当古墳と西に隣接する塩田北山西古墳を除いてその存在は知られていない。塩田北山西古墳は推定全長70mを測る前方後円墳で、墳丘裾の葺石と思しき円礎や、後円部墳頂に竪穴式石室構築材と考えられる堆積岩の板石が確認でき、塩田北山東古墳よりさらに古相を呈する。

これら前方後円形の墳丘に竪穴系の埋葬施設を持ち、三角縁神獸鏡、碧玉製紡錘車形石製品などを副葬するといった、畿内の様相を呈する古墳が存在することは、畿内ヤマト政権と周辺地域とのつながりを考えるうえで貴重な発見となった。

また、八幡神社8号墳は墳丘の一部に外護列石を持ち、巨石を用いた横穴式石室内からは、金銅装の馬具の一部が出土するなど、塩田北山東古墳同様、畿内周辺地域での後期古墳の葬制を考える上で、とくに注目される。



fig.94 八幡神社古墳群8号墳墳丘



fig.95 八幡神社古墳群8号墳石室

## 18. 中遺跡

中遺跡は、神戸市域の北東端に位置し、六甲山系北側を流れる武庫川支流の八多川の流域に形成されている。ここは旧攝津国有馬郡に属する。これまでの調査で、縄文時代から中世さらに近世に至る遺構・遺物が確認されている。

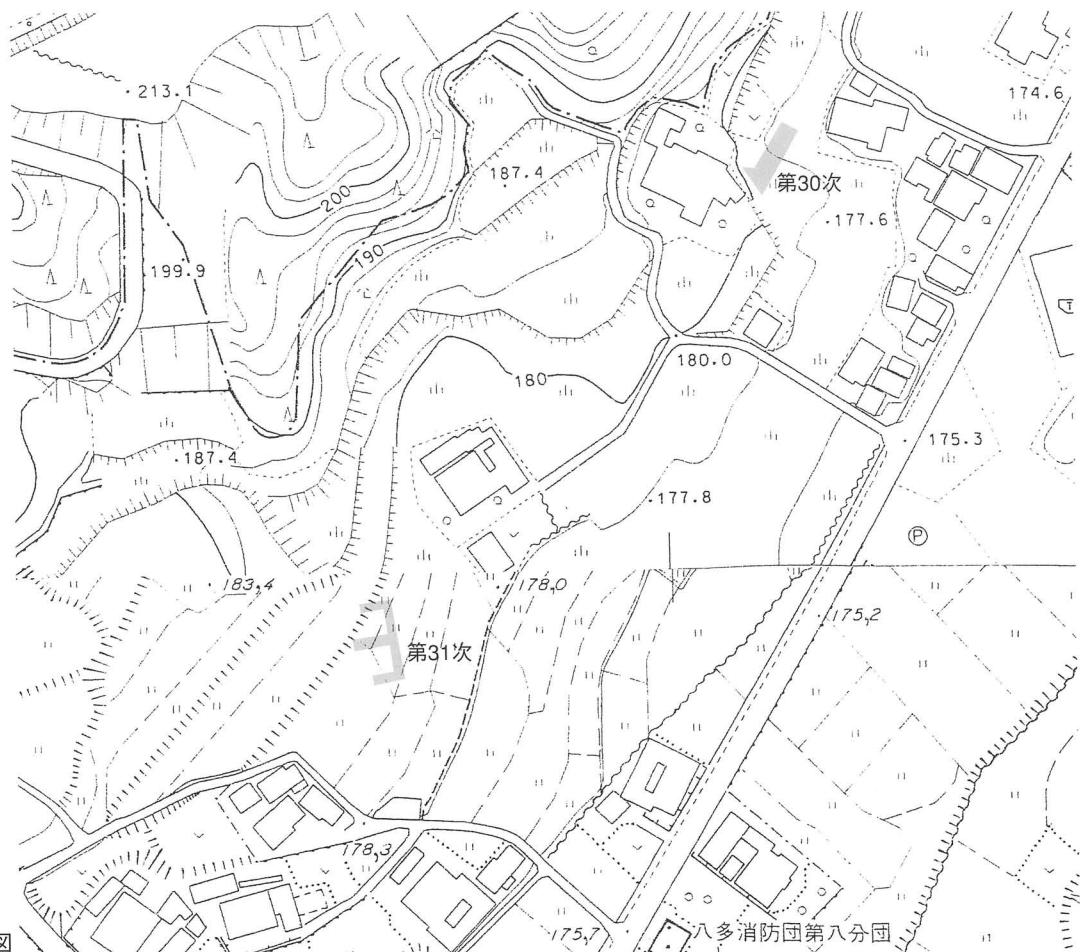


fig.96 調査地位置図

### 1. 第30次調査

当遺跡の調査は、道場八多地区特定区画整理事業に伴い平成7年度から実施されてきたが、これまでに、弥生時代末期から室町時代に至る遺構・遺物等が確認されている。

今回の調査地は、平成17年7月29日の試掘調査によって、遺跡の存在が明らかとなった範囲のうち、区画街路建設の際に削られる部分が、調査対象地となった。

調査地は南北方向に伸びる尾根の末端部東斜面に位置し、南西から北東にかけて下がる地形となっている。後世に傾斜面が削平され、二段の耕作地になっており、便宜上、上段面を南半部、下段面を北半部に区分した。作業は、油圧ショベルで耕作土、盛土等の除去を行い、その後は人力で遺構の検出作業を行った。

基本層序は、南半部では耕作土・黄褐色砂質シルト（床土）・黄褐色混礫砂質土（盛土）・黄灰褐色砂質シルト～極細砂（地山・遺構検出面）となる。北半部では、耕作土・黄褐色砂質シルト（床土）・黄灰褐色混礫砂質シルト（盛土）・灰褐色砂質土（盛土）・黄灰褐色砂質シルト～極細砂（地山・遺構検出面）となっている。

遺構検出面までのレベルは、南半部は現況耕作土面からマイナス0.2～0.5m、北半部はマイナス1.2m前後を測る。

## 遺構

ピットが28基、土坑1基、江戸時代末期頃の水溜遺構5カ所が確認された。

## ピット

1m×0.6mの長方形のものから直径0.1mの円形を呈するものまである。深さが0.4mを測るものもあるが、大半が0.1m前後である。ピットは南半部に集中して発見されている。出土遺物を埋土中に含んでいないものが多いため、正確な時期は判らないものがほとんどであるが、少ない出土遺物から判断して、一辺または直径が0.5m以上の大きいピットは、平安時代末～鎌倉時代、それ以下のものは江戸時代以降に掘り込まれた可能性がある。

## 土坑

## SK01

北半部西壁に半分かかる状態で確認された。直径1.4mの円形で、深さは0.4～0.6mを測る。埋土からは、木の枝5条と礫が出土した。土師器の小片が1点出土したのみであるため、精確な時期は不明である。しかし、江戸時代の盛土層より下から発見されているため、中世の遺構と判断してよいと思われる。

## 水溜遺構

直径1.2m、深さ0.2～0.5mの円形土坑4カ所、一辺1.7m×3.5m以上、深さ0.7mの長方形土坑が1カ所検出された。円形土坑は、当初、井戸と判断して掘削したが、いずれも浅いことや、礫を詰めた不整形な溝に接して掘られていることから、生活用水等の汚水を溜める遺構と判断した。長方形土坑については、検出面から0.3mほどは、黄褐色～褐色の汚れたシルトが堆積し、その下に拳大の礫が詰まっており、生活用水を落として塵芥を沈殿させる機能をもつ水溜と思われる。いずれの遺構からも江戸時代末ごろの陶磁器等が出土した。

## まとめ

今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代のピット、中世の土坑、江戸時代末頃のピット・水溜遺構等が発見された。遺構は平坦面の上段にあたる南半部が多い。この東側は屋敷地となっており、この部分も江戸時代末期頃には、屋敷地の一部として機能していたようである。中世以前の遺構と判断できるものは少ないので明言はできないが、調査地付近も居住域の一部であったと推定できる。



fig.97 調査区全景

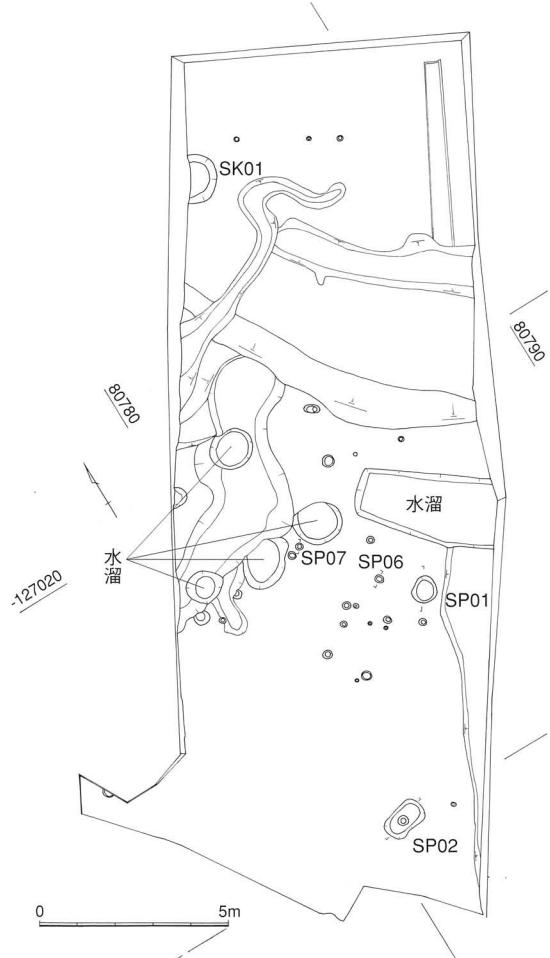


fig.98 遺構面平面図

## 2. 第31次調査

今回の調査地は池尻地区に属し、これまでの調査において、飛鳥時代・奈良時代後半から平安時代中期・平安時代末の遺物、比率的には奈良時代後半から平安時代中期の遺物が多く出土している。この中には緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器稜塊などが含まれる。遺構としては奈良時代から平安時代末の掘立柱建物・井戸・溝・土坑などの遺構が検出された。

今回の調査は擁壁設置工事に先立つもので、工事によって遺跡の破壊される部分についてこれを行った。その結果、古代から中世の土器類が出土し、掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が検出された。

これらの遺構を平成8年に県教育委員会による調査成果とあわせ検討することにより、掘立柱建物SB01またSB03等、先に確認された遺構の規模等を確定することができた。

掘立柱建物SB03・07～09については先の調査で出土遺物が少なく、時代の特定ができなかったことが報告されている。今回の調査における出土遺物の整理作業を進めていく中でSB03についてその確定等の作業を行いたい。

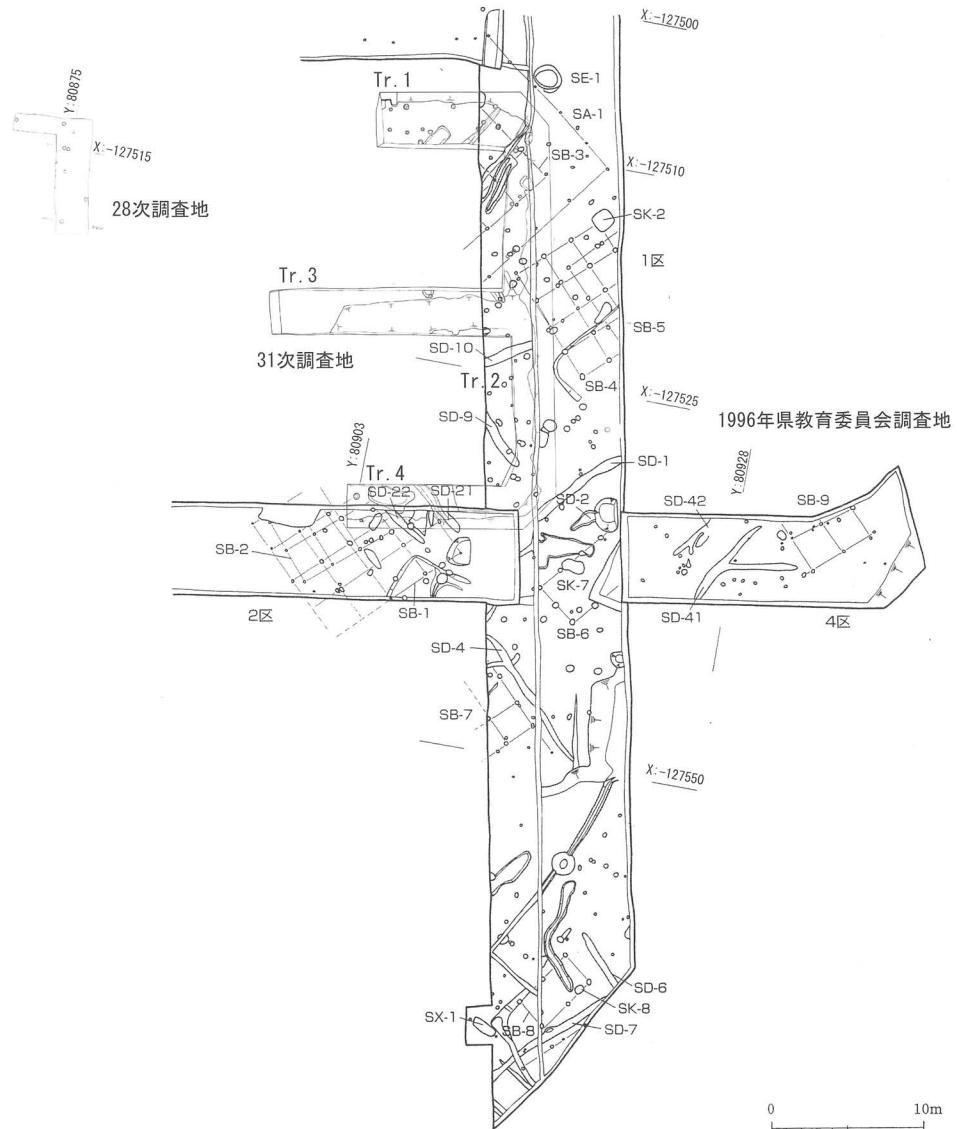


fig.99 遺構面平面図

## 19. 御蔵遺跡 第57次調査

御蔵遺跡は苅藻川により形成された自然堤防及びその後背湿地に立地する遺跡で、平成2年度に地域福祉センター建設工事に伴い、その存在が初めて確認された。付近は長田区内で最も遺跡の分布が濃密な地域である。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により、御蔵遺跡の所在する長田区御蔵通一帯は甚大な被害を受けた。その復興に伴い、共同・個人住宅建設に伴う調査が平成9年度から、復興区画整理に伴う調査が平成10年度から開始され、また、平成11年度からは国道28号線拡幅に伴う調査も実施された、これまでに50次を超える調査が実施され、縄文時代晩期～弥生時代の遺物、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての遺構、多量の遺物、飛鳥時代～中世にかけての掘立柱建物群、井戸、溝状遺構等の遺構、須恵器・土師器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・瓦・土馬・錢貨・鎧帶・銅鏡等の遺物が出土した。大型の柱掘形を有する掘立柱建物の存在、土馬・鎧帶・銅鏡等の出土遺物から、当遺跡が官衙的な要素を持つ事が指摘されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地は東側を、平成12年度に実施された第34・35・36-1・36-2・41次調査地、西側を平成11年度実施の第14-22・14-23次調査地に隣接する。工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

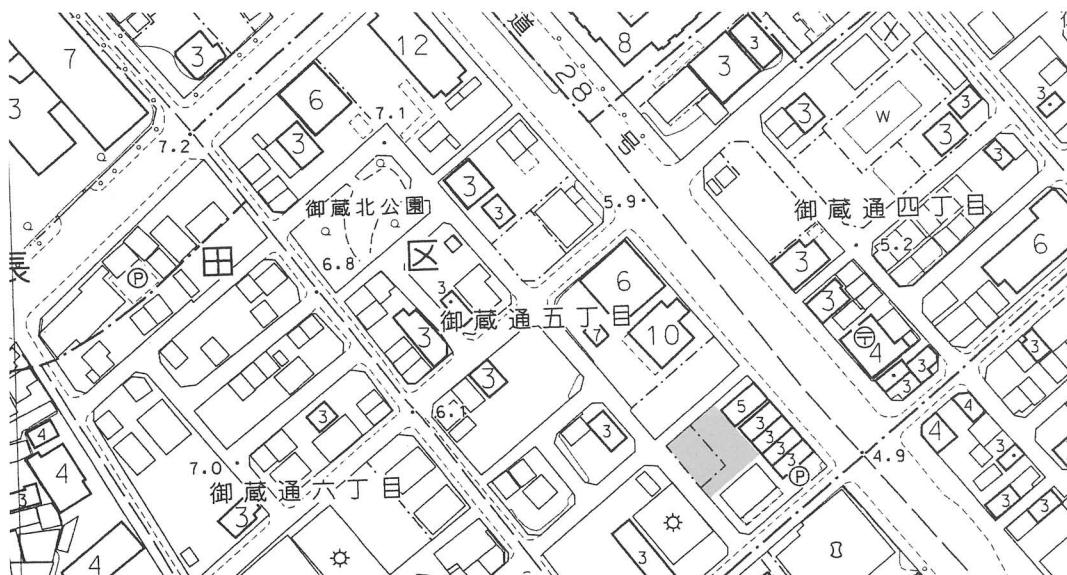


fig.100 調査地位置図

### 調査概要

調査は計画建物基礎の形状から1～6区を設定した。

調査地の基本土層は地表面から北側で0.15m、南側で0.45m前後までが、盛土・旧耕土・床土層で、この下層の6区北西側では暗灰色細砂、他では淡緑灰色シルト、淡黄灰色シルト及び淡明茶褐色細砂上で遺構が検出された。遺構面は基本的に南に緩やかに下る。尚、暗灰色細砂には弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる遺物がわずかに含まれる。

### 検出遺構

掘立柱建物3棟、溝7条、土坑10基、落ち込み2ヶ所、ピット約200基を検出した。

以下、主要な遺構について述べる。

### 掘立柱建物

SB01は1区中央で検出した、南北に主軸をもつ掘立柱建物である。南北2間分を検出し

- SB01 たが、東側に隣接する第34～36次調査区からは対応する柱穴は確認されず、西側に続くものと考えられるが、調査範囲外部分へと続くため、全体の規模は不明である。柱間はほぼ3.5mで、主軸を27°西に振る。柱穴は楕円形のプランで、長径0.95m～1.1m、短径は2基が搅乱を受けているが、P2が0.75mであり、ほぼこれに前後するものと考えられる。検出面からの深さは0.17m～0.65m、柱痕は直径0.4m～0.5mである。平安時代頃のものと考えられる土師器・須恵器の微細な破片が出土している。
- SB02 SB02は2区中央で検出した掘立柱建物である。東西2間分を検出したが、北側は調査区外へ続くため、全体の規模は不明である。柱間はほぼ2.1mで、主軸を24°西に振ると考えられる。  
柱穴は直径0.85m～1.2m前後の円形で、検出面からの深さは0.25m～0.4m、柱痕は直径0.16～0.18mである。奈良～平安時代頃の土師器・須恵器片が出土している。
- SB03 SB03は6区南半部で検出した、南北に主軸をもつと考えられる掘立柱建物である。東西1間、南北3間を検出したが、調査区の西・南側へと続く可能性が考えられる。西側の東西約5m幅の調査範囲外部分を隔てて、隣接する第14～22・23次調査区に対応する柱穴は確認できない。柱間は南北が2m～2.7m、東西は2.7mである。主軸は9°西に振る。柱穴はP3が長辺0.9m、短辺0.7mの方形プランである以外は、長辺0.58～0.9m、短辺0.52～0.75mの楕円形プランである。検出面からの深さは0.2～0.48mで、柱痕は0.4m前後である。平安時代頃のものと考えられる土師器・須恵器の微細な細片が出土している。
- SD01 1区やや北寄り及び3区で検出した南西～北東方向の溝で、両端は搅乱により切られている。  
幅0.45～0.76m、検出面からの深さは0.2m前後である。土師器・須恵器の細片と共に、飛鳥～奈良時代のものと考えられる土師器の塊が出土している。
- SK11 2区ほぼ中央南側で検出した幅1m前後の落ち込み状の遺構である。南側は調査範囲外へ続き、複数の遺構に切られいるため、全体は判然としない。検出面からの深さは0.2m前後で、弥生時代末～古墳時代初頭頃の小型器台脚部、飯蛸壺等が出土している。



fig.101 調査区全景



fig.102 遺物出土状況

SP107

4区ほぼ中央北側で検出した直径0.35m、検出面からの深さ0.56mのピットで、埋土中から土師器、須恵器の細片と共に土師器皿1点が出土した。平安時代のものと考えられる。

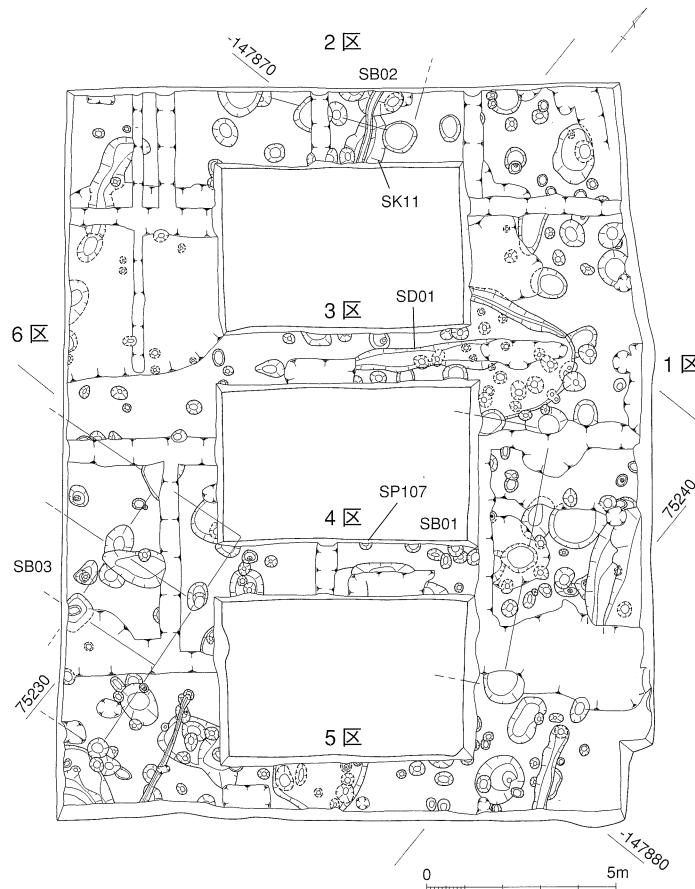


fig.103 遺構面平面図

## まとめ

今回の調査では奈良時代～中世の遺構面を検出し、多くの遺構を検出した。

本調査地の北西に近接する平成9年度に実施した第3次調査において検出された、縄文時代晩期～弥生時代の遺物を含む自然河道および遺構は、今回の調査でも検出されたが、断割調査の結果、遺物の出土は認められなかった。

これまでに本調査地以西で検出されていた弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構が、当調査区まで拡がることが判明した。調査区の西壁北半付近ではわずかに遺物包含層と考えられる暗灰色シルト質細砂の存在が確認され、調査区東半部での2区SK11の存在、1区北半、2・3区等の遺構埋土中から後世の遺物に混入して遺物が出土することから、当調査区付近では標高が比較的高く、遺構面が後世の削平を受けているものと推定される。

奈良時代～中世の遺構については、これまでの周辺地での調査と同じく、高い密度で遺構を検出した。柱掘形の直径が1mを超える大型の柱穴も存在する。今回検出されたSB01～03の3棟の掘立柱建物も、これまでに御蔵遺跡において確認されている掘立柱建物群とほぼ方向を同一にするものとして捉えることができる。

## 20. 二葉町遺跡 第19次調査

二葉町遺跡は、長田区久保町・二葉町に所在する弥生時代及び平安時代末から鎌倉時代の集落遺跡である。遺跡は、妙法寺川と苅藻川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地している。平成元年度の第1次調査以来これまでに18次に及ぶ発掘調査を実施しており、弥生時代前期や平安時代末から鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。特に平安時代末から鎌倉時代には掘立柱建物や井戸などの遺構が多く検出されており、集落の広がりが認められる。

今回の調査は、前年度に引き続き新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴って実施した。



### 調査の概要

今回の調査地は、久保町6丁目の区画の西端部中央に位置する。調査地内で残土置場を確保するため、東・西2回に分けて調査を実施することとし、東半部より調査を開始した。

### 19次－1

調査対象地東半部で実施した調査である。北端部に既設の電柱が存在し、一部掘削不能であったが、約660m<sup>2</sup>について調査を実施した。

調査の結果、井戸1基、水溜め状遺構3基、土坑5基、溝8条、柱穴2基、ピット10基のほか小穴多数を検出した。

### SK01

調査区北東部で検出した平面形がやや歪な楕円形を呈する土坑で、規模は1.42×1.04m、深さ0.25mを測る。底面付近で炭を少量検出した。須恵器・土師器・磁器が出土している。細片が多く詳細な時期については不明な点も多いが、須恵器塊底部の形態などから12世紀頃の遺構と考えられる。

### SK02

調査区北東部で検出した平面形が楕円形を呈する土坑で、規模は1.74×1.53m、深さ0.14mを測る。遺物は出土していない。

- SE01 調査区中央で検出した平面形が長楕円形を呈する遺構で、規模は径 $1.4 \times 1.1$ mで、深さ0.71mを測る。底面が湧水層である砂層まで到達しておらず、井戸ではなく、水溜めと考えられる。土師器壺が1点出土しており、出土遺物から奈良時代後半あるいは平安時代頃の遺構と考えられる。
- SE02 調査区中央のSE01の南側で検出した井戸である。掘形の規模は、 $1.86 \times 1.75$ mで、深さ1.4mを測る。形状は隅丸方形に近い。内部は2段掘りになっている。須恵器壺や土師器皿などの破片が出土している。須恵器壺から判断すれば12世紀代頃の遺構と言える。そのほか底付近で木製品「砧」<sup>きぬた</sup>が1点出土した。曲物などは検出していないため素掘りの井戸と考えているが、内部が2段掘りになっていることから、本来曲物などが設置されていた可能性もある。埋土の状況から判断すれば、比較的短期間に人為的に埋め戻されていると考えられる。
- SX01 調査区北東隅で検出した水溜めと考えられる遺構で、 $1.7 \times 1.0$ m、深さ0.90mを測る。周囲に深さ0.11m程度の落ち込みあるいは窪地が存在し、SX01が切っている。
- SX03 調査区北東隅で検出した。 $1.3 \times 1.1$ m、深さ1.33mを測る。水溜めと考えられる。周囲が深さ18cmの窪地となっている。
- SX05 調査区北東部で検出した土坑で、径 $0.72 \times 0.46$ m、深さ0.09mを測る。土師器の大型の破片が出土しているが、全体の器形が不明で時期についても明確ではない。
- SX06 調査区南西部で検出した。径 $0.86 \times 0.78$ m、深さ0.99mの遺構である。底付近で曲物を検出したが、遺存状態が悪く取り上げ不能であった。曲物の存在から、水を溜めるための施設などの性格が考えられるが、これまでに当遺跡で検出されている水溜め状の遺構と規模において違いがみられる。何か特別の用途があるのかもしれないが、今後の課題である。遺物は黒色土器（A類）の壺が1点出土しているほか須恵器・土師器の小片が少量出土している。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。
- ピット 調査区東部で多数の小穴を検出したが、遺物の出土したものはほとんどない。基盤層が砂層であることから、大半が遺構ではなく自然の窪地と判断される。遺構として認識できるピットは、10基検出した。
- SP01 調査区検出した。北端部で検出した。径 $0.57 \times 0.45$ m、深さ0.05mを測る。須恵器・土師器・瓦器・磁器が出土したが、細片のため詳細な時期については不明である。
- SP09・10 調査区南部で検出したSP09・10は径0.60m程度の大型のもので、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられたが、同一の建物を構成する柱穴は他に検出していないため詳細は不明である。ともに須恵器片・土師器片がわずかに出土しているが時期については不明である。
- SD01～06 調査区南半部で幅 $0.60 \sim 0.80$ mで、 $3 \sim 4$ m程度の間隔で並走する6条の溝を検出した。これらの溝は検出面が他の遺構の検出面より上層の黄灰色細砂あるいは黄灰色シルト上面であり、時期差がある。ただし、出土遺物からは詳細な時期差を判断することはできない。畑のスキ溝などの性格が想定されるが、詳細は不明である。上面はいくらかの削平を受けているものと考えられるが、北端部は直角に近い角度で立ち上がっているため、想定される畑の広がる範囲は今回SD01～06を検出した範囲とほぼ変わらないことが判断できる。
- なお、後述するように西側で実施した第19次－2調査でも同様の溝を4条検出しており、

合計10条の溝が並走していることとなる。

- SD07 調査区南西隅で検出した溝で、西側の第19次－2調査へ続く。東・西側は屈曲して南側へ流れる向きを変えて調査区外へと延びる。南側は未調査部分であるがさらに南側で実施した第18次－5調査では同様の溝は検出されていない。第18次－5調査の西側隣接地で実施した第17次－5調査では調査区東部で溝を検出しており、規模にやや違いがみられるが、あるいは同一の遺構の可能性も考えられる。鎌倉時代頃の土師器皿などが出土している。
- SD08 調査区北西部で検出した溝である。北・西側は第19次－2調査区へと延びており、19次－2調査区南西部でおそらく削平によって途切れている。今回検出した範囲での長さは34mに及ぶ。2001年に刊行した報告書で弥生時代前期の溝として報告されているSD101と、位置関係から同一遺構の可能性が考えられるが、今回検出した範囲では土師器片と考えられる小片が少量出土しているのみであり中世の遺構である可能性が考えられる。



fig.105 19次－1調査区全景



fig.106 19次－2調査区全景

- 19次－2 19次－1調査区の西・北側で実施した調査である。既存の電柱・電灯が存在するため、一部調査不能な箇所が存在する。

上層遺構面 南半部は上層でも遺構面を確認し、溝4条、土坑1基、ピット1基、スキ溝を検出した。

SD11～14 19次－1調査SD01～06と同様に約4m間隔で並走する幅60～80cmの溝4条を検出した。前述したように両者は耕作に伴う一連の遺構と考えられる。

下層遺構面 北半部及び南半部の下層では、掘立柱建物2棟、水溜め1基、溝5条、土坑状落ち込み1基、ピット4基、スキ溝などを検出した。

SB01 調査区北端部で検出した掘立柱建物で、調査区内では東西4間（約2.1m）×南北1間（約8.6m）の建物であるが、北側の第1次調査地にも延びる可能性が高い。この場合、今回の南側の柱列は、搅乱の影響もあるので即断は難しいものの庇の可能性も考えられる。柱穴から出土した遺物は、細片が多く詳細な時期については不明な点も多いが、おそらく周辺地区で確認されているものと同様に平安時代末～鎌倉時代頃の建物と考えられる。

SB02 SB01の南側で検出した東西1間（約2.4m）×2間（約4.0m）の南北棟の掘立柱建物であるが、周辺に柱穴が確認されなかったことから、柱列の可能性もある。P6から土師器小片が1点出土しているのみであり、時期については不明である。

ピット 以上の2棟の掘立柱建物以外にもピットを4基確認している。SP12など別の建物の柱

穴も含まれるものと考えられる。

**SE03** 調査区北東部で検出した、径1.06×0.96m、深さ0.94mを測る水たまと考えられる遺構である。須恵器・土師器・瓦器が出土している。細片のため詳細な時期については不明である。

**東区** 東区では、前述のSD08のほかピットを4基検出した。ピットのうち3基は掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。SP16・17は同一建物の可能性が高く、またSP18は、位置的な関係から第3次調査SB303と同一の建物を構成する可能性があるが、未調査部分を挟んでいるため断定はできない。SP16からは完形に近い土師器皿が出土している。

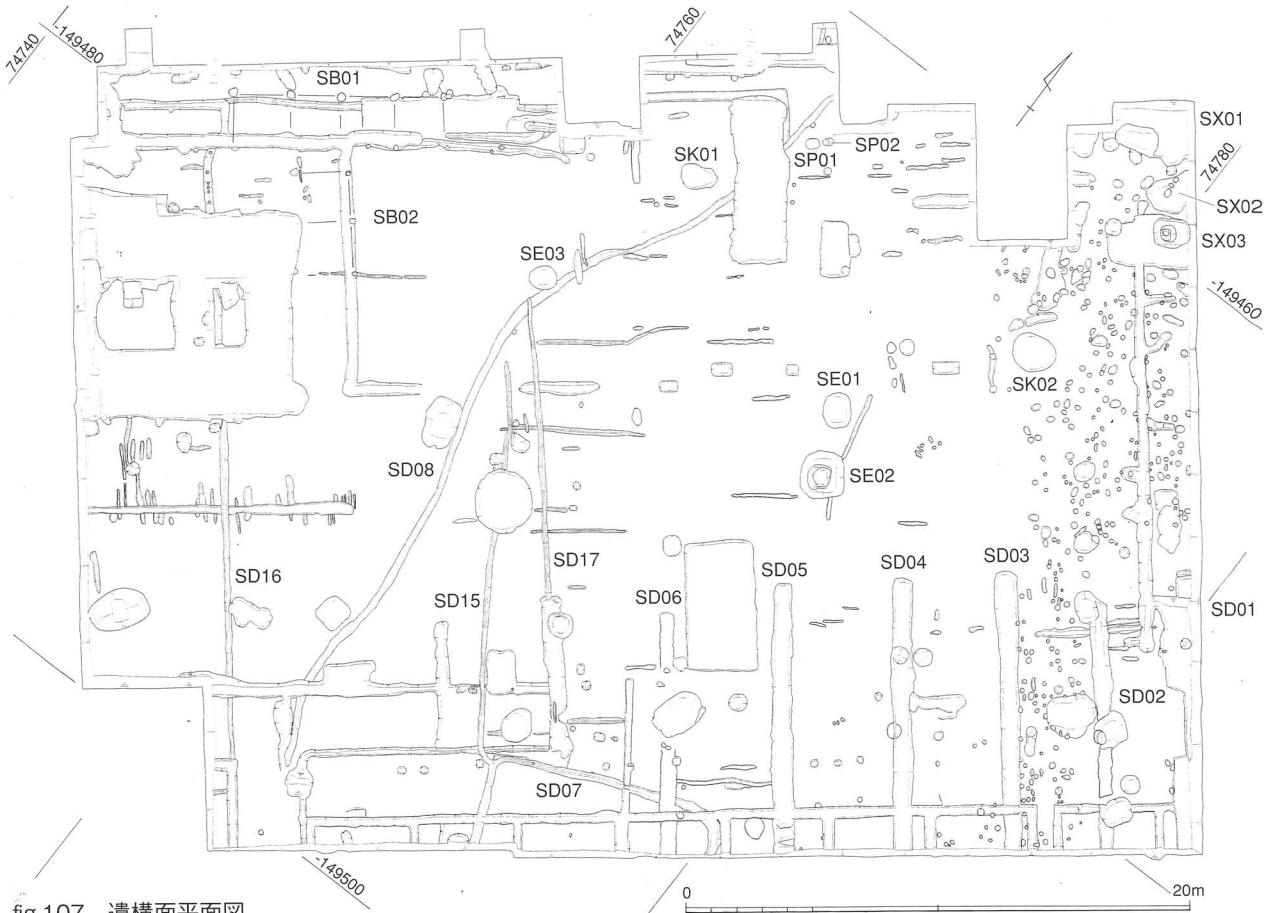


fig.107 遺構面平面図

#### まとめ

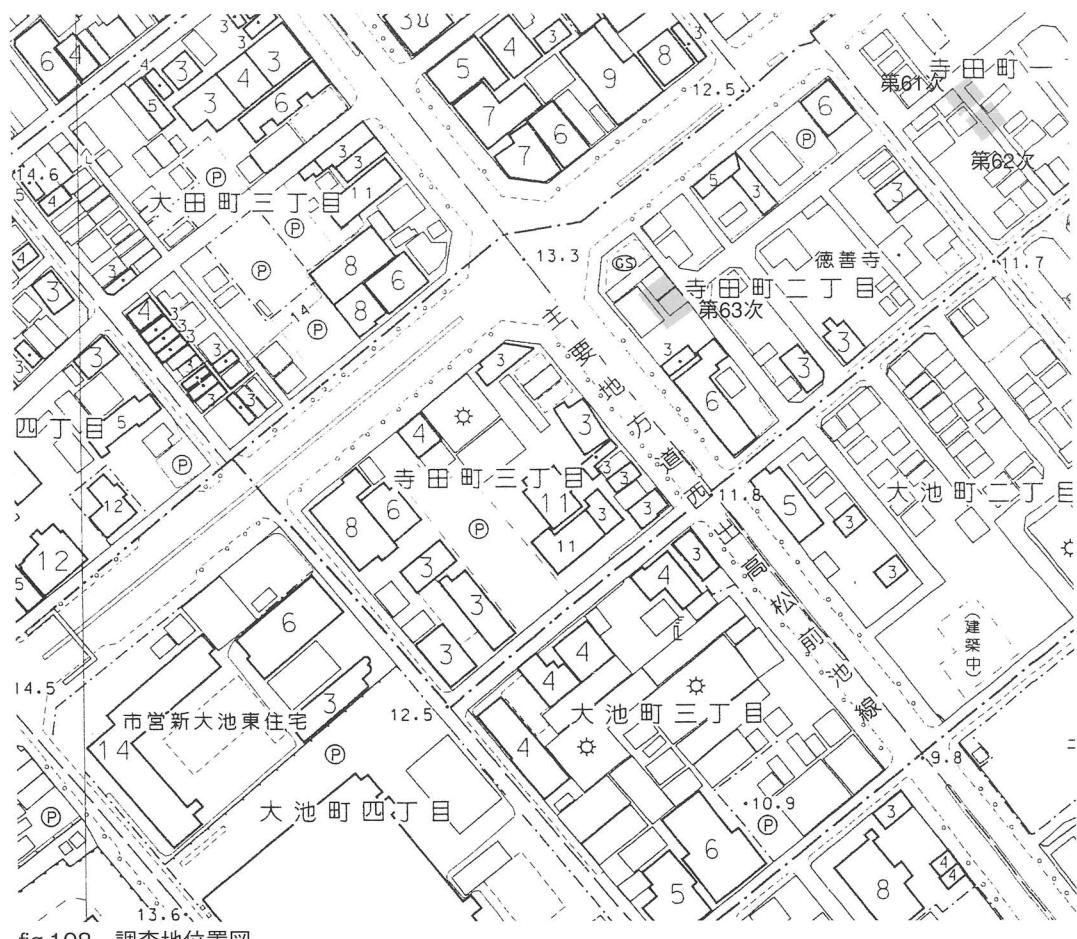
今回の調査では、奈良時代後半あるいは平安時代の水溜めや、平安時代末～鎌倉時代頃と考えられる掘立柱建物、井戸、水溜めなどの遺構を確認した。特に19次－2調査区北端で掘立柱建物の柱穴を確認し、加えて井戸や水溜めといった生活に密着する水に関する遺構が検出されたことは、隣接地区で検出している中世の集落域が今回の調査地にも続いていることを確認できたこととなり、重要な成果である。奈良時代後半頃の遺構については現段階では水溜め1基のみしか確認できていないが、単独に存在したものか、あるいは他に当該時期の遺構が存在するのかについては全体的な遺物整理を行って検討を加えたい。

今回の調査で検出した遺構については、密度的には西側ほど少なくなつておらず、従来から考えられていたように、遺跡の縁辺部に近いところに今回の調査地が相当していることを裏づけられたものといえよう。

## 21. 戎町遺跡

戎町遺跡は、地下鉄板宿駅周辺から南側一帯に広がる広範な遺跡で、弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。特に弥生時代の遺構・遺物の検出量が多く、西摂平野西部に位置する当該期の拠点的集落と考えられる。

近年、当遺跡の南東部の寺田町1・2丁目では、区画整理事業に伴う発掘調査が実施され、弥生時代中期の居住域の広がりが確認された他、方形周溝墓の検出が相次ぎ、弥生時代中期の戎町遺跡における墓域の様相が明らかになりつつある。調査地一帯は、後世の耕作や従前建物の基礎などにより既に遺構面が失われている部分が多く、周溝墓についてもマウンド及び主体部の残存状況は悪いものの、周溝は良好な状態で残っており、溝内に供献土器を伴う例が多く認められる。



### 1. 第61・62次調査

#### 調査の概要

寺田町1丁目での2棟の個人住宅部分の調査で、北側を1区（第61次調査）、南側を2区（第62次調査）とした。

1区の北側では盛土下で灰黄色砂質シルト層の遺構面となり、遺物包含層は存在しない。2区の中央から南側にかけては緩やかな下がり地形となっており、旧耕土層及びその下層で黒色シルト層の遺物包含層の存在が認められた。

埋蔵文化財へ影響を及ぼす建物基礎のうち、地中梁の部分については1区では遺構の輪

郭を検出するに留め、2区では包含層上面で掘削深が達したため、下層については柱状改良部分で全掘を行い、包含層の堆積状況及び遺構についての規模、内容を確認した。

検出した遺構は周溝墓に伴う溝を両調査区で検出し、1区では主体部と考えられる土坑状の落ち込みの輪郭、2区では鋤溝を確認した。

1区 周溝墓に伴う溝を2条、土坑1基を検出した。南北方向の溝（SD01）は検出長約3m、幅約1.3mである。柱状改良部（以下、改良部）での深さは約30cmであるが、形状から最深部までは掘削できておらず、規模は不明である。遺物は出土していない。

土坑は一部を検出したのみである。位置的に主体部と考えられ、東西に長軸方向をとると思われるが、規模は不明である。また輪郭の検出に留めたため、内容については明らかでない。

2区 周溝墓に伴う溝を2条、鋤溝を5条検出した。南北方向の溝（SD03）は検出長約3m、幅約1.3mである。改良部での深さは約30cmであるが、肩部しか確認できなかった。弥生土器とわかる破片がわずかに出土したのみである。

鋤溝を5条確認した。周辺で確認しているものと同様に明瞭な耕作痕を残す溝である。今回の調査区で最長のものは約30m、幅25～30cm、深さは10cmである。古墳時代後期の須恵器坏片が一片出土している。周辺での調査でもこの遺構の時期については不明な点が多いが、古墳時代以降のものであることは周辺での検出状況からも窺い知れる。

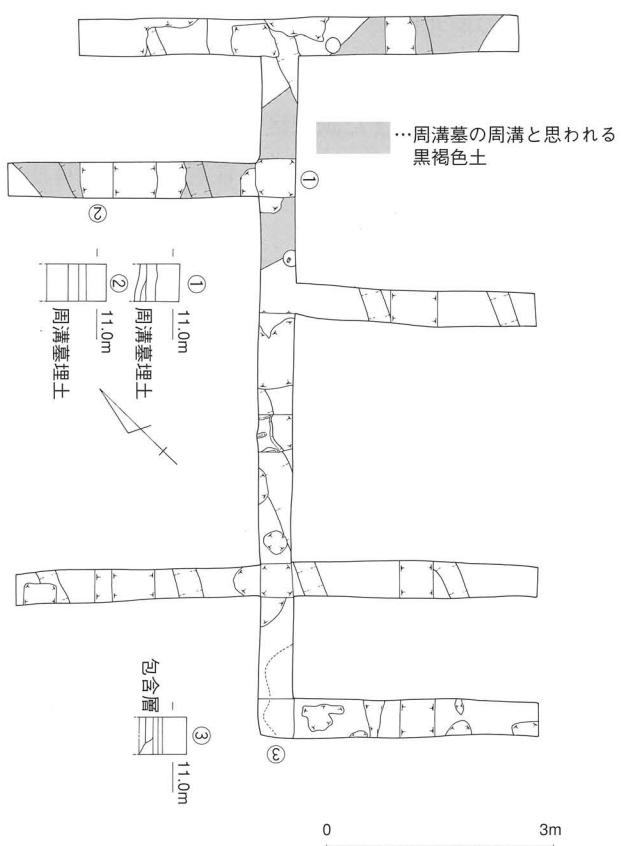


fig.109 第61次調査遺構面平面図・断面図

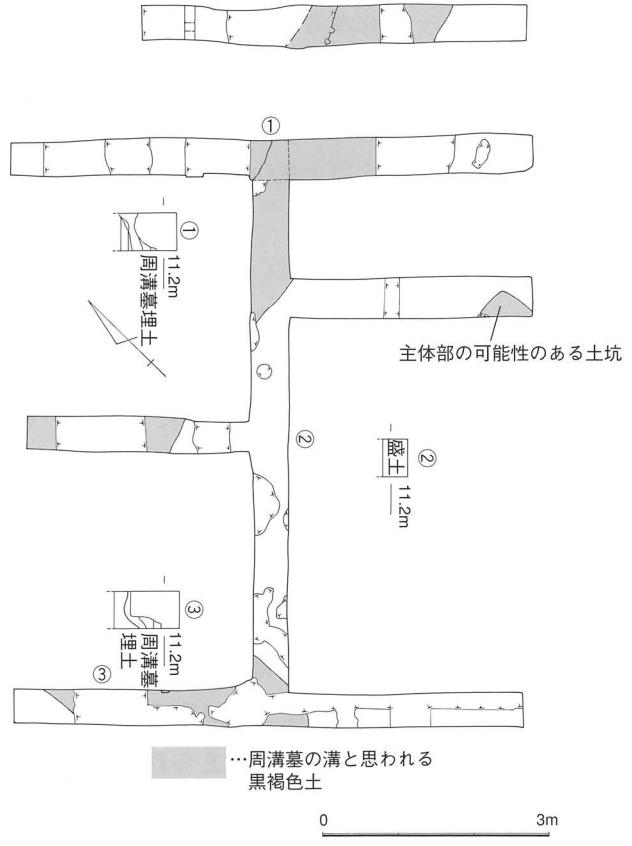


fig.110 第62次調査遺構面平面図・断面図

## 2. 第63次調査

共同住宅建設に伴う発掘調査である。埋蔵文化財に大きく影響を及ぼす建物の基礎部分3箇所を対象として実施した。北側より1～3区と称する。

### 1区

溝1条、ピット1基を検出した。

溝（SD101）は北西隅部で一部を確認したに過ぎず、規模などは不明である。埋土は黒褐色シルトの単一層で調査区内では逆L字状に折れ曲がり、周辺での調査例から周溝墓のコーナー部にあたる可能性が高い。弥生時代中期の壺の底部片等が出土した。

ピットは径約30cm、深さ15cmで灰色砂質シルトの単一埋土である。器高10cmの小型壺が1点出土した。

下層では付近の調査で第2遺構面を形成する黄色シルト層を確認したが、調査区のほとんどの部分が上層の溝SD101で占められるため、確認できた範囲は狭く、遺構の発見はなかった。第1遺構面を形成する茶灰色シルト質細砂層からの遺物の出土量も僅かで、さらに下層は洪水層やシルト質の砂層の堆積となり、安定した地盤になるとは言い難い。

### 2区

包含層である黒色砂質シルト層を除去した灰茶色砂質土面で溝1基、竪穴住居状遺構1基、土坑6基を検出した。

溝（SD201）は、調査区の南西隅において一部を確認した。埋土や方向性等、前述のSD101と共に通する。埋土からは小片の弥生土器が出土した。

調査区中央から東側は緩やかに落ち込む。調査区の中央に位置する搅乱により明確な掘形が検出できず、また住居址とするには内側の床面がやや不安定な傾斜をもつが、竪穴住居になる可能性の高い落ち込みである。調査区の南北両壁に周壁溝状の落ちが見られ、土層と西側の肩部と思われる僅かな堆積層の位置からは、径8m程度の竪穴住居に復元できよう。西肩から土器が流れ込んだ状況で出土している。また調査区の南東隅では小片の弥生土器を含む径30cm以上、深さ約50cmを測るピットを検出しており、住居址に伴う可能性が高い。

土坑群はいずれも調査区の西側で検出した。SK201・202は僅かに落ち込み状を呈するが、その他は明瞭でなく、押し潰された状態の土器が散在し、その周囲が土壤化したものを土坑と捉えた可能性が高い。壺・甕・高杯等が出土している。

また調査区の中央、SD201の東肩に接する部分で黄色シルトを埋土とする溝を部分的に確認した。高杯が1点出土している。

### 3区

溝1条、土坑1基を検出した。

溝SD301は、2区のSD201の南側に続く溝で、北から西へと緩やかな弧を描く。幅70cm、深さ50cmで、調査区内での検出長は約2mである。黒色シルト層の単一埋土で、中から弥生土器片が出土した。

SK301は一部が確認できたのみで全体の規模は不明であるが、深さは30cm、径約1mの円形の土坑と考えられる。埋土は黒灰色シルトで、弥生土器の他、サヌカイト製の石錐が1点出土した。

下層については上層の遺構がほとんどを占めるため、第2遺構面を形成する黄色シルト層の残りは悪い。安定した地盤ではなく、所々に溝状に黑色シルト層が堆積するが、土器

の出土も少なく、明確な遺構面を形成していない。さらに下層は河道、あるいは洪水層の堆積であり、徐々に遺構面（＝生活面）を形成する段階の堆積層と考えられる。

### まとめ

今回の調査では第61・62次調査地で方形周溝墓に伴う溝を確認した。ほとんどの部分が輪郭を検出したのみで、溝1条単位での深さなどの規模については明確にできていないが、周辺の調査で確認している方形周溝墓から連続する溝の平面プランが確認されたことで、一帯での周溝墓の配置や墓の大きさなどを復元する際の基礎的な、推測が可能なデータは得られたものと考える。

また第63次調査地では、方形周溝墓に伴う溝を2条検出した他、竪穴住居状の遺構や土坑等の生活域に伴う遺構を検出した。街路部分で実施した調査でも墓域と居住域に伴う遺構の明確な時期差は確認できておらず、今回も調査区内の同一面で周溝墓、建物に伴うピットが出土したことから慎重に精査を行い、切り合い関係の把握に努めた。今回も遺構面上の土壤化層の影響により判断に窮する部分も多かったが、柱穴に関しては周溝墓の埋没後に掘削され、後出する可能性が高いと思われる状況が確認できた。ただし、2区では竪穴住居状の遺構に切られる黄色シルトを埋土とする溝があり、この溝がSD201・SD301と



fig.111 調査区全景

で周溝墓を構成すると考えれば、住居址よりも先に存在し、一部では墓域、生活域が僅かな時期差で混在するものと思われる。これは街路部分でも同様の結果であり、生活域の拡張、建物の廃棄、墓域の形成が繰り返された場所であったのではないか。住居址、方形周溝墓を検出したことにより、集落構成を考え上でその配置や変遷を考える上での貴重なデータが得られた。

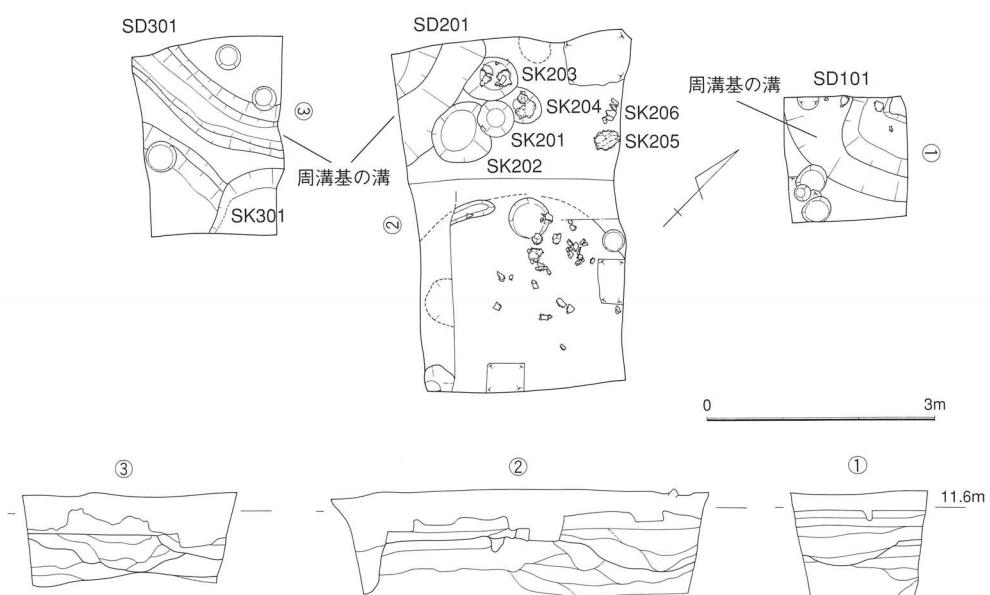


fig.112 第63次調査遺構面平面図・断面図

## 22. 行幸町遺跡

行幸町遺跡は妙法寺川により形成された扇状地の西端部に存在しており、標高約14mを測る。平成12年度から中央幹線築造に伴い調査している遺跡で、これまでの調査結果から、奈良時代～平安時代の集落、大溝の他、鎌倉時代～戦国時代の集落や、近世集落も確認されている。奈良時代の大溝は、総延長200m以上に及び、東流する水路として掘削された可能性が高い。

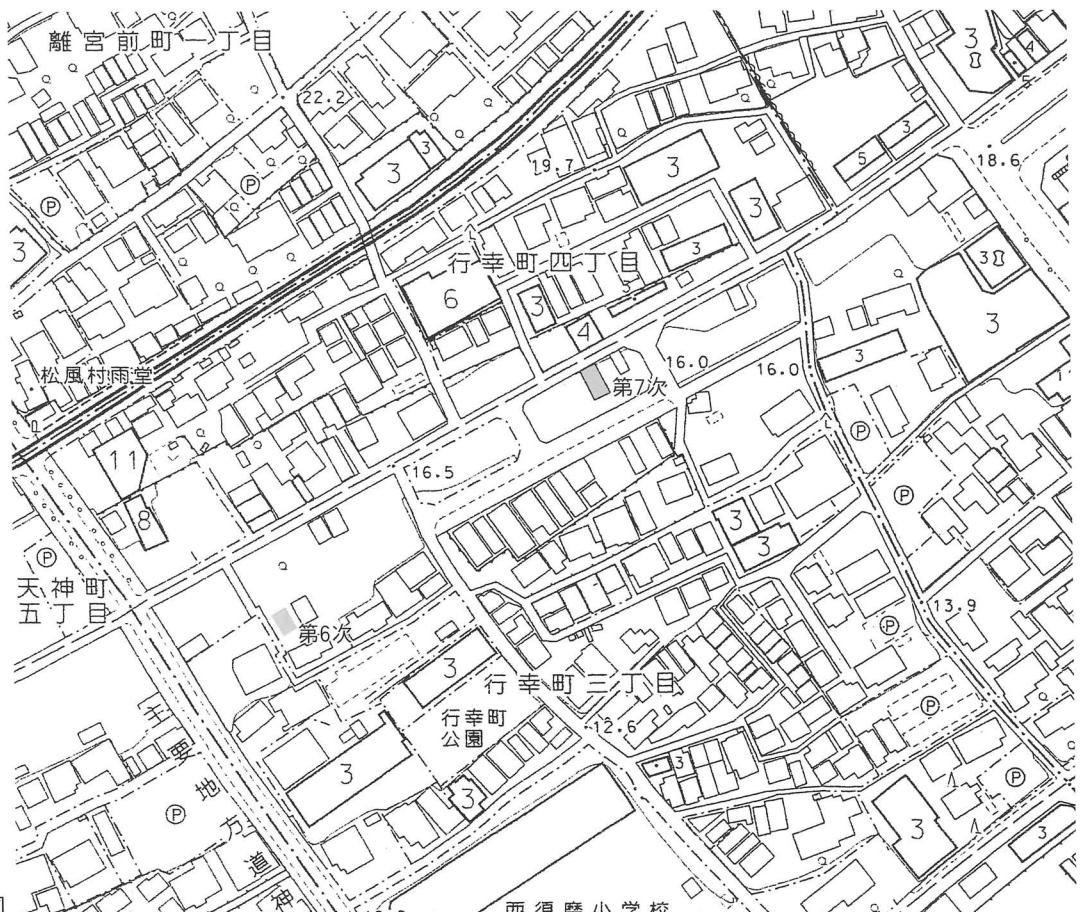


fig.113 調査地位置図

### 1. 第6次調査

#### 調査の概要

個人住宅の建設に伴うもので、基礎により搅乱される範囲について調査を実施した。基層序は搅乱盛土、表土、旧表土、黄茶灰褐色砂質土（近世遺物包含層）、暗褐色砂質土（中世遺物包含層）、黄褐色細砂～粗砂（上面が遺構面となる）である。

#### 鋤溝

幅約20cmで、深さ3cm～10cmを測る。遺物は中世の須恵器と土師器が出土している。集落の居住域を構成する溝や土坑より新しく、居住域から生産域へと移行したらしい。

#### SD02

調査区の東端で検出した溝である。ほぼ南北方向に延びている。幅約70cm以上で、深さ約25cmを測る。中世の須恵器と土師器が出土している。

#### SD03

調査区の西側で検出した溝である。ほぼ東西方向に延びている。幅約60cmで、深さ約30cmを測る。鋤溝や土坑（SK01）に削平されており、より以前の遺構である事実が判る。ただし、周囲の調査結果も含め考えて、中世の範疇には収まる溝であろう。

SK01 調査区の北西端で検出した土坑である。幅東西約80cm×南北約64cmで、深さ約20cmを測る。中世の土師器が出土している。

SK02 調査区の南東端で検出した土坑である。幅東西約74cm×南北約30cm以上で、深さ約5cmを測る。中世の土師器が細片で僅かに出土している。

柱穴 調査区内に散在する状況を確認しているが、建物等としてのまとめは無い。幅約24cm～32cmで、深さ約22cm～25cmを測る。遺物は中世の土師器片が少量出土している。

まとめ 今回の調査では、中世の柱穴や溝、土坑を確認し、中世の須恵器と土師器が出土した。これまでの中央幹線築造に伴う天神町遺跡と行幸町遺跡の調査では、13世紀頃に始まり、16世紀頃まで続く中世集落も確認されている。今回の調査でも、その中世集落に伴う居住域の一角を調査した結果となった。

出土土器は細かな破片が多く、詳細な時期決定は困難であるが、概観すると中世後期を中心とする遺物が多い様である。当該調査地に近接した第4次調査でも、中世後期を中心とした集落の居住域を確認しており、その結果を追認する形となった。

この中世集落はこれまでの調査結果から、離宮道を挟む東西に居住域が確認され、より西側と東側に生産域（耕作地）が確認されている。この離宮道を挟んで西は天神町遺跡、東は行幸町遺跡と区分されているが、中世集落に限定すれば二つの遺跡をまたぎ、同一集落が広がっている状況が確認できる。

遺跡名となった天神町と行幸町は明治5年に制定された、新しい町名である。近世には天神町が西須磨村、行幸町が東須磨村と呼ばれ、『摂津誌』によると、近世の西須磨村は井戸庄、同じく東須磨村は兵庫下庄と分かれていた。当遺跡に存在する中世集落は、この地名の他、『福祥寺文書』や『大中文書』の文献資料にも記録される須磨村であろう。これらの文献資料によると、須磨村は少なくとも鎌倉時代には成立した事が理解できる。これは発掘調査で、13世紀からの遺構と遺物が確認される事実とも一致する。また、遅くとも室町時代には須磨村が井戸庄に含まれていた事や、福祥寺（須磨寺）が須磨村の土地の売買に関与する事例があった事も理解できる。

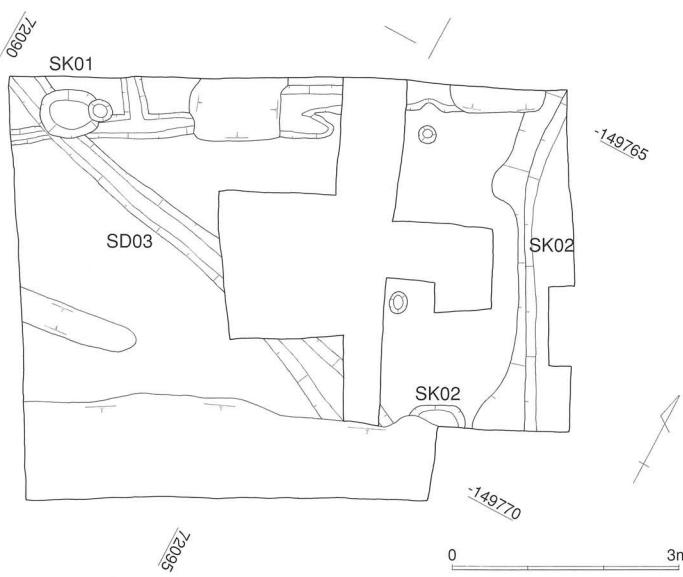


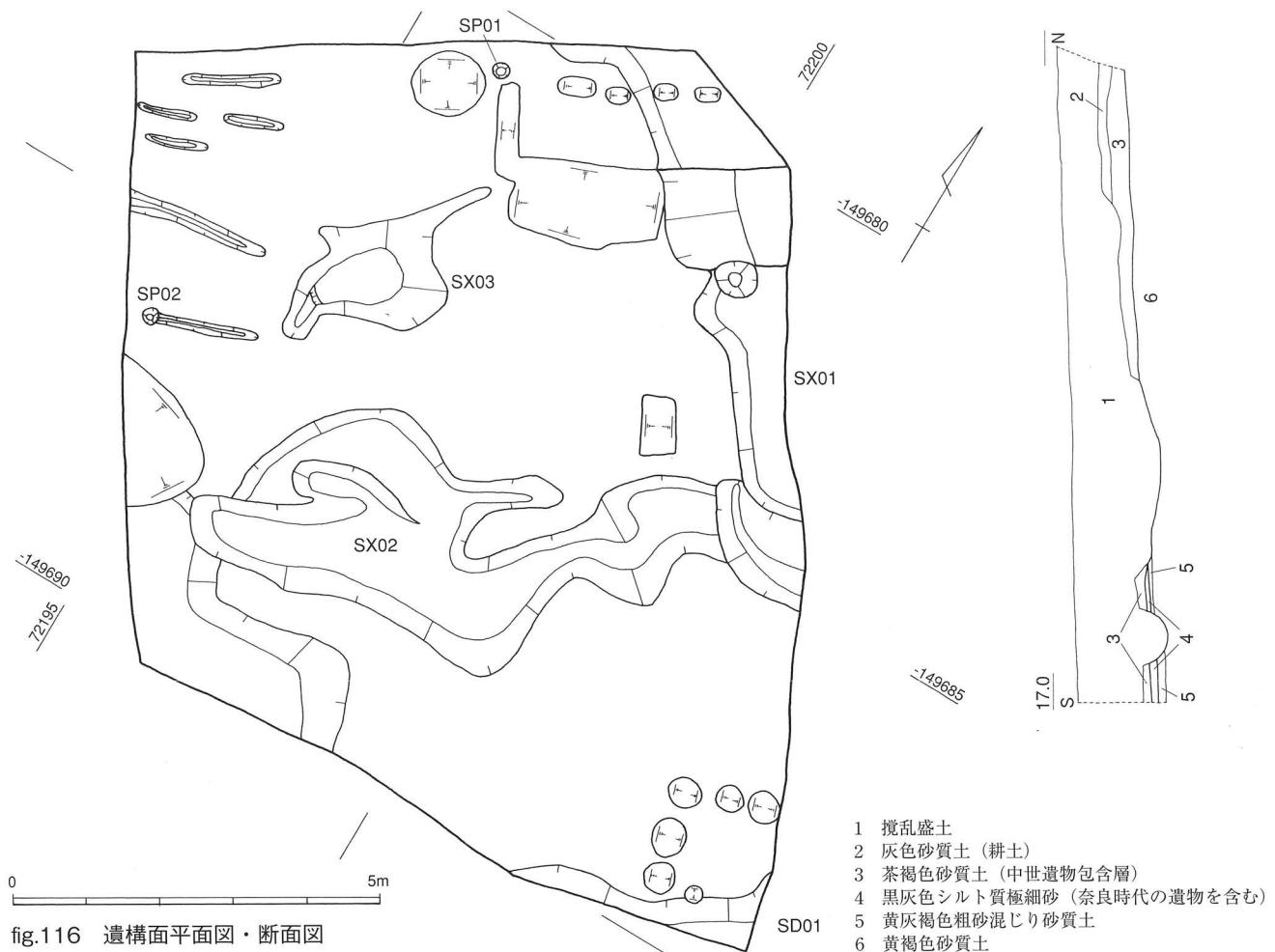
fig.114 遺構面平面図



fig.115 調査区全景

## 2. 第7次調査

調査の概要	中央幹線街路築造事業に伴う調査である。基本層序は上層から、搅乱盛土、灰色砂質土（旧耕土）、灰茶褐色砂質土、茶褐色砂質土（中世遺物包含層）、黒灰色シルト質極細砂（調査区南半だけに存在する土層で、奈良時代頃の遺物を含む）、黄灰褐色粗砂混じり砂質土（無遺物）である。
	遺構は、奈良時代頃の落ち込みと、行幸町遺跡でこれまでに確認されている東西に長く延びる奈良時代の大溝の続きを確認している。また、中世の可能性が高い鋤溝や柱穴も、確認している。
	遺物は茶褐色砂質土遺物包含層から出土した中世土器の他、黒灰色シルト質細砂と落ち込みから、奈良時代頃の細かな土器片も出土している。
SD01	調査区南端で確認した、東西方向に延びる溝である。幅約1.9m以上で、深さ約1.2mを測る。遺物は出土していない。ただし、溝を確認した位置とその延びる方向から、行幸町遺跡でこれまでに確認されている奈良時代の大溝である事は確実である。
SX01	調査区北半の南東端で確認した落ち込みである。上面から中世後期の須恵器と土師器が細かな破片で出土している。より下層はテスティピットにより深さ約70cmまで調査したが、遺物は出土していない。堆積土層は、固く締まった灰色砂質土～黄灰色砂質土である。
	時期は不明であるが、行幸町に集落が営まれる以前の非常に古い旧地形だと考えられる。その為、遺物が出土し、浅い落ち込みとして捉えられる最上層の灰色砂質土以外は、テスティピットでの調査に止めている。
	遺物の出土した灰色砂質土を掘削した状態では、東西幅約1.7m以上×南北幅約6.5m以上で、深さ約10cmの浅い落ち込みとして確認している。
SX02	調査区南半で確認した、不定形の落ち込みである。この調査区南半には、黒灰色シルト質極細砂が広く堆積しており、下面の一部を落ち込み状に検出したものである。この黒灰色シルト質極細砂はSD01も覆って堆積しており、奈良時代頃の須恵器と土師器が出土している。
	不定形の落ち込みとして検出したSX02は、東西幅約9.0m以上×南北幅約1.0m～3.5mで、深さ約10cm～35cmを測る。上面と同じ、黒灰色シルト質極細砂が堆積している。
SX03	調査区北半で確認した不定形の落ち込みである。幅約1.2m～2.0m程度で、深さ約60cmを測る。黒灰褐色シルト質極細砂と暗褐色細砂～粗砂が堆積し、奈良時代頃の須恵器と土師器が細かな破片で出土している。
柱穴	調査区北半に散在する状況で、確認している。SP01は径約20cmで深さ約15cmを測り、SP02は径約22cmで深さ約13cmを測る。共に灰色砂質土が埋土となり、遺物は出土していない。茶褐色砂質土中世遺物包含層の下面で検出しており、中世の範疇に収まる可能性が考えられる。
鋤溝	調査区南半で確認している。幅約10cm～15cmで深さ約3.0cm～5.0cmを測り、ほぼ東西方向に延びている。灰色砂質土が堆積し、時期不明の土師器が、細かな破片で僅かに出土している。茶褐色砂質土中世遺物包含層の下面で検出しており、中世の範疇に収まる鋤溝だと考えられる。



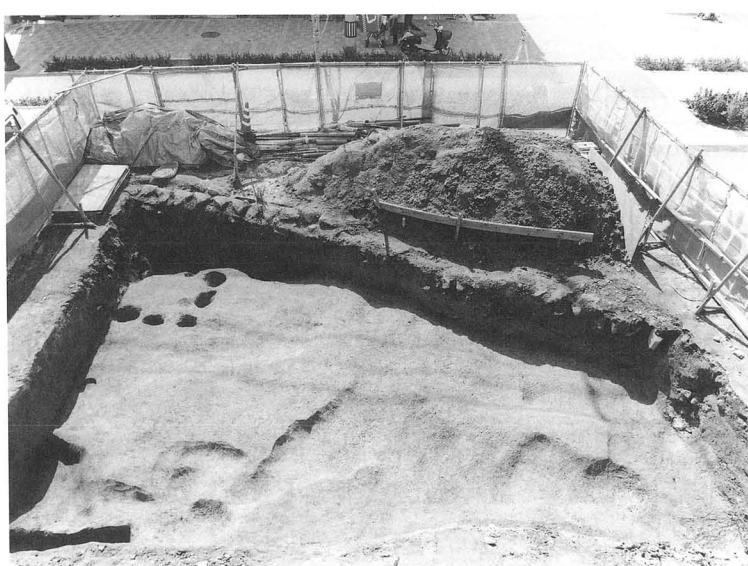
## まとめ

これまでの調査結果から、中世集落の居住域は行幸町遺跡の西半～天神町遺跡の東半に拡がり、古代集落の居住域は行幸町遺跡の東半に拡がる事実が確認されている。今回の7次調査は両居住域の中間地点に位置しており、遺構は希薄であった。中世と考えられる鋤溝を確認しており、基本的に田畠を営む生産域であったとも考えられる。

注目すべき遺構では、奈良時代の大溝の続き（SD01）を確認している事が挙げられる。

この大溝は、行幸町遺跡を東西に貫流する事実がこれまでの調査で明らかとなっており、その復元の一資料となる。

調査区南半を主として、奈良時代頃の遺物を含む黒灰色シルト質極細砂が堆積している。粒子の細かな砂～シルトが一定に堆積しており、大溝（SD01）埋没後の一時期は、部分的ではあろうが、湿地状の地形であった可能性も考えられる。上面を中世遺物包含層が覆い、近接して鋤溝も確認している。中世には当調査区の多くの部分は、生産域へと変化していたらしい。



## 23. 新方遺跡 第45次調査

新方遺跡は、山陽新幹線建設に伴う調査によって明らかになった遺跡である。昭和45年度の調査では、弥生時代中期初頭から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土した。その後に実施された発掘調査で、明石川流域における弥生時代の大規模な集落遺跡として様相が明らかになりつつある。

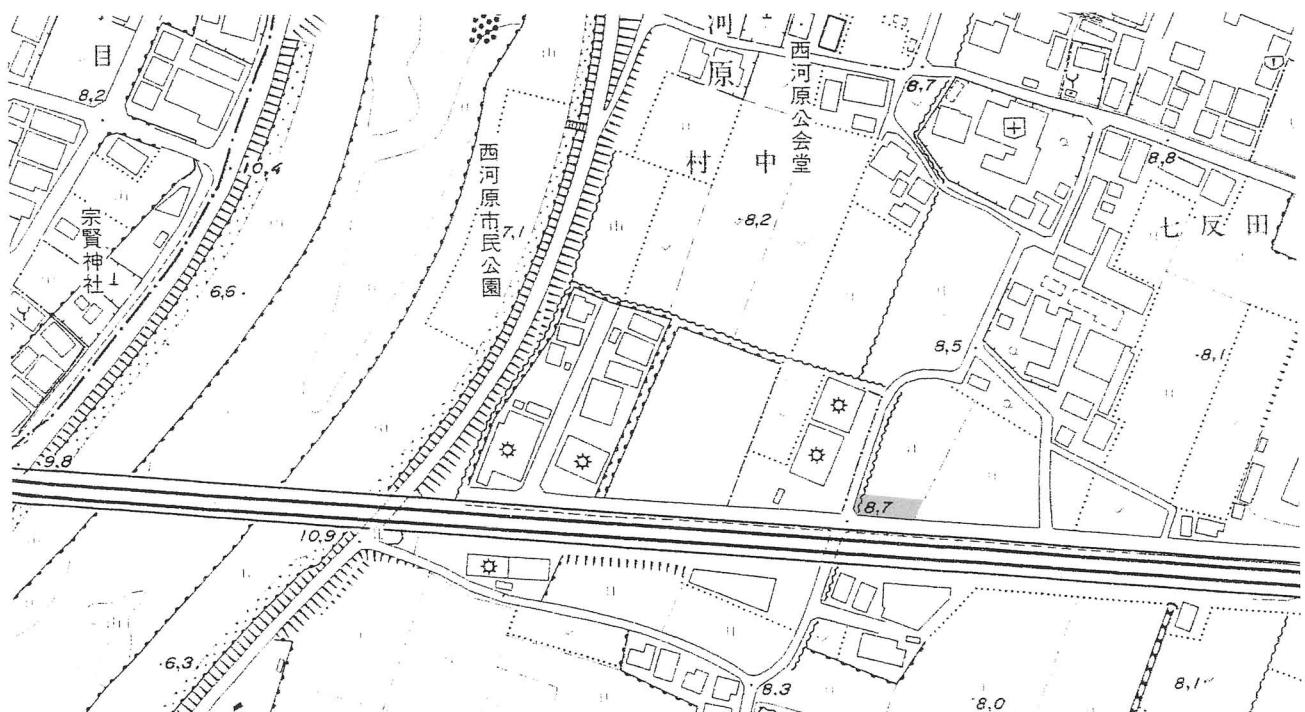


fig.118 調査位置図

### 調査の概要

今回の調査区は、旧称の七反田地区に当たり、昭和52年度の調査では、弥生時代中期の土器、奈良・平安時代の木製品が、平成8年度の調査では、弥生時代前期の壺、弥生時代中期初頭の甕、古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器などが出土した。しかし、平成10年度の調査では、溝などを検出したが遺構の分布状況は希薄な状態であった。

基本層序、現地表面から盛土・耕作土・灰色砂質土・灰褐色砂質シルト・暗灰茶褐色シルト・暗灰緑色シルト質極細砂・青灰色極細砂の順で堆積する。暗灰緑色シルト質極細砂・青灰色極細砂の上面が影響深度に対応する。

### 第1遺構面

暗灰褐色砂質シルト上面で検出された遺構面である。溝1条・落ち込み2ヶ所と、ピット7基を検出した。灰色粗砂が堆積する落ち込みからは、平安時代の須恵器・土師器が出土した。時期は、平安時代の遺構面と考えられる。

### 第2遺構面

暗灰色シルトの上面で検出された遺構面で、堅く締まった土質である。落ち込み1ヶ所を検出した。出土遺物から奈良時代の遺構面と考えられる。

### 第3遺構面

暗灰色シルト上面で検出された遺構面で、柵列1条・鍛冶関連遺構1ヶ所・落ち込み1ヶ所・ピット2基を検出した。出土した遺物から飛鳥時代の遺構面と考えられる。

### SA301

柵列は2間分を検出しており、柱間は1.8mである。調査区が狭小であり、掘立柱建物の可能性がある。

SX301

鍛冶関連遺構は、幅1.8mの範囲に炭・焼土塊が集中していた。埋土からは飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器が比較的まとまって出土した。その中には轍羽口の破片や鉄滓と考えられる金属塊が出土した。床面などで被熱したような状況は確認されなかったため鍛冶炉と断定できなかったが、出土した遺物からは金属加工に関する遺構と考えられる。出土した遺物から飛鳥～奈良時代の遺構と考えられる。

第4遺構面

暗灰緑色シルト質極細砂の上面で検出された遺構面である。溝2条・落ち込み1ヶ所を検出した。いずれの遺構からも極少量の須恵器・土師器片が出土しただけであった。

まとめ

今回の調査では、4面の遺構面を検出し、それぞれの遺構面でピット・落ち込みなどを検出した。遺物包含層からは、奈良～平安時代の土師器・須恵器が多量に出土した。遺物はあまり磨耗しておらず、建物がすぐ近隣に存在していた可能性が高い。

また、第3面で検出したSX301は、大型の土器片と共に羽口片・金属塊・炭・焼土などが出土しており、なおかつ床面が非常に硬く締まっていた。わずかに窪んでいるようではあるが、あまり明確ではない。鍛冶炉本体は確認できなかったが、金属加工の作業空間であったと考えられる。

最下層で検出された遺構面は、飛鳥時代の遺構面よりも下層で検出されたことや、古墳時代後期の土器がわずかながらではあるが出土することなどから、おそらく古墳時代後期に属するものと考えられる。

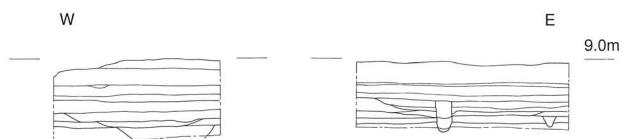


fig.119 土層断面図

W

E

9.0m

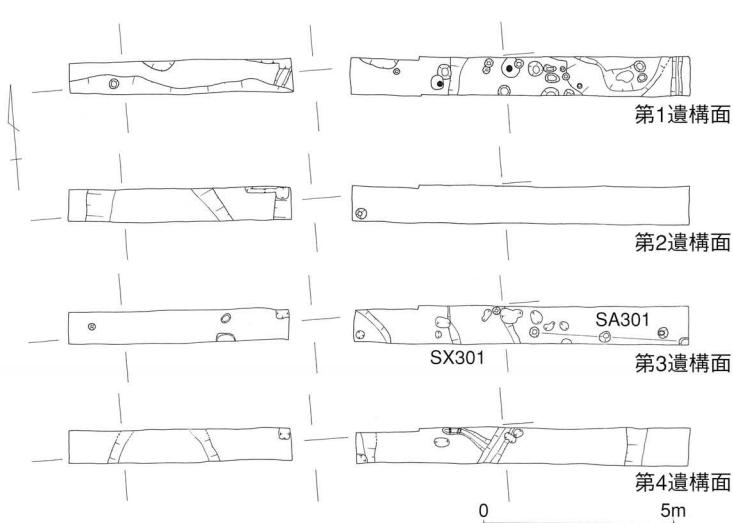


fig.120 第1～4遺構面平面図



fig.121 調査区全景

## 24. 出合遺跡 第34次調査

出合遺跡は、明石川中流域右岸の沖積地に立地する、旧石器時代～鎌倉時代の集落遺跡である。昭和50年度に土地区画整理事業に伴って第1次調査を実施して以来、道路建設や個人住宅建設などに伴って33回にわたる調査を実施してきた。これまでの調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代における韓式系土器の出土など、さまざまな時期の遺構・遺物が検出されており、出合遺跡の状況について多くの知見が蓄積されつつある。

こうしたなか、圃場整備事業が計画され、平成15・16年度に試掘調査を実施したところ、弥生時代、古墳時代及び中世の遺構・遺物が確認された。この試掘結果を受けて、神戸市教育委員会では出合遺跡の範囲を拡大・周知するとともに、埋蔵文化財が工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施することとなった。

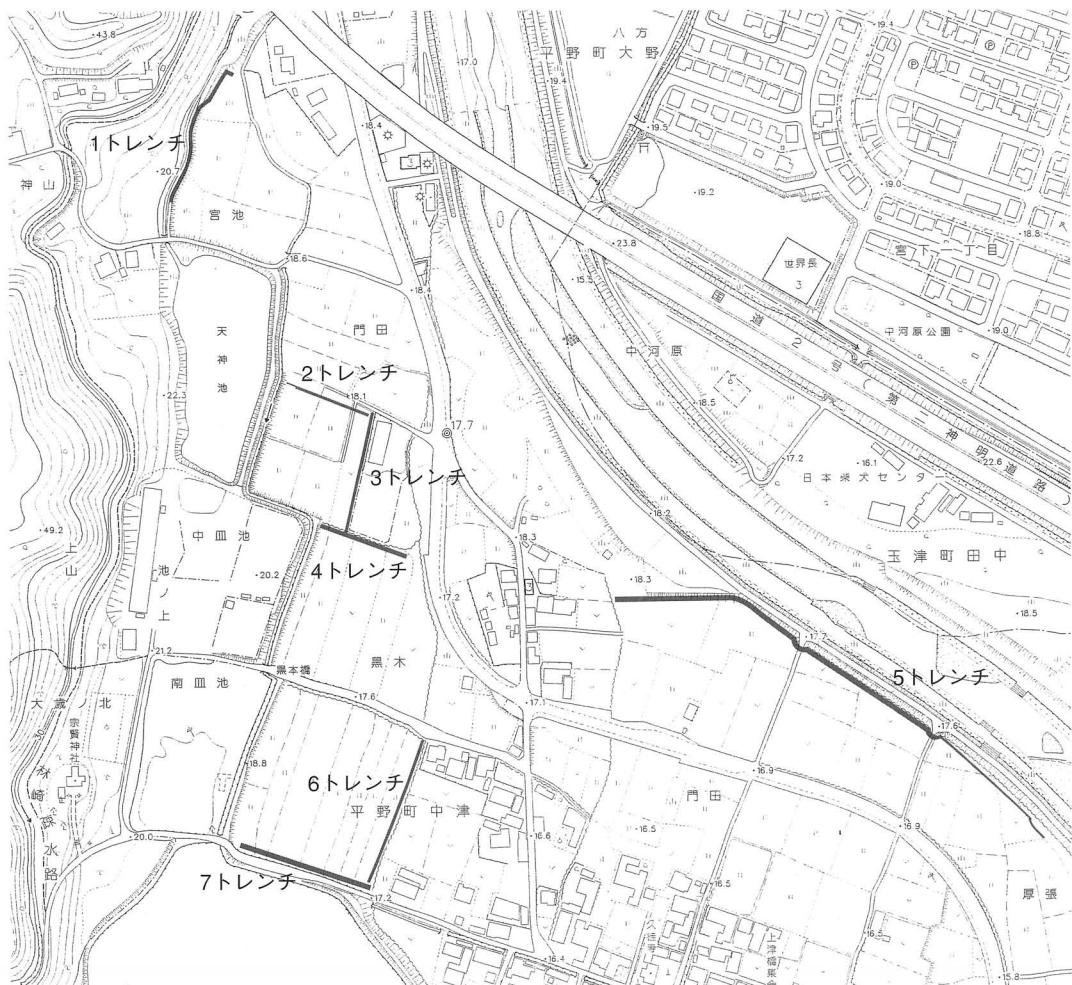


fig.122  
調査地位置図  
(S = 1 : 5,000)

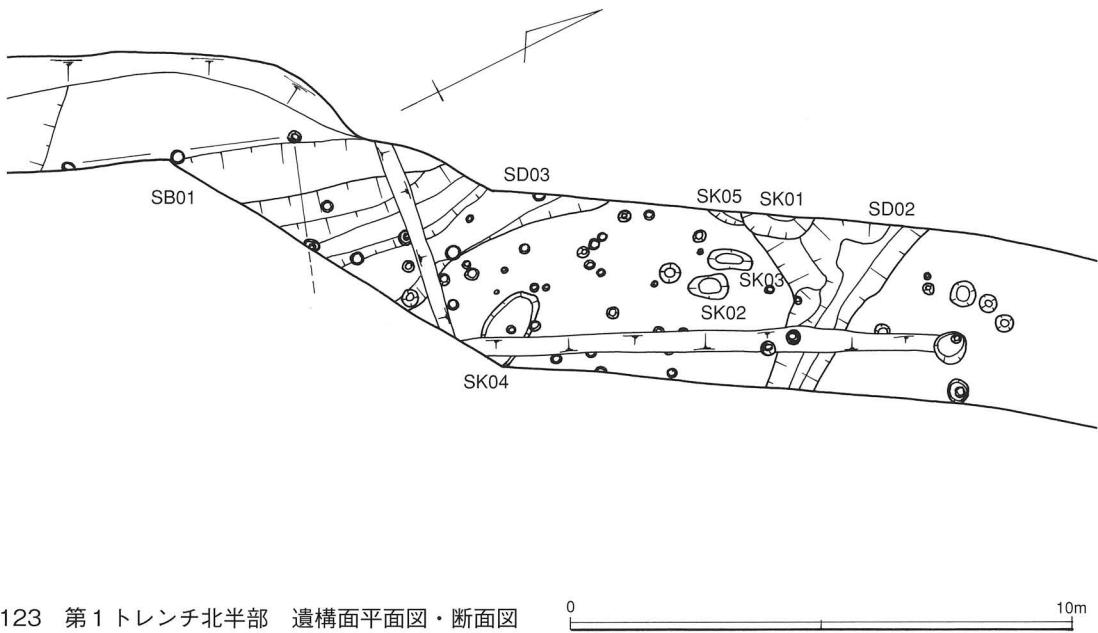
### 調査の概要

今回の調査は、いずれも新設される水路部分について実施したものである。調査区は、数箇所の地区に分かれており、北側の地区より1～7トレーンチと呼称する

### 1トレーンチ

事業地の北端に位置し、丘陵裾に計画された水路部分の調査地である。調査地の南側は丘陵裾の里道部分で、北側は水田部分にあたる。

基本層序は、耕土、旧耕土、灰褐色砂質シルト～粗砂、茶灰褐色シルト質極細砂（第1遺構面基盤層）、暗灰褐色シルト質極細砂、暗茶褐色シルト質極細砂（しまり良）（第2遺



構面基盤層)となる。

#### 第1遺構面

掘立柱建物1棟、土坑5基、溝5条、ピットが確認された。

SB01

東西1間以上、南北2間以上の総柱の掘立柱建物と考えられる。柱の掘形埋土には炭化物や焼土が含まれており、焼失したものであろう。13世紀代の遺物が出土している。

SK04

調査区外に延びるため、全体の規模は明らかではない。長径は1.6m以上、短径0.8m、深さ0.1mの断面が浅い皿状の楕円形土坑である。時期は8世紀と考えられる。

#### 第2遺構面

第2遺構面では、土坑1基、溝6条、自然流路1条が確認された。

SD203

第1遺構面のSD03の下層を流れる溝で、幅2.5m、深さ0.8mの溝で、南北方向に調査区外に延びている。埋土はシルト質極細砂と細砂の互層からなる。溝の底付近で完形の須恵器坏身が1点出土している。溝の時期は6世紀末頃であろう。

SR201

最大幅5.6m、深さ0.8mの自然流路で、トレンチを横断してほぼ東西方向に流れている。埋土は砂質シルトと極細砂が中心で、中層から下で完形の須恵器が数点出土している。遺物の時期は6世紀末頃である。

#### 2トレンチ

長さ約60mの排水路部分の調査区である。2面の遺構面が確認された。

#### 第1遺構面

淡灰色シルト質細砂上面を基盤層とする遺構面で、溝8条、ピット3基を検出した。

SD02

北東～南西方向に流れる溝で、調査区外に延びるため本来の規模は不明であるが、調査区内では最大幅1.85m、深さ49cmを測る。出土遺物から、奈良時代の遺構と考えられる。



SD03	調査区西部で検出した北東～南西方向に流れる溝で、調査区内では最大幅2.35m、深さ56cmを測る。6世紀末の完形に近い須恵器坏身が出土している。
第2遺構面	灰褐色シルトあるいは黄褐色シルト上面を基盤層とする遺構面で、溝2条を検出した。
3トレンチ	1トレンチの約200m南東で実施した調査である。3面の遺構面を確認した。基本層序は、耕土、旧耕土、淡灰色シルト質細砂、灰色シルト、灰褐色シルトである。
第1遺構面	淡灰色シルト質細砂上面で溝5条を検出した。平安時代後半～末頃の遺構面と考えられるが、遺構からの出土遺物が小片のため、詳細な時期については不明な点が多い。
第2遺構面	灰褐色シルト上面を基盤層とする。上層の遺物包含層から古墳時代後期の土器が出土しており、当該時期の遺構面と考えている。水田畦畔及びその痕跡を計4条検出した。
第3遺構面	第2遺構面基盤層の灰褐色シルトの下層で遺構面と考えられる層を検出した。中央部南半で落ち込み2ヶ所、調査区南端で溝1条を検出した。



fig.125  
第5トレンチ2区

4トレンチ	3トレンチの南側の調査区で、基本層序は、耕土、灰色シルト質極細砂、(淡)灰色シルト質極細砂、淡(黄)灰色シルト(第1遺構面基盤層)、淡灰褐色シルト、灰褐色シルト、淡灰色シルト質極細砂(第2遺構面基盤層)である。
第1遺構面	溝3条、落ち込み1ヶ所を検出した。鎌倉時代頃の須恵器・土師器などが出土している。
第2遺構面	西部の3トレンチで検出したSD06の南側延長部分が確認された。
5トレンチ	今回、調査を実施した範囲では最も東側に位置する明石川の堤防沿いの調査区である。
1区	遺物包含層は希薄で、遺構は確認されなかった。
2区	幅3.5mの調査区で、土坑1基、溝1条、河道2条などを検出した。
SK201	調査区中央部で確認した土坑である。全体の規模は不明であるが、長径1.8m以上、短径1.8m、深さ0.4mの長方形に近い土坑と思われる。ミニチュアの壺が1点直立した状態で出土している。時期は古墳時代初頭と思われる。
SR201	第1遺構面のSR01によって河道の肩付近を大きく削平されているが、残存している規模では、最大幅3.5m、深さ0.7mの河道である。河道の底からは人為的に置いたものと思

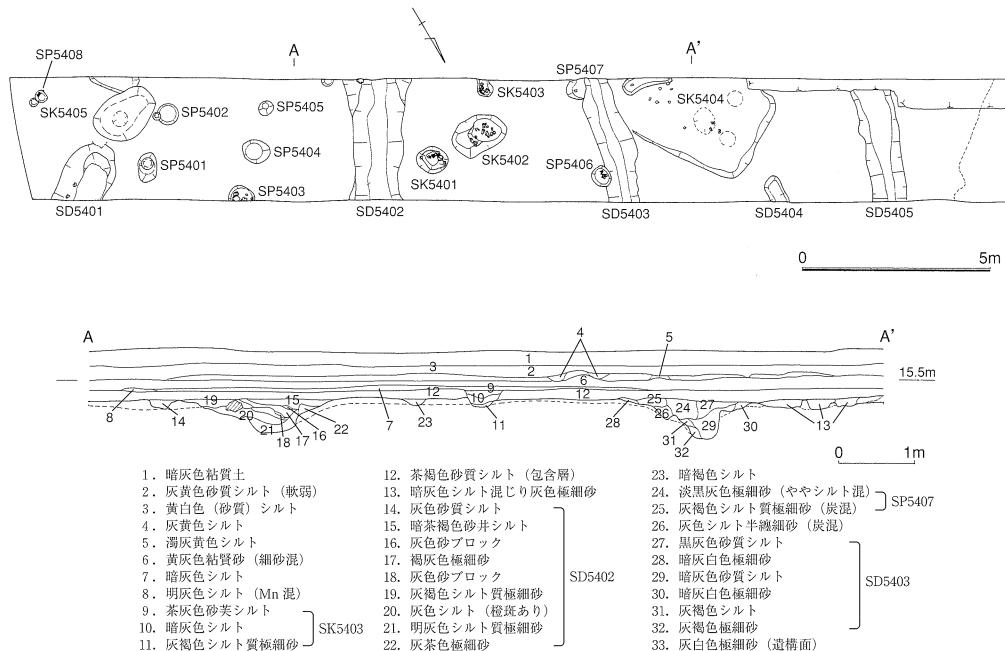


fig.126  
第5トレーンチ4区  
第1遺構面平面図

われる完形品及び完形に近い土師器が14点出土した。

**3区** 3区の基本層序は現耕土、橙褐色砂質シルト（旧床土）、暗灰褐色砂質シルト（遺構面）となる。遺構面からは土坑1基、溝7条、ピット4基が確認された。15世紀頃と思われる。

**4区** 現耕土、現床土、灰色粘質土（旧耕土層）の下に黄灰色シルトが0.2mの厚さで水平に堆積する。非常に軟弱な土壤で、この層の下面で畦畔状の隆起が認められた。下層でさらに古い水田層が確認されているが、いずれも遺物を全く含まず、時期は不明である。床土下0.5mに堆積する茶灰（褐）色シルトに弥生時代前期後半の遺物を含む。直下の灰色シルト質極細砂～灰白色極細砂上面が遺構面となる。溝5条、土坑5基、柱穴を検出した。

**SD5403** 幅1m、深さ0.5m、断面U字形の溝である。出土遺物はほとんどなく、詳細な時期は不明である。SD5401、5402を含めた3条の溝は約5mの間隔で並行して掘削されている。

**SK5401** SD5402とSD5403間に3基の土坑を検出した。SK5401は径約0.8m、深さ0.4mを測る円形の土坑である。平底で、北側の一部に径0.15mの杭状の掘り込みが認められる。遺物は埋土上層よりまとまって出土しており、甕や鉢が出土している。

**SK5402** 長径1.5m、短径1m、平面橢円形の土坑である。深さは0.4mを測る。北側の底部は平たく、土坑壁も直立する。遺物は北側のやや深くなった部分からまとめて出土した。

**SK5403** 径0.4m、平面調査では深さ0.1mほどしか確認できなかったが、調査区の土層を観察した結果、包含層上層より掘り込まれており、深さ0.3mを測る遺構であることが判明した。西側に延びるものと思われ、形状、規模については不明である。甕などが出土地している。

**5区** 現水路を挟み4区の東側に続く調査区である。床土直下で12～13世紀代の遺物を含む暗灰色シルトの遺物包含層を検出し、その下層、灰黄色シルト（第1遺構面基盤層）面で多くの遺構を検出した。調査区の北側は緩やかに落ち込み、4区で検出した黄灰色シルトが堆積し、水田を形成する。第1遺構面の下層には4区と同様、水田層が続き、その下で灰白色極細砂を基盤層とする弥生時代前期後半の遺構面（第2遺構面）を検出した。

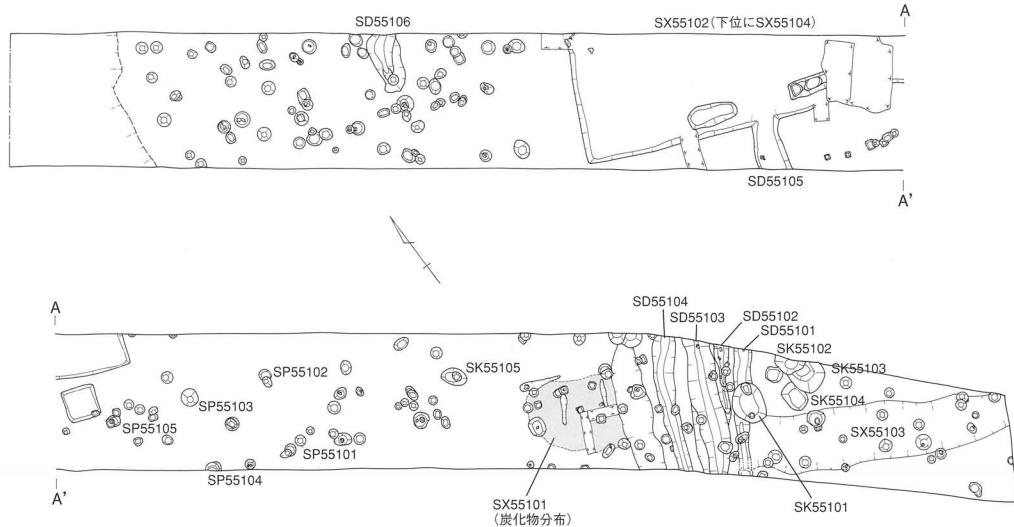


fig.127 第5トレーンチ5区 第1遺構面平面図

**SX55101** 南北2.5m、東西2mの範囲に炭の拡がりが認められる。炭の堆積は薄く、落ち込む状況ではなかった。周辺の遺構面とはやや異なる粘土質の土が炭の分布範囲とほぼ同じ大きさで拡がり、土間状の貼り床があった可能性がある。遺構面上で砥石が1点出土した。

**第1遺構面** 灰黄色シルト層面で溝、柱穴、土坑を検出した。

**SK55101** SD55101を切り込む土坑で、長径1.1m、短径0.8m、深さ0.2mである。埋土は灰色砂質シルトである。小片ながら須恵器、土師器が出土しており、13世紀代の遺構と考えらる。

**第2遺構面** 灰白色極細砂面で溝1条、土坑3基、柱穴を検出した。遺構からは弥生時代前期後半（I様式新段階）に属する遺物が出土している。

**SK55202** 径約1mの円形の土坑と考えられる。遺構はさらに南側に延びる。完形に近い甕や壺が出土している。埋土に炭を含み、底部の炭は土坑の壁に喰い込み、断面形態としてわずかに袋状を呈する。

**6区** 農道を挟み5区の東に位置する調査区である。黄褐色粘質土（床土）の下に、複数の耕土層があり、わずかな厚みで酸化、土壤化を繰り返している。基本的には灰黄色粘質土（旧耕土）、灰黄色～灰色砂質シルト（第1遺構面基盤層、第2遺構面遺物包含層）が堆積し、灰色シルトの薄い土壤化層を取り除いた黄灰色シルト面が第2遺構面となる。

**第1遺構面** 水田耕作に伴う鋤溝と鋤溝よりや幅広の溝を検出したに留まる。南半で検出した溝は幅0.8m、深さ0.15mで、灰色極細砂を埋土とする。13世紀代の遺物が出土している。

**第2遺構面** 溝、土坑、柱穴を検出した。

**SK56201** 調査区西側で検出した土坑である。東西長3m、深さ0.3mで調査区南側に延びる。12世紀代の須恵器、土師器の他に瓦器塊が出土している。南東隅に若干張り出す部分があり、別遺構が重なる可能性もある。北壁際で柱穴を7基確認したが、その他の部分では検出されておらず、土坑に伴うものかは判然としなかった。

**7・8区** 6区と7区との間には現況で段差が存在し、周辺の地形とも考え合わせると明石川の氾濫・浸食によるものと判断され、遺構面が既に削平されている可能性が考えられた。その

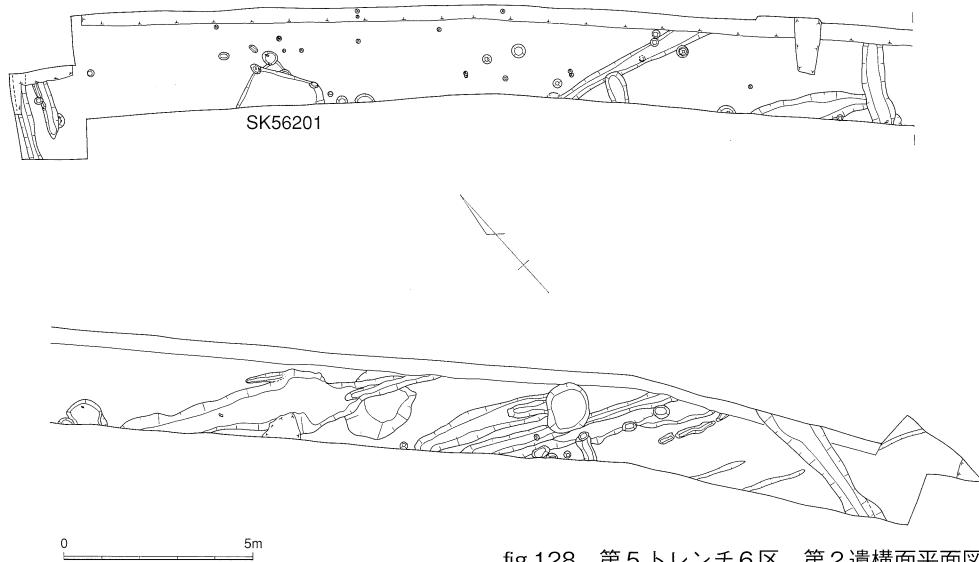


fig.128 第5トレンチ6区 第2遺構面平面図

ため、試掘調査を行った結果、7・8区とともに耕土あるいは床土の直下で砂あるいは砂礫から構成される土層が検出され、明石川の氾濫原にあたっているものと判断される。

#### 6トレンチ

大池の北側の水田に計画された南北方向の水路部分の調査区である。遺構は土坑4基、ピット7基、河道1条である。遺構はトレンチの中央部に集中している。トレンチの北部では遺構面が東側に落ちている。

#### 河道

トレンチの南端部で河道を確認した。河道は厚い砂礫層で埋没していた。7トレンチで確認した河道の落ちと6トレンチで確認出来た河道肩から類推すると、幅約18mである。

河道の肩付近からは完形の須恵器や土師器が数点出土している。これらの土器は、河道の肩付近で置いたような状況で出土しており、祭祀的な行為があった可能性もある。遺構と同じ6世紀末頃のものである。

#### 7トレンチ

大池の北側に計画された水路部分の調査区である。基本層序は、現耕土、旧耕作土、暗灰褐色シルト質極細砂（細砂・マンガン混）となる。

トレンチの東端部で旧河道を確認した。6世紀末頃の遺物を含む砂礫層で埋没している。

#### まとめ

今回の調査により、上津橋集落の北側においては丘陵裾部や、明石川の流れにより形成された自然堤防上を中心として古くから集落が展開する様子が明らかになった。

明石川沿いの低地に立地する微高地上では弥生時代前期後半の遺構・遺物の検出があり、全体の規模は不明であるが、早くから明石川右岸中流域においても集落が形成される状況が確認された。近接する印路遺跡や今回の調査地の対岸に位置する玉津田中遺跡などとの関連が注目される。

北側の丘陵裾部では古墳時代～奈良時代、平安時代～鎌倉時代にかけての集落の一端が確認された。遺構・遺物の残りもよく、周辺にさらに広がるものと想像される。また、集落に近接して、丘陵と明石川の間には広い範囲に後背湿地が広がり、水田耕作に適した土地であったと想像される。今後の調査の進展により、さらに当該地域における細かい集落形成、変遷の状況が把握できるものと考える。

## 25. 端谷城跡 第5次調査

端谷城は明石川の1支流、櫛谷川によって形成された東西に広がる櫛谷の最奥部にあり、北から南に伸びる丘陵の背後を大規模な堀切によって切り離した先端部に築城された山城である。16世紀後半、三木の別所氏に与した衣笠範景の居城と考えられている。現在本丸、二の丸や西の壇などの曲輪が良好な状態で残されている。

平成13年度以来、城の構造の把握を目的とする発掘調査を継続的に実施しており、16年度は平成15年度末で一端中断していた調査を再開する形で実施した。平成15年度には最高所にある「物見台」の東側に設定した調査区で埠列建物が検出され、その内部に設定したトレーナーで甲冑の存在が確認されていた。

16年度の調査はこの調査を受け継ぐ形で実施する事となったため、前年度末に埋め戻したトレーナーを再度掘削し、残された遺物の取り上げを行うことを基本とした。そして、埠列建物の規模と甲冑の残存状態の確認、及びその取り上げ、保存処置に主眼を置いて調査区の拡張を一部行い発掘調査を実施した。また調査の進展に伴い埠列建物内の甲冑が多量かつ良好に残存する事が明らかとなつたため、他のトレーナーの調査を中断し甲冑の調査に専念した。

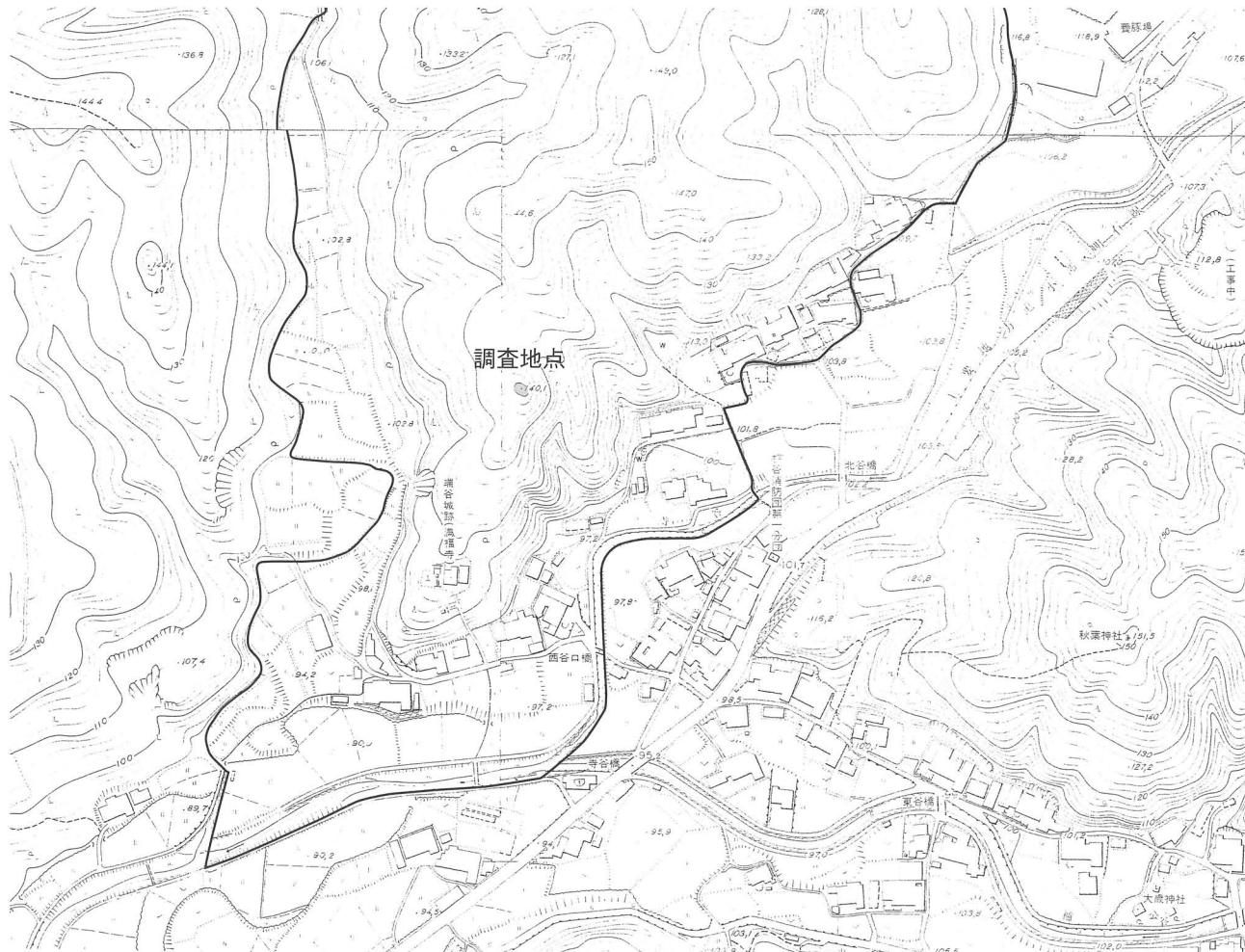


fig.129 調査地位置図 ( $S = 1 : 5,000$ )

## 調査の概要

今年度の調査は平成17年3月29日まで実施した16年度調査を継続する形で、平成17年4月4日から調査を開始した。

## 1 トレンチ

物見台頂部から南方裾部に向かい設定されたトレンチで、裾部から灰白色粘土層と多量の瓦が検出されていた。前年度の調査でほぼ完掘状態であったが、物見台裾部で検出した上下2枚の炭層のうち上層を完全に除去し、下層炭層についても一部トレンチ壁面下に幅約20cmの断ち割りを行う際に除去した。上下炭層に伴う遺物はなく、炭層の時期については明らかにし得なかった。

## 塹列建物

一辺約29cm、厚さ約2cmの方形塹を地中に埋め、建物の外壁とするものである。前年度に建物規模を確認する目的で西および南側を拡張した。方形塹は1枚の部分と2枚の塹が縦積みにされた部分が見られる。塹列は北辺、西辺がほぼ完存しており、東辺も南半が残存していた。北辺・西辺の塹列は2枚が縦積みされているのに対し、東辺は1枚のみ確認された。各塹列の内側には一辺20～40cmの礎石が塹列に添って配置されるが、塹列倒壊の防止のため内側の埋土を幅20cm程度残したため、礎石配列の詳細は不明である。

また、建物南辺については塹列が残存しておらず、高さ約50cmの東西方向の段落ちとなっていた。この段下には浅い東西方向の溝が走り、溝南辺に石列が設置されていた。よって塹列建物の規模については南辺を確定したい点は残るが、この段落ちまで復元すれば東西約6.2m、南北約9.2mと考えられる。この下には浅い東西方向の溝が走り、溝南辺に石列が設置されていた。

建物内部の床面は北・西・南側がコの字形に20cmほど高くなっている。この高床部には小石が敷き詰められていた。1段低い東側床面の一部にも小石が見られたが流土内のものと判断した。石敷き面には南北方向で幅約10cmの窪みが約50cm間隔で数条確認でき、窪み内や石敷き面付近から多くの鉄釘が出土した。これより高床部はまず一面に小石を一層敷き転ばし根太を設置した後、根太間に小石を充填し、その上に板張りを施したものと推測される。転ばし根太痕は中央部で南半と北半に別れているが、両者とも建物の長軸方向と平行に設置されている。

石敷き面の一部に炭化材が集中する部分があり、かつ西辺塹列の外側に薄い炭層が広がることもある。建物の焼失も想定されるが、量的に多くなく、甲冑の下から検出される場合が多いことや材そのものが細く建築材とは考えにくい点から、これも小石同様、除湿効果を期待するものと推定される。ただこれについては炭化材の樹種同定を経た上で再度検討が必要である。

塹列建物の東半部床面は地山で、中央に南北に並ぶ一辺30～40cmの2基の礎石が検出された。礎石配列方位は建物の長軸方位から東に若干振れるが、建物2階の床面を支える柱に伴うものと推定しておく。東南隅の南北約2m、東西約1mの範囲には石敷きが残り、その東に南北方向の塹列が長さ約3mで埋設されている。

塹列建物東辺のほぼ中央部に、東側に約50cmの張り出し部分が想定できる小石の並びが認められる。南北の推定幅は建物中心ラインで折り返すと約1.8mとなり、入り口等の施設が想定される。また東辺塹列の北半の空白部に塹の有無を確認するためトレンチを入れたが、塹列はなかった。



fig.130 遺構面平面図

瓦

塹列建物周囲の北辺、西辺及び南辺の段落ち下に、塹列建物及び西側の物見台から転落したと判断される鬼板を含む多量の瓦類が堆積していた。検出された瓦の内、軒平瓦は殆どのものが神戸市西区押部谷町性海寺（鐘楼付近採集）や加古川市鶴林寺（護摩堂・常行堂）のものと同文である。鶴林寺の瓦は1563年・1566年とする意見が出されており、塹列建物及び物見台の構築と整備時期を推定する上で参考となる。

塹列建物北西隅や東側の盛土中からはこれと異なる文様の軒平瓦が出土している。前者は神戸市北区淡河町石峯寺と同文、後者は当端谷城西の壇の調査時に検出されているものと同文である。

また、鬼板は「恵比寿像」や「宝袋」を浮き彫りとするやや特殊なものである。「恵比寿文」鬼板は広島県東広島市四日市遺跡や大阪府枚方市旧問屋役人屋敷などで類例が知られるが、いずれも近世のもので、中世に遡る例については探索中である。一方「宝袋文」鬼板は奈良県大宇陀町の宇陀松山城本丸跡で出土例がある。宇陀松山城は小堀遠州によって江戸初めに城割りが成されており、「宝袋文」鬼板は16世紀代と考えられ、当端谷城例と時期的に近いものと思われる。

建物外の東側に設定した土層確認のためのトレーナーでは、地山直上に焼土、炭層がありその上に盛土が施されていることが確認されている。またトレーナーの土層状況から、塹列建物の立地範囲はこれ以前に於いても本丸東半部に比べ一段高くなっていたものと推定され、塹列建物以前になんらかの建物があった可能性が想定されるが、現時点では確定できない。

また、塹列建物の北外側に計6基の一辺50cmほどの礎石が検出され、それらは約90cm間隔で配列されているものと推定されるが、その性格は不明である。

**塹列建物内  
の甲冑** 建物北側および南側段落ち部から甲冑の部品が計2～3点検出したが、大半の甲冑を構成する鉄製小札類は塹列建物内の石敷き面の北半部から検出された。また鉄製小札類と共に金具廻の胸板、脇板、押付板や八双金物、責鉗・笠鉗、革製小札などが検出されている。甲冑は確認できるものは「胴丸（現在は腹巻と呼ばれているもの）」で、その他の兜鉢（鎧の有無は不明）、鍔形、杏葉（腹巻の付属品）は見られず、袖も冠板の不在からないものと思われる。草摺については朱漆の描菱がある革小札板があり存在が推定される。その他の武器類については現時点では確認できない。

「胴丸」は、背面の肩部に左右2枚の押付板と呼ばれる板状品があるが、平成15年度調査で検出した押付板が計3枚、今回の調査で計22枚の押付板と考えられる部品がある。これより「胴丸」は計13領存在するものと思われる。ただ数量については小札類の下に存在するものや、欠損しているものなどがあり現時点での確定は困難で、13領以上となることも考えられる。

鉄製小札は大きく7～8の群に分かれており、個々の群の大半は甲（よろい）の長側（ながかわ）を構成するものと思われる。鉄製小札の形態については鎧の附着もあり確定できていないが、碁石頭伊予札（二山、三山）は確認でき、本小札も含まれる可能性がある。幅2～3.3cm、長さ6～7cm代のものが主体となっており、幅1cm以下の所謂奈良小札は確認できていない。上下の幅に差がある鎧の使用される鉄札も存在するが、これは6枚が上下を交互に入れ替え横に綴じられた状態で検出されており、鎧の札としては使用されていないものと考えられる。このことは出土した甲の中に様々な札を寄せ集めて1領とした「仕返し」系のものが含まれることを示している。

金具廻り（胸板・脇板・押付板など）は殆どのものが金銅製覆輪を持つが、周縁部を捻り返しただけのものも存在している。押付板の足は一字文字式が大半であるが、切欠式も見られる。金具廻りには革や漆膜と思われるものが附着しており、押付板の1つには朱漆が見られた。

八双鉗は菊鉗と思われるが残存状態は悪い。胸板に2個一対で3箇所打たれるものと1個3箇所の2種類がある。八双金具を伴うものが少なく、金具自体も無紋と見られるがエックス線撮影の結果を待ちたい。

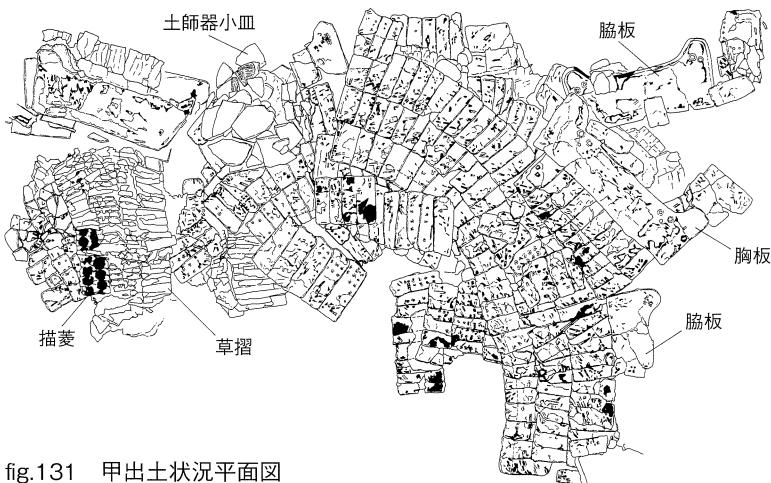


fig.131 甲出土状況平面図



fig.132  
端谷城跡全体図  
(S = 1 : 2,000)

#### 調査の成果

- (1) 端谷城本丸部の最高所にある「物見台」上に、瓦葺の建物の存在を確認できた。
- (2) これに近接した場所で瓦葺の土蔵状の「塼列建物」が検出された。
- (3) 物見台上の建物と塼列建物は使用瓦からみて1560年代に両者一体となって建築された可能性がある。
- (4) 出土瓦の文様は性海寺、鶴林寺出土瓦と共に、当端谷城の築造に当たってこれらの寺、乃至寺の背後に存在するであろう勢力（権力）と何らかの関係を持ったものと推定されること。また鬼板に「戎像」「宝袋」など類例の少ない特殊なものを浮き彫りとする。
- (5) 塼列建物から甲冑が検出されたことで城郭に於ける土蔵状建物の使用形態の一端が明らかとなった。
- (6) 鎧と兜、刀剣類は保管場所が異なっていたことも考えられる。
- (7) 現在残る甲冑は殆どが各地の寺社に奉納・伝世されたもので、発掘調査で城跡から全形をほぼ残す甲冑が出土したことは全国的に見ても極めて稀であり、甲冑の調達、保管・管理、他の武器・武具との取り扱われ方の差異、性能面での実態、戦いの具体相など様々な問題点に迫れる資料を得ることが出来た。

### III. 平成17年度の保存科学調査・作業の概要

平成17年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

#### 遺物の保存科学

##### 木製品

東灘区の森北町遺跡からは23次調査で木簡が1点、中世の流路中より出土した。目視では判然としなかったが、赤外線カメラによる観察を行なったところ、「蘇民将来子孫也」との墨書が判読できた。これは中国故事に由来する呪符であり、中世以降に流行した民間信仰の遺産である。特徴的な事象としては、「蘇」の文字の部首のうち、「魚」と「禾」が左右で逆転することであるが、古文書等にみえる「蘇」にはこの表記をするものが散見し、あえて特殊な例とはいえないようである。

保存処理については、墨書を重視して全体に明るい色調に仕上げることをめざし、ステアリルアルコールのエタノール溶液を含浸することにした。まずはエタノール100%に浸漬して遺物中の水分を除去し、ステアリルアルコール溶液20%より始め、約1ヶ月をかけて最終濃度約98%まで段階的に濃度を上げて含浸処理を行ない、処置を完了した。現在は恒温（23.5°C）恒湿（55% R H）の収蔵庫において保管している。

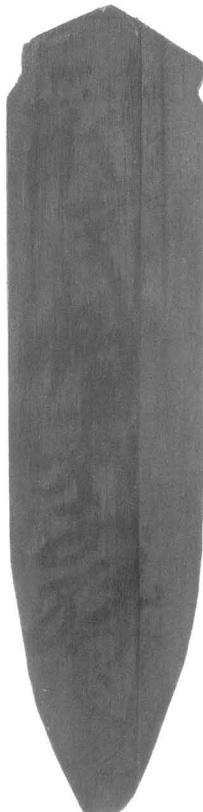


fig.133 森北町遺跡出土「蘇民将来札」



fig.134 赤外線カメラ画像

## 金属製品

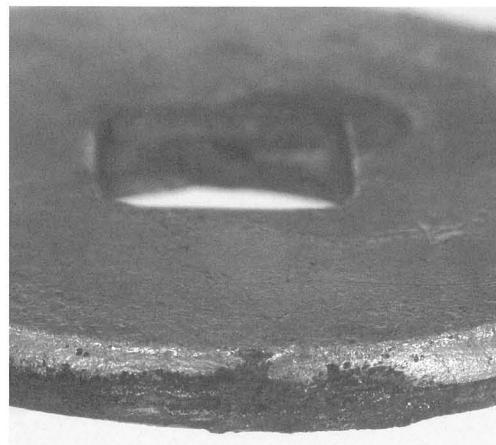
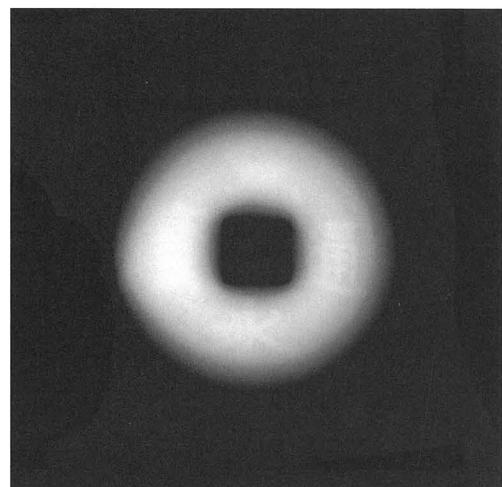
平成16年度、36次調査において、近世寺院の墓地が調査され、多量の金属製品が出土した。そのうち特筆すべきものについて記述する。

寛永通寶などの銅銭は本調査においても百数十点を超える量が出土しており、遺跡を特徴付けている遺物であるが、その中に特殊な銭貨も見出すことができる。Fig.135はいわゆる寛永通寶の「文錢」であるが、主銭文の面が金色の金属で覆われ、「寛永通寶」の文字が埋没している。X線透過観察では内部に銭文が観察できることから、オリジナルの寛永銭に何らかの処置を施したものであることがわかった。

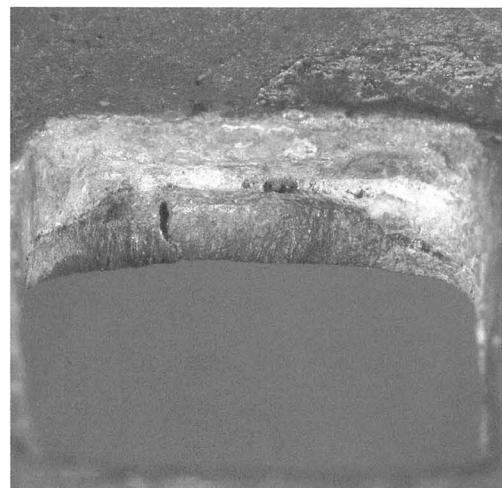
銭の片面を覆っている金属の素材とその手法を解明するため、(財)大阪市文化財協会のご協力を得て、非破壊による蛍光X線分析調査を実施した。結果、被覆していた金色の金属からは銅と亜鉛が検出され、銭本体との隙間に介在していた物質は銅をまったく検出せずに、スズと鉛が検出された。また、銭本体については少量の鉛とスズ、砒素を含みつつも、マトリックスの銅が非常に高いほぼ純銅であることが判明し、通常の流通貨幣ではない可能性が示唆された。以上のデータをもって、寛永銭の片面に真鍮板が半田で接着されたものであることがわかった。類例として、寛永銭に金箔を貼る例は棟上げの撒き銭や記念銭としての使用が知られるが、真鍮板を貼り付けるものは管見にない。今後の調査により使用法の解明が必要であろう。



左) fig.135  
兵庫津遺跡出土  
特殊銭貨  
右) fig.136  
X線透過画像



左) fig.137  
外縁マクロ写真  
右) fig.138  
孔内部顕微鏡写真



## 遺構の保存科学

脆弱遺物の

取り上げ

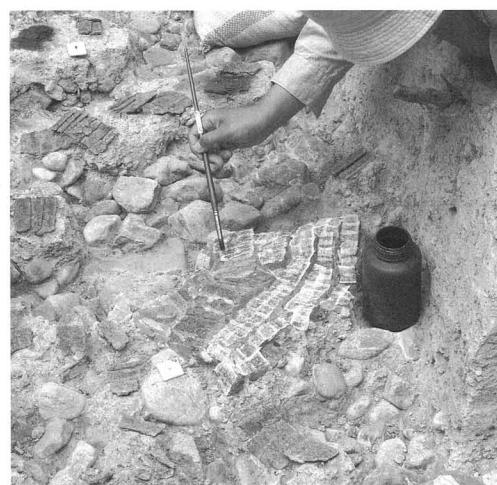
端谷城は西区寺谷に所在する戦国期の山城である。平成17年度の5次調査では、本丸に存在した土蔵跡の礫敷きの床面から、14領以上におよぶ小札甲が出土した。甲は蔵倒壊時の衝撃で破損してはいたが、各小札同士がある程度連結した状態で埋蔵されていたため、できるだけ出土時の状態を保持したまま取り上げる方針を立てた。なお取り上げの際には床面を破損しないようにとの配慮のため、遺物のみを剥ぎ取る手法を講じた。

取り上げに先んじては表面をある程度クリーニングし、オルソ写真等による記録を取得した。その後、遺物表面をアクリル系合成樹脂（パラロイドB72）でコーティングした。また出土甲には鉄小札と革小札が使用されており、革小札に施された漆膜が甲本体から浮いていたため、酢酸ビニル系合成樹脂により固定した。さらにバックアップとして、ガーゼをアクリル系エマルジョン合成樹脂（パラロイドNAD10）で貼付し、その上にパテタイプのエポキシ系合成樹脂（NIDEK520）を盛り付けて補強した。礫と遺物の隙間には土砂の流入もみられたが、両者が接触しているものもあり、エタノールを注射器にて注入しながら慎重に剥がし、取り上げた。

取り上げ後の遺物は埋蔵文化財センターに搬入し、エックス線透過観察や実測などの事前調査・記録を行ないながら、現在も保存処理作業を実施している。



左) fig.139  
端谷城甲出土状況 1  
右) fig.140  
端谷城甲出土状況 2



左) fig.141  
取り上げ作業  
(ガーゼ貼付)  
右) fig.142  
取り上げ作業  
(エポキシ樹脂)



遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
長田野田	1	鉱滓	1
長田野田	2	鉄製品	1
乙木		鉄釘	1
花隈城	2	鉄釘、鉱滓	6
吉田南	16	銅製品、鉱滓	4
琴の緒町3丁目		銅錢	1
元町	4	鉄釘	1
御影山手	2	鉄鎌、鉱滓	5
御藏	57	鉄製品、銅錢、鉱滓	5
住吉宮町	40	鉄製品	6
出合	34	鉄釘、銅錢	11
新方	45	鉄釘、鉱滓	11
森南町	4	鉱滓	1
森北町	24	鉱滓	1
生田	4	鉄釘、鉱滓、銅錢	10
西郷試掘		鉄釘	6
淡河城跡	4	鉄釘	2
雲井	20	銅錢	1
南仲町		銅錢	1
楠・荒田町	37	鉄釘、鉱滓、銅錢	52
二葉町	19-1	鉄釘	6
二葉町	19-2	鉄釘、鉱滓	12
日暮	24	鉄釘	1
日暮	26	鉄釘	1
日暮	28	鉄釘	1
八多中		毛抜き	1
兵庫城趾		鉄釘、銅製品	13
兵庫津	39	鉄釘、銅錢、銅製品	41
計224			

表9. 平成17年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
生田	4	斎串、井戸枠材、曲物	87
森北町	23	呪符木簡	1
八多中	1	柱材	1
二葉町	19-1	砧	1
二葉町	19-2	木製品	1
計91			

表10. 平成17年度出土木製品

遺跡名	樹種(生材)	樹種(炭化材)	材質
生田遺跡4次	87点	4点	217点(礫種)
兵庫津遺跡36次			2点(顔料)

表11. 平成17年度自然科学分析委託

## 平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報

---

平成20年3月 印刷

平成20年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 デジタルグラフィック株式会社

神戸市中央区弁天町1-1

TEL 078(371)7000

---

神戸市広報印刷物登録 平成19年度 第339号 (広報印刷物規格 A-6類)